

福島県西白河郡  
矢吹町文化財調査報告第8集

天 開 遺 跡  
発掘調査報告書

昭和61年10月  
矢吹町教育委員会

福島県西白河郡

矢吹町文化財調査報告第8集

# 天 開 遺 跡

## 発掘調査報告書

昭和61年10月

矢吹町教育委員会

## 序 文

天開遺跡調査報告書は、矢吹町調査報告書第8集として刊行することになりました。

ここは矢吹町三城目地区と鏡石町成田地区との境に位置し、周辺には数多くの文化財が散乱する阿武隈川流域で早くから文化の開けた所であります。

今回は工場誘致に伴い発掘調査を実施しましたが、実施に当っては日本考古学協会会員永山倉造先生に依頼し、又須賀川市博物館長はじめ職員の皆さんに大変なご協力をいただきました事、心より感謝申し上げる次第であります。

現在町としては、文化財めぐりをはじめとして、民族芸能の掘りおこしと伝承、文化財案内板の設置、補修など文化財の保護、保全を行っており、今後も町民の方々に文化財について一層のご理解とご協力をお願いするものであります。

最後に、この報告書が今後の調査、研究にご活用いただければ幸いに存じます。

昭和 61 年 10 月 1 日

矢吹町教育委員会教育長

円 谷 行 雄

## 調 査 要 項

- 遺 跡 名 天開遺跡
- 所 在 地 福島県西白河郡矢吹町天開 450 ・ 451 番地
- 調 査 主 体 矢吹町教育委員会
- 調 査 期 間 昭和 57 年 6 月 21 日～ 57 年 10 月 29 日
- 調 査 組 織 担当者 永山倉造（日本考古学協会会員）渡辺 功（日本考古学協会会員）  
調査員 真船高年 永山祐三（阿武隈考古学研究会会員）大野昌子（阿武隈  
考古学研究会会員）
- 協 力 者 関根保夫、小針久子、渡辺恵美、伊藤とし子、円谷かよ子、猪合成子、泉川  
八重子、伊藤貴美子、上野力子、太田クニヨ、太田米子、小林和子、佐久間  
季盛、関根礼子、関根サト、関根利枝、関根稚子、関根侑司、村上紀子、村  
社和彦、諸根カツヨ、堀井和子、井上敦雄（東北学院大） 小幡成雄（大正  
大学）柴田令子（阿武隈考古学研究会会員）
- 事 務 局 前教育長 酒井正敏、前教育次長 大沼重一、前主幹 小坂橋考助、前社会  
教育主査 須藤栄美、教育長 円谷行雄、教育次長 大竹光典、中央公民館  
長補佐 星圭之助、社教係長 長岐敬一、派遣社教主事 中野英二、主事  
矢部 静、主事 阿部正人

## 例 言

1. 本書は、矢吹町天開 450・451 番地に所在する天開遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本調査は（北越ヒューム管株式会社）による工場立地に先だつ、確認調査である。
3. 本書に掲載した図面は真船高年、関根保夫、小針久子、渡辺恵美が実測、トレースを行ない、写真撮影は永山祐三が行ない、報告書作成には大野昌子、柴田令子が参加した。
4. 本書に収録した遺構遺物の実測図、拓影は次の縮尺を原則とし、それぞれにスケールを付している。遺構  $\frac{1}{60}$ 、カマド  $\frac{1}{30} \cdot \frac{1}{40}$ 、土器・その他  $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4}$ 。
5. 本書の執書及び編集は永山倉造が担当した。発行の責任は矢吹町教育委員会にある。
6. 遺跡位置図は、国土地理院（五万分の一）地形図を使用した。

# 目 次

## 序 文

## 調査要項

## 例 言

### 第1章 序説

第1節 天開遺跡の位置・地形・地質・気候 ..... 1

第2節 天開遺跡の歴史的環境 ..... 1

### 第2章 天開遺跡の調査経過 ..... 5

第1節 調査に至る経過と調査組織 ..... 5

第2節 発掘調査日誌 ..... 5

### 第3章 天開遺跡の遺構と遺物 ..... 9

#### 第1節 第1号住居跡～第11号住居跡 ..... 9

第1号住居跡 (S101) ..... 9 第2号住居跡 (S102) ..... 17

第3号住居跡 (S103・12) ..... 25 第4号住居跡 (S104) ..... 29

第5号住居跡 (S105) ..... 33 第6号住居跡 (S106) ..... 40

第7号住居跡 (S107) ..... 43 第8号住居跡 (S108) ..... 45

第9号住居跡 (S109) ..... 51 第10・11号住居跡 (S110・11) ..... 55

#### 第2節 掘立柱建物跡 ..... 59

第1号建物跡 (SB01) ..... 59 第2号建物跡 (SB02) ..... 61

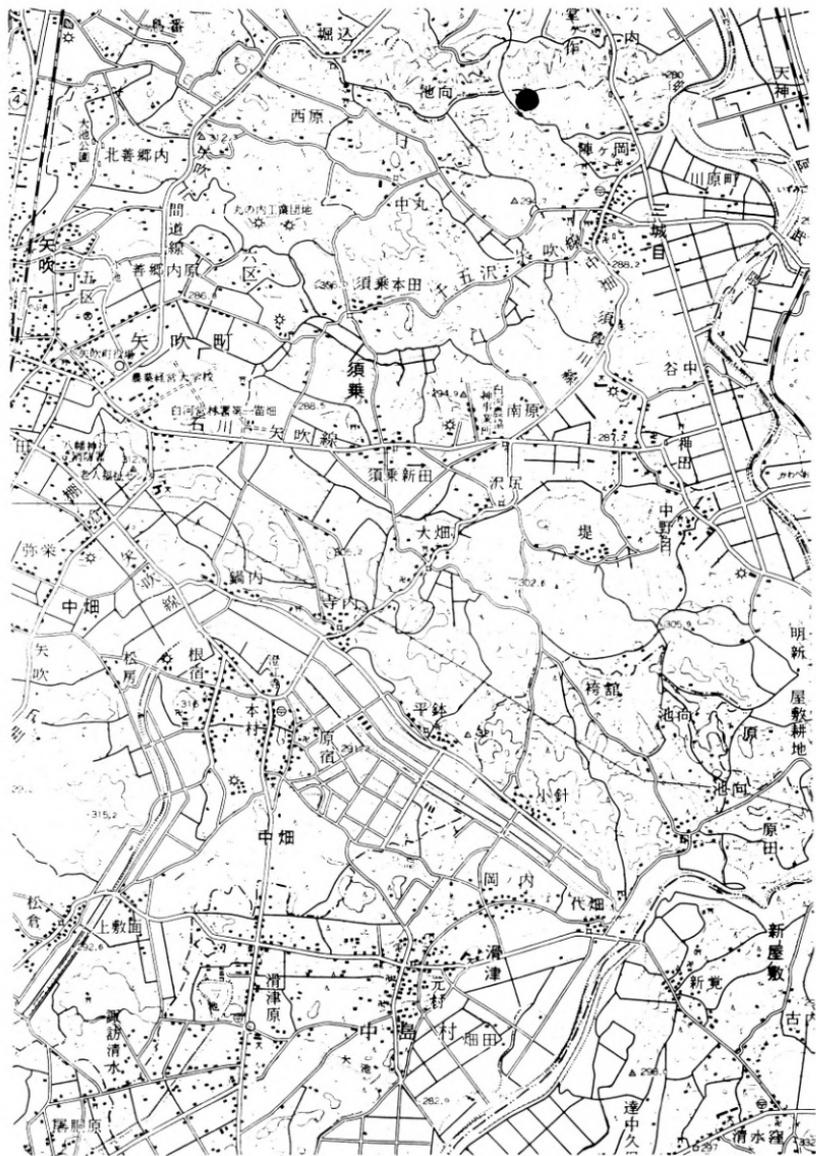
#### 第3節 その他の遺構 ..... 62

第1号土坑跡 (SK01) ..... 62 第2号土坑跡 (SK02) ..... 64

第1号遺物包含層 (SX01) ..... 64 第2号遺物包含層 (SX02) ..... 70

#### 第4節 遺構に伴なわない出土遺物 ..... 72

#### 第5節 まとめ ..... 74



遺跡位置圖 ( 1 : 50000 )

# 第 1 章 序 説

## 第 1 節 天開遺跡の位置・地形・地質・気候

**位置** 天開遺跡は、福島県矢吹町三城目地区天開に所在する。矢吹町の北東部にあたり、北は岩瀬郡鏡石町成田との町境に位置している。東に阿武隈川が流れ、石川郡玉川村大字竜崎に接している。福島県南地方の中央に位置する地方都市である。

**地形** 福島県の県南地方は東部の阿武隈山地、南部の八溝山形西部の奥羽山脈の山間部と、それに囲まれた盆地状の低地とからなっている。矢吹町は、阿武隈川上流域の盆地部に位置し、台地と丘陵からなる高原地帯である。この地域は矢吹が原と呼ばれ、戦時中は陸軍の飛行隊があった。その昔は行方原と呼ばれ、須賀川、鏡石、白河にかけて平坦な台地が続いている。

東は阿武隈川により、西を釈迦堂川により浸蝕され、河岸段丘と氾濫原を形成している。阿武隈川の東岸から西にのびる台地は樹枝状に東流する小河川が発達し複雑な地形を呈している。

**地質** この地域の基盤は白河構造線にそった断裂運動による火山活動によって形成されたグリーンタフ層である。約 2500 年前の新第三紀初頭の地層である。その上に約 200 万年前の鮮新世末期から、約 110 万年前の更新世初期にかけて、火山による火砕流堆積物が厚くつもっている。鈴木敬治（1968）により DⅠ層・DⅡ層・DⅢ層と呼ばれている。これらは須賀川石・三城目石として石材として利用されている。

矢吹原の丘陵部は白河ローム層（鈴木：1968）と呼ばれる降下火山灰によって直接覆われ、これに対して台地部では DⅠ層の上に郡山層と呼ばれる泥・砂・礫などがあり、ラミナの発達した水成堆積物が覆い、その上に白河ローム層が堆積している。

**気候** 矢吹町は東西を山地に囲まれているため、日照時間は較差があり、内陸性気候で降雨量も少ない。1 年の平均気温は 11 度前後で、夏は比較的短く、冬はあまり寒くないが夏よりはかなり長い。

植生は落葉広葉樹を主とする温帯林に属している。

## 第 2 節 天開遺跡の歴史的環境

矢吹地方の歴史は旧石器時代まで逆のぼり・三城目の成田・陣ヶ岡遺跡からは、頁岩を

用いて石刃技法により製作されたナイフ形石器が発見され、成田型刃器の標式遺跡となっている。

縄文時代は最後の氷河期が終った1万年前ころから気候が温暖となり、それにつれて、土器の発明による新しい文化が生みだされた。縄文時代と呼ばれる縄目のついた特徴のある土器の出現と、また石器も磨製石器や石鏃などが作られ、多様化してくる。それに阿武隈川を溯る鮭・鱒など魚類の魚労により、縄文人の生活内容は豊かになり、生活範囲は拡大し、これにつれて遺跡は阿武隈川流域から山間部にまで分布している。

弥生時代 この時代の文化は稲作を中心とした農耕と石器を使用した。西日本では金属器が用いられている。矢吹近辺では、白河市天王山遺跡、須賀川弥六内遺跡、石川鳥内遺跡、泉崎村踏瀬大山遺跡などがある。須賀川市弥六内遺跡は、弥生時代の後期の堅穴住居26軒が検出された、東北地方有数の大遺跡である。

古墳時代 この時代の遺跡は、この時の一般の集落跡のほか、高塚の墳丘を有する古墳や凝灰岩を掘り込んでつくった横穴墓が出現する。古墳は主として阿武隈川とこれにそそぐ支流の、河川を臨む河岸段丘上に位置している。前期古墳は須賀川市和田・中宿にあるが、後期古墳になると、矢吹町三城目地区に多く見られる。鬼穴古墳からは円筒埴輪や形象埴輪の破片が発見されている。またこの古墳の主体部は横穴式石室で両袖形で一枚石の奥壁を有し、巾約2m、である。遺物は金銅製太刀、鉄鏃、刀子、琥珀製素玉等である。

谷中古墳群は鬼穴古墳の東方600mにあり、阿武隈川の氾濫原中に位置する3基の古墳群である。このうち南にある1号墳は、古くから円筒埴輪が出土することで知られており、昭和50年範囲確認調査を行ない、長軸50mの前方後円墳であることが推定されている。これらを整理すると、矢吹町の後期古墳は、谷中1号墳→鬼穴古墳となり、6世紀末から7世紀にかけての古墳と推定される。

律令時代 大化の改新により矢吹地方は、道奥国、白河郡となり、畿内にあった大和朝廷の支配下に組込まれた。その後養老2(718)年には石背国に属したが、間もなく陸奥国に統合された。白河郡は17郷を有する大郡で、郡衙は、泉崎村の関和久遺跡であり、これを支配した白河郡司は支部子老一外正五位一神護景雲3(769)年、大領外七位上奈須直赤竜一嘉祥元(848)などの古記録がある。

この律令時代に当る奈良・平安時代の遺跡は多く発見されており、矢吹町内には約80ヶ所に及んでいる。

この時代の公道とされる山道は、福島県内は阿武隈川の西岸に通じていたと推定されており、県内には7ヶ所の駅と3ヶ所の伝馬が置かれた。

白河郡の郷は大村、丹波、松田、入野、鹿田、石川、長田、白川、小野、駅塚、松戸、

小田、藤田、屋代、常世、高野、衣上の17郷からなり、矢吹町は松戸郷に当ると考えられ、郷の中心は、古代の遺跡が集团的に検出される中畑地区と考えられている。現在まで調査された遺跡は松倉の「寺山」「新池原」中畑の「太子堂」「行馬」「やらい」「森郭」「下荒具」「国神」「三城目」「古館」「本城館」「吉作」等をあげることができる。

山道は松戸郷を南北に通じていたと考えられている。その通路を想定すれば、白河郡衙のある関和久の近くに松田の駅家があり、松倉—中畑—三城目—成田（鏡石町）—前田川（須賀川）—芦田塚—中宿—岩瀬の駅家の路線が考えられる。

### 天開遺跡の位置

天開遺跡は山道に添って発達した古代集落があった三城目の一集落であったと考えられる。

## 周辺遺跡地名表

遺跡名	所在地	種別	通称・略称	主な出土品	備考	年代	図記番号
101	花 岡 山	矢吹字花岡	雑	鉄器	縄文・弥生		30
102	寺 野 作	* 寺野町	雑	土師器・土師器			30
103	大 科	* 寺次科	雑	鉄器	弥生		30
104	一 本 木	中畑新田字一本木	雑	鉄器	弥生		12
105	赤 沢 山	大和字赤沢	山科	古瓦	縄文		30
106	赤 沢 A	* 赤沢	雑	鉄器	弥生		30
107	赤 沢 B	* 赤沢	山科	鉄器	土師		30
108	平 山	* 平山	雑	鉄器	土師		30
109	黒 石 A	* 黒石	雑	土師器	土師		30
110	曙 の 上	* 曙ノ上	雑	土師器	土師		30
111	井 戸 尻	* 井戸尻	雑	土師器	土師		30
112	三 神 森	* 三神森	雑	土師器	土師		30
113	黒 目 平	字黒目平	雑	鉄器	土師		30
114	山 王	* 山王	雑	鉄器	土師		30
115	西 林	* 西林	山科	古瓦	土師		30
116	北 田	字北田	雑	土師器	土師		30
117	芥 沢 A	* 芥田	雑	土師器	土師		30
118	上 / 原	* 上ノ原	雑	鉄器	土師		30
119	藤 沢	大和字藤沢	雑	鉄器	縄文		縄文後期
120	黒 石 B	* 黒石	雑	鉄器	縄文		縄文後期
121	芥 沢 B	字北田	雑	土師器	縄文		縄文後期
201	藤 田	中畑字藤田	雑	鉄器	土師		縄文・弥生・石器
202	藤 田山古墳	* 寺中畑	山科	古瓦			円墳

遺跡名	所在地	種別	主な出土品	備考	年代	図記番号	
203	新 山	中畑字中畑	雑	鉄器	土師		縄文・弥生
204	黒山古墳群	* 寺中畑	山科	古瓦			円墳
205	理 道 上	* 寺中畑	雑	鉄器	縄文		縄文(前期)
206	寺 山	* 寺山	雑	鉄器	土師		土師器・土師器(前期)
207	寺山古墳	* 寺山	山科	古瓦			円墳
208	人 久 保	* 寺山	雑	鉄器	土師		土師器
209	太 子 堂	* 寺山	雑	鉄器	土師		土師器・土師器(前期)
210	五 斗 崎	* 寺山	雑	鉄器	弥生		土師器
211	* 2	* 寺山	雑	鉄器	土師		
212	曙 内 池	* 寺山	雑	鉄器	土師		
213	登 喜 内	* 寺山	雑	鉄器	土師		
214	黒 山 下	* 寺山	雑	鉄器	土師		縄文器
215	黒山古墳群	* 寺山	山科	古瓦			圓・長円・人骨
216	中心古墳	* 寺山	雑	土師器	土師		縄文
217	下 荒 具 A	* 寺山	雑	鉄器	弥生		土師器
218	* B	* 寺山	雑	鉄器	土師		縄文
219	* C	* 寺山	雑	鉄器	縄文		縄文
220	下 荒 具 古 塚	* 寺山	山科	古瓦			円墳
221	新 内	* 寺山	雑	鉄器	土師		土師器
222	黒 山	* 寺山	雑	鉄器	縄文		縄文
223	北 原	* 寺山	雑	鉄器	土師		縄文・土師器
224	北 原 古 塚	* 寺山	山科	古瓦			一宮一石
225	藤 田	* 寺山	雑	鉄器	土師		土師器

遺跡名	所在地	地質	遺跡の種類	主な出土品	備考	調査年度	図号
226	森 野	中野市森野777-30 宇治郡森野10-124	住居跡	土 器	土師瓦(腰懸瓦) 土師瓦(右1)・右2(2枚)		93-100 94-70
227	国 神	宇治郡森野80-113	集 居 地	土 器	石製石 石製石(土師瓦) 403		94-70
228	6-12 武	宇治郡6-12	住居跡 瓦葺	土師瓦 土 器	青目瓦・銅鏡 403・1枚	30	71-77 106
229	越 中 山 1	宇治郡	集 居 地	土 器	中野土師・石製瓦以下		7
230	2	宇治郡	集 居 地	土 器			
231	豊 山	宇治郡442	水田	散 布 地	土師瓦(腰懸瓦) 高麗山式瓦 土 器		14-15
232	谷 中 中	宇治郡44	住居跡	土 器	新羅土師 土 器 403		
233	林 崎	宇治郡417-420	水田	散 布 地	土 器		
234	丸 山	宇治郡51	集 居 地	土 器	新羅土師		
235	越 中 内	宇治郡122	集 居 地	土 器	新羅土師		
236	熊野古墳群	宇治郡54 129	山形	古 墳	円墳		
237	寺 内	宇治郡	集 居 地	土 器			
238	寺内古墳	宇治郡	山形	古 墳	円墳		
239	堂 下	宇治郡40 402	集 居 地	散 布 地	新羅・土師瓦 土 器		13
240	大 久 保	宇治郡401 402	集 居 地	土 器	土 器		40-41
241	杜 井 池	宇治郡401-402	集 居 地	土 器	新羅・新羅土師		
242	越 中 堀	宇治郡444	土田	散 布 地	土 器		
243	越 中 堀	宇治郡444	水田	散 布 地	土 器	30	399
244	松 崎	松崎	集 居 地	土 器	新羅・新羅土師		
245	柏 山	柏山	水田	散 布 地	土 器	30	418-419
246	北 芝	宇治郡495	水田	散 布 地	新羅・土師瓦		
247	越中古墳群	宇治郡	山形	古 墳	円墳		
248	草 池	大畑字大畑	集 居 地	土 器			

遺跡名	所在地	地質	遺跡の種類	主な出土品	備考	調査年度	図号
272	七 軒 2	石倉字石倉74	住居跡	土 器	土 器	31	37

301	赤 池	神田字神田赤池455	集 居 地	散 布 地	新羅・土師瓦		
302	越 中 代	宇治郡	集 居 地	土 器			
303	越 中 内	宇治郡	集 居 地	土 器	新羅土師	30	436
304	新 谷 中	宇治郡	住居跡	土 器	石製瓦(土師)		
305	鬼式古墳群	宇治郡 荒瀬山形	水田	古 墳	土 器	403	435-27 27
306	谷中古墳群	宇治郡	水田	古 墳	土 器	403	16-17 21
307	小 文	熊野字小文	集 居 地	土 器	土 器	30	429
308	越 中 堀	三城字宇治・堀	山形	古 墳	新羅土師	30	424 1-4
309	赤 井	宇治郡	集 居 地	土 器			
310	林 野	宇治郡	集 居 地	土 器			
311	久藤山古墳群	宇治郡	山形	古 墳	土 器	30	434-34 37
312	藤戸龍古墳	宇治郡	山形	古 墳	土 器	30	438-29
313	仏堂山古墳群	宇治郡	山形	古 墳	土 器	30	433-29
314	藤 野 古 墳	中野市藤野	山形	古 墳	土 器	30	437
315	越中古墳群	明新字越中	山形	古 墳	土 器	土 器	441-35
316	第三古墳	宇治郡	山形	古 墳	土 器	30	439-80-81
317	乙 江 武	宇治郡	集 居 地	土 器			
318	藤野古墳群	宇治郡	集 居 地	土 器			
319	西 堀	宇治郡	水田	散 布 地	土 器	30	440

249	谷 地 向	大畑字大畑40	集 居 地	土 器			
250	森 野	宇治郡	集 居 地	土 器			
251	伊 原 山	宇治郡	集 居 地	土 器			
252	越 中 下	宇治郡	集 居 地	土 器			
253	武 崎	宇治郡	集 居 地	土 器			
254	丸藤山古墳群	宇治郡	山形	古 墳	円墳		
255	七 軒 1	石倉字石倉777-74	集 居 地	土 器	新羅土師		
256	上 原 山	宇治郡	集 居 地	土 器			
257	新 堀 堀	宇治郡	水田	散 布 地	土 器	30	27
258	向 堀	宇治郡	水田	散 布 地	土 器	30	30
259	阿 部 武	宇治郡	集 居 地	土 器	新羅・新羅土師		
260	宮 新	宇治郡	集 居 地	土 器			
261	藤野山古墳群	宇治郡	山形	古 墳	土 器		
262	北 向	宇治郡	集 居 地	土 器			
263	向 井	宇治郡	集 居 地	土 器	新羅土師		
264	堀 堀	宇治郡	集 居 地	土 器			
265	白 松 山	宇治郡	集 居 地	散 布 地	土 器		
266	若 草 山	宇治郡	集 居 地	土 器	新羅土師		
267	小 龍 崎	宇治郡	集 居 地	土 器			
268	大 久 保	宇治郡	集 居 地	土 器	新羅土師		
269	金堂古墳群	宇治郡	山形	古 墳	円墳		
270	越中無人塚群	宇治郡	山形	古 墳	円墳	30	28-34
271	藤 野 堀	宇治郡	水田	散 布 地	土 器	30	

## 第 2 章 天開遺跡の調査経過

### 第 1 節 調査に至る経過と調査経過

矢吹町天開地区に工場立地約 1 万㎡を予定する矢吹町と北越ヒューム管株式会社と共同で遺跡の確認調査を行う覚書を取りかわし、11 月 25 日から調査担当者に須賀川市博物館学芸員(日本考古学協会員)永山倉造氏の指導により矢吹町教育委員会が地元の地権者及び作業員の協力を得て調査を行った。

天開 450 番地を中心に 9 トレンチを設定し調査したところ、掘立柱を伴う建物遺構をはじめ竪穴式住居数棟を数える遺構と須恵器製硯などを伴う土器片多数が出土する集落跡を確認されるに至り、それらを福島県教育委員会及び北越ヒューム管株式会社に報告し、指導と指示を仰ぐ一方、当該遺跡にかかる埋蔵文化財発見調査に必要な発掘調査計画書を作成し、工場建設に伴う緊急発掘調査を実施することを決定した。

今回発見された遺跡については、旧小字名天開山を参考としながら、古来からこの地区を通称して天開と称している。その通称名をとって「天開遺跡」とした。

### 第 2 節 発掘調査日誌

#### 天開遺跡

昭和 57 年 6 月 21 日(月) 天開遺跡の雑木の伐採作業。

7 月 24 日(土)～7 月 25 日(日) 重機による表土除去作業。

7 月 26 日(月) 本日より天開遺跡の調査開始。テントの設定、発掘用具の搬入。

7 月 27 日(火)～7 月 30 日(金) 重機による表土除去作業中、一部に住居跡を確認。30 日付にて重機による表土除去作業を終了。

7 月 31 日(土)～8 月 3 日(火) 各遺構確認面の清掃。

8 月 4 日(水)～8 月 5 日(木) A～H-1～10(10m×10m)グリッド設定。

8 月 6 日(金)～8 月 7 日(土) 各遺構の掘り込み作業開始。

8 月 9 日(月) 一部住居跡を検出、精査、実測。

8 月 10 日(火) 一部住居跡の写真撮影。町議員、職員等が来跡。

8 月 11 日(水)～8 月 19 日(木) 各遺構のベルトを設定し、一部を残し、掘り込み作業。

8 月 20 日(金) ベルトのセクション実測、写真撮影後、ベルトの取りはずし。

8 月 21 日(土)～8 月 28 日(土) 各遺構の掘り込み、精査、実測。

8 月 30 日(月)～8 月 31 日(火) B～C-4～5 グリッドにトレンチ 1 本を設定し探りを入れる。並行して土坑の確認、掘り込み作業を行なう。

9月1日(水)～9月2日(木) ベルトのセクション実測、写真撮影、後ベルトの取りはずし。

9月3日(金)～9月19日(日) 各遺構の精査、実測、一部を写真撮影。

9月20日(月) 遺構面全体を清掃し、写真撮影。

9月21日(火)～9月22日(水) 各住居跡の住穴掘り込み作業。並行してG～F-5～6グリッドを精査中、掘り方を持つ柱穴が検出され、建物跡と確認する。他の住居跡も検出する。

9月24日(金)～9月27日(月) 一部住居跡の掘り込み作業、精査、実測、写真撮影。並びに各遺構の精査、写真撮影。

9月28日(火)～9月29日(水) 平板測量開始。一方で実測。

9月30日(木)～10月18日(月) 各遺構の精査、実測。

10月19日(火) 実測者を除く一部の作業員によりテント解体。

10月20日(水) 雨天の為、出土遺物の整理。

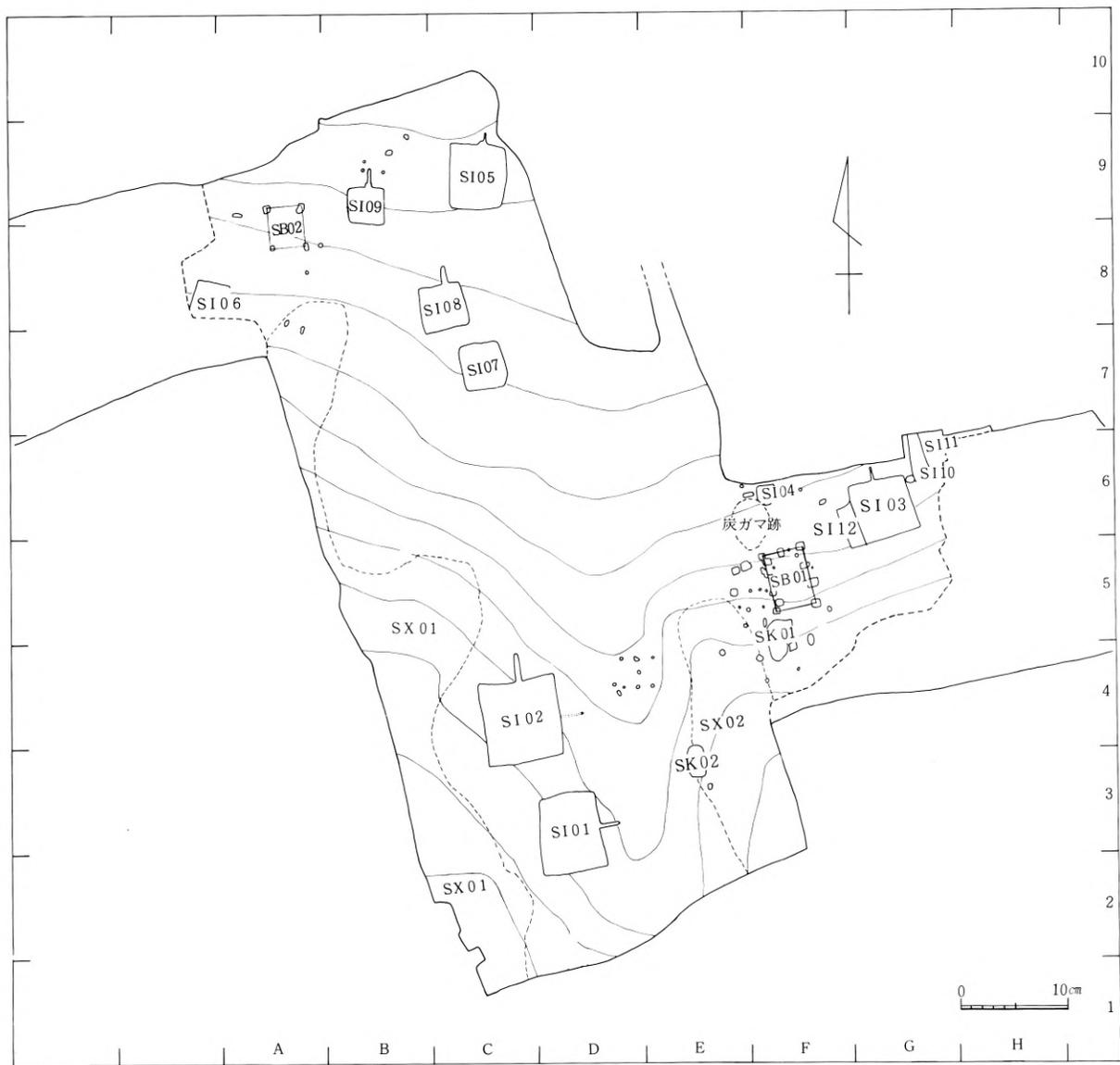
10月21日(木)～10月23日(土) 各遺構の実測。

10月24日(日) 遺構全体を清掃し、写真撮影。

10月25日(月)～10月27日(水) 各遺構の実測。

10月28日(木) 各住居跡の写真撮影。一部の作業員により、発掘用具の搬出。実測終了。

10月29日(金) 重機による埋戻し作業を行ない、本日で、現場の調査を完了する。



第1図 グリッド配置図



## 第 3 章 天開遺跡の遺構と遺物

### 第 1 節 第 1 号住居跡～第 11 号住居跡

#### 第 1 号住居跡 (第 2・3 図 第 3 図版)

〔検出状況〕本遺跡の西南、D-2グリットより検出された。天開遺跡の今回調査区の内では、最南端に位置し、西側斜面に構築されている。本住居跡は 2 号住居跡について、大規模を呈している。遺構は検出面の黒褐色土を約 35cm 掘り込んで構築されており、攪乱等による削平はされておらず、かなり良好な状態で残存している。

〔プラン・規模・方向〕東壁約 6.8 m、西壁約 6.78 m、南壁約 6.1 m、北壁約 5.4 m と、ややゆがんではいくが、南北に長い方形を呈する。また、東北・東南のコーナーは方形を呈するが、西北・南西のコーナーは丸を帯びている為、一応隅丸方形を呈する平面プランであると考えられる。床面からは 7 つのピットが検出されている。カマドは東壁に構築され、煙道を有する。本住居跡の総面積は約 41㎡、掘り方を有する住穴に囲まれた住居跡中央部の面積は約 14㎡である。中軸線は、N-3°-W を呈している。

〔覆土〕5 層からなっている。1 層とその上層を覆っていた堆積土層は黒褐色土と黄褐色土を呈している。1 層と 2 層は、自然堆積と思われるが、3 層、4 層、5 層は焼土などを含むもので、壁の自然破壊による堆積と考えられる。

〔壁・床面〕各壁ともに確認された。壁高は、東壁約 50cm、南壁約 40cm、北壁約 36cm を測るが、西壁は約 6cm を残すにすぎない。東壁・南壁・北壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がっている。西壁は床面より約 65°で立ち上がっている。床面は、黄褐色ローム層を堅くたたきしめている。

〔ピット〕本住居内に 14 個 (P1～P14) のピットが検出された。P1～P4 は本住居跡の柱穴と考えられる。いずれも明瞭な柱痕の周囲には堅くたたきしめられた黄土ローム・暗灰褐色土などが埋められている。P1、P2 の掘り方は、平面が不整形円形、断面が「V」字形を呈している。P3、P4 はどちらも、掘り方と柱穴が二つずつ接続した形を呈している。深さは約 45～65cm を測る。P13、P14 は、東壁カマドの両袖外側に相対するように位置する。長径約 150～170cm・短径約 85～100cm・深さ約 20cm の楕円形を呈する貯蔵ピットと考えられるが、遺物は何も出土されなかった。南壁中央近くに、長径約 190cm、短径約 55cm、深さ約 12cm の長楕円形を呈するピット状のものも認められたが、用途は不明である。各壁直下にも小ピットと見られるものが 8 つ (P5～P12) ほど検出され、支柱穴と考えられる。西壁の中央に P8、その線上南に P7 が検出されたが、これは出入口の門柱と考えられる。

〔周溝〕東壁・南壁・北壁側には周溝と見られるものは検出されないが、西壁側の P3 から

南へ約2m・巾約45cm、深さ約20cmを測る溝状の掘り込みと、南西コーナーに、深さ約20cmの溝状の掘り込みを呈するが、一部分であって、周溝というには程遠く、性格等は不明である。

〔カマド〕東壁のはぼ中央に構築されている。焚口部の最大巾は約180cm、焚口の巾約80cm、袖部の高さ約30cmで、焼土量が多くなり燃焼度が高かったものと推定される。右袖部に長さ約23cmの木炭片が二片混入している。住居跡外に煙道があり、その長さは約190cmを測る。煙道は、床面より約30cmの高さから伸び煙出し部分と地表の差は約45cmを測る。また、焚口部周辺は白色粘土で固められている。

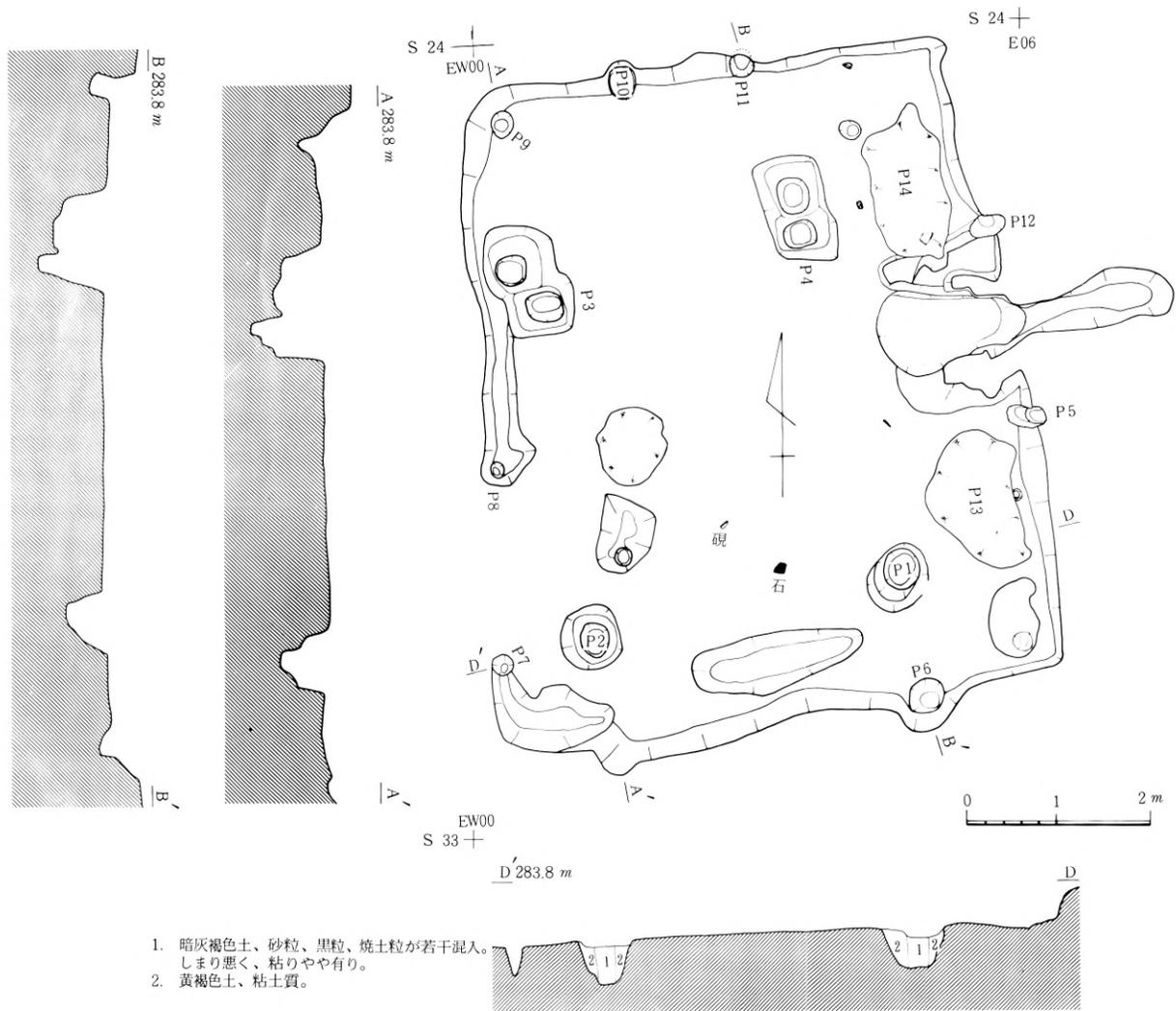
〔遺物〕本住居跡からは、本遺跡の中で他の住居跡に比べ、多くの土師器片、須恵器片、と硯片、ヘラ書き土器、長頸壺片、鉄製品等が出土した。硯片は床面に密着して出土しており遺構にともない底部に「佛」文字のヘラ書きの杯も床直上覆土二層面より出土しているもので、本住居跡に伴うものと推察される。波状文の甕はP14より出土し、その他は床面検出作業で露出したものである。

#### 土師器（第4図 第10図）

高台付杯（1・3・6）1は南東コーナー床面から出土している。約 $\frac{1}{3}$ が残存する杯である。3はカマド付近南ビット内出土で、底部と体部約 $\frac{1}{4}$ 残存する。6は覆土内2層より底部のみ出土している。高台部は欠損されている。3点共成形はロクロによる。1・3は回転ヘラ切りで切り離し、高台は張り付けられ、回転ヘラ調整が施されている。内面は黒色処理され、多方向のヘラミガキが入念に施されている。6は体面底部は回転ヘラ調整が施されている。又、「佛」と判読されるヘラミガキの線刻文字がある。内面は黒色処理され、ミガキが加えられている。

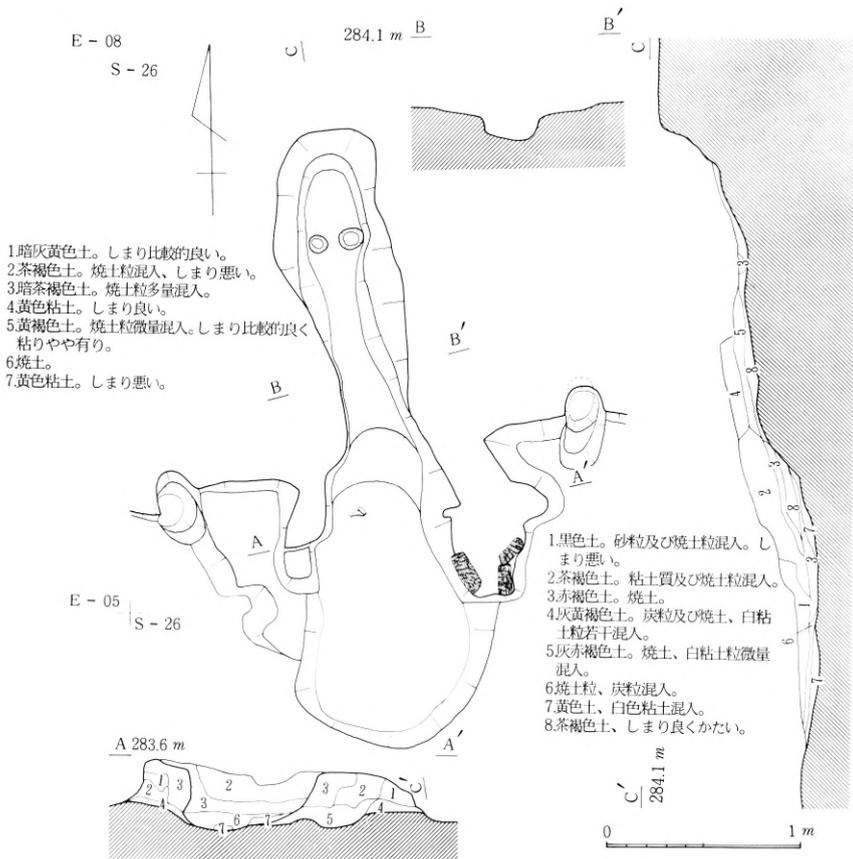
杯（2・4・5・7～12）2は覆土内第2層より出土している。体部から口縁部の約 $\frac{1}{5}$ 残存する破片で、底部は欠損され不明である。外面体部は手持ヘラケズリ後、ヘラミガキが施されている。内面は緻密なヘラミガキが施され、内外面共黒色処理されている。4・5・7～12はすべてロクロを使用している。5はカマド北側ビット内より出土しているが、その他は覆土内より出土している。8はほぼ完形であるが、4・5・7は約 $\frac{1}{4}$ 残存。9は約 $\frac{1}{2}$ 、11が約 $\frac{3}{4}$ 残存、12が約 $\frac{1}{2}$ 残存する。いずれも平底である。4・5・9～11は回転ヘラ切りで切り離し、体部下半に回転ヘラ調整が施されている。7・8・12はロクロ成形後、体部下半と底部に手持ちヘラ調整が施されている。2を除く全点共、内面に黒色処理がなされ、丁寧なヘラミガキが施されている。

甕（13）体部上半と口縁部約 $\frac{1}{5}$ 残存である。覆土内より出土している。体部より口縁部にかけて「く」の字に外傾する。成形はロクロ使用。外面体部は縦方向のヘラナデ調整され、口縁部は横ナデ調整されている。内面は黒色処理されている。口縁部の一部にミガキ



第2図 第1号住居跡実測図





第3図 第1号住居跡カマド実測図

痕がわずかにみられる。

鉄製品(第5図)

釘(14・15)14は南側ビットP1内より出土し、15は床面より出土している。断面形は、丸と方形である。14は長さ7.7cm、15は長さ9.5cmを測る。

刀子(16)覆土内第2層より出土している。刀子破片で、2片が一個体である。刀子先端が約8mm、元が1.5cmを測る。<sup>±0.5</sup>闊部は上端だけ、段を有する。

須恵器（第5図 第10図版 第11図版）

壺（17・18・20・21）17・21は付台を持った壺で、床直上2層より出土している。体部下半と底部約 $\frac{1}{3}$ が残存する。体部はやや丸味を帯びて立ち上がる。内外面共口ロ口目が残るが、21は特に内面が顕著である。色調は2点共青灰色で焼成は良好である。17の脚部に自然釉が付着している。18・20は遺構覆土内2層より出土した。18は頸部と肩部にかけて約 $\frac{1}{3}$ が残存、20は頸部のみで約 $\frac{1}{3}$ が残存である。18の頸部はハリツケによる結合痕が見られる。色調は白灰色を呈し、自然釉で光沢がある。頸径6cmを測る。20は頸部にリングがあり外面自然釉が付着している。色調は外面黄緑色を呈している。頸径7.2cmを測る。

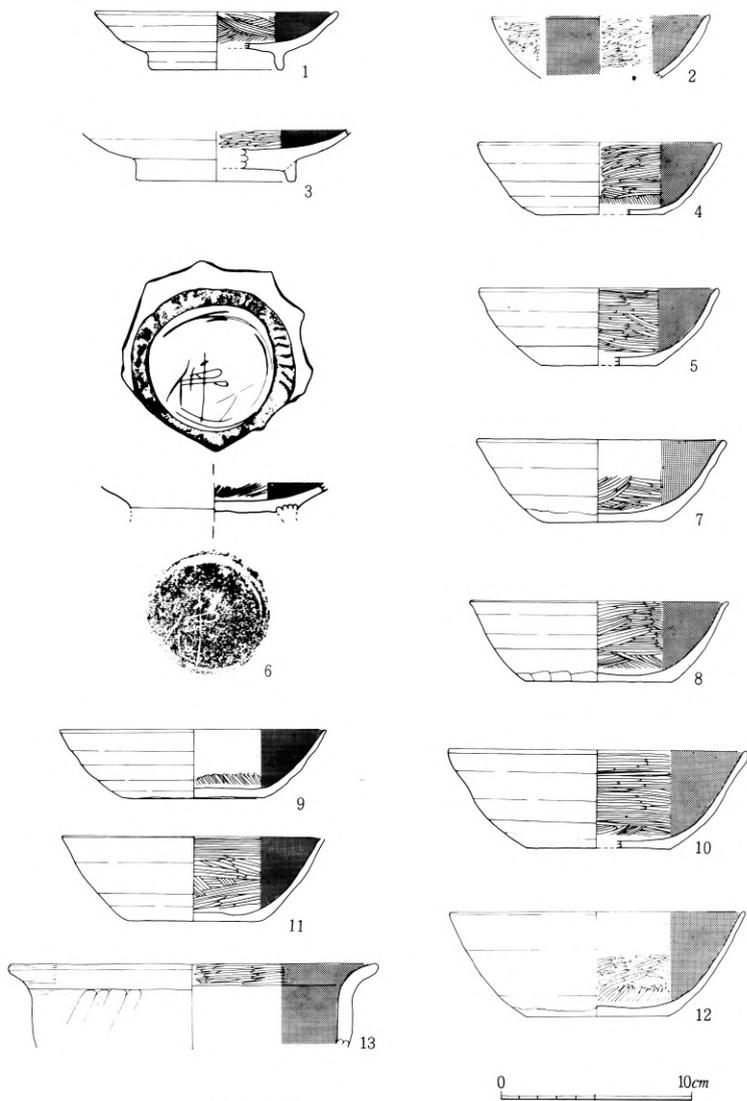
杯（19）東北角床面より出土した。口ロ口成形の平底の杯である。約 $\frac{1}{2}$ が残存する。底部より体部へ直線的に広がりを持って口縁部に至る。外面底部は回転ヘラ切りで無調整、体部下半に回転ヘラ調整が施されている。色調は外面白灰色、内面灰黄褐色を呈している。胎土は密で焼成は良好である。

碗（22）第1層覆土内より出土した碗面の一部の破片である。上面径は推定で約9.6cm、厚さ7mmを測る。胎土は密で、色調は内外面共灰色を呈している。

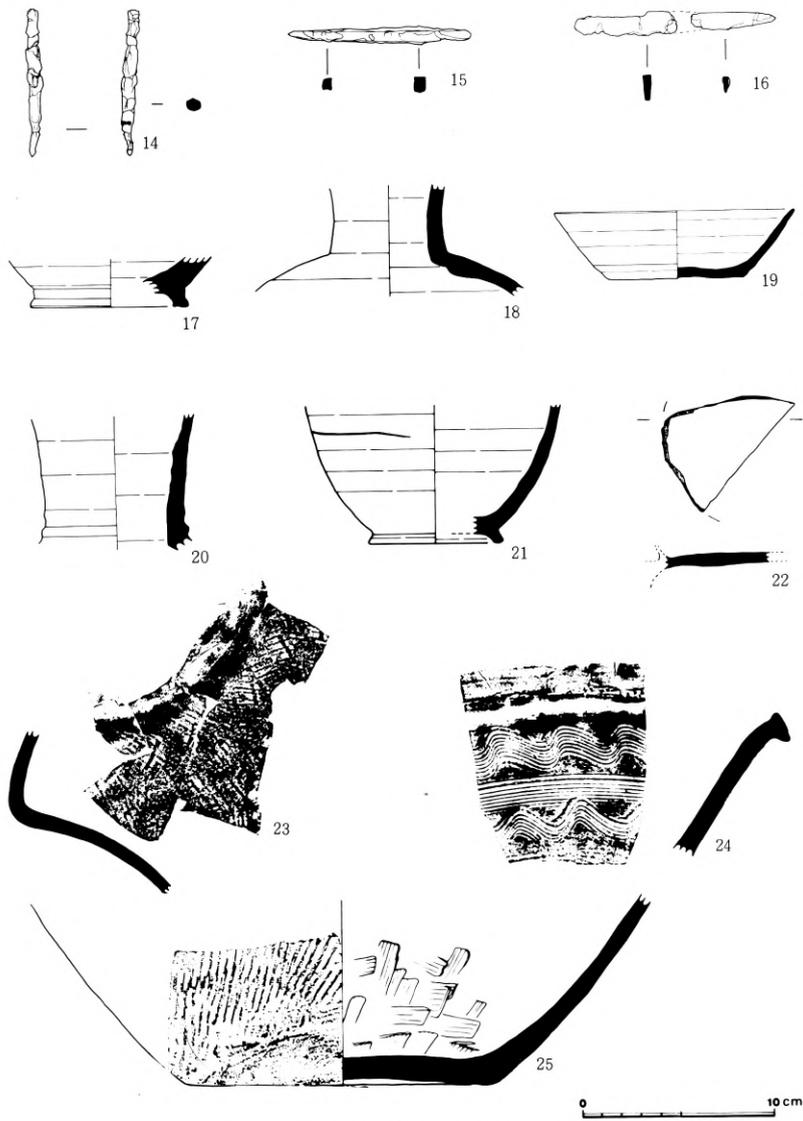
甕（23～25）23・24は第2層覆土内、25はカマド付近より出土している。同一個体とも考えられる。23は肩部、24は頸部から口縁、25は底部と体部下半にかけての破片である。成形は口ロ口で、23・25は外面平行叩き目、底部下端に手持ヘラ調整され、内面はヘラナデ調整が施されている。24は外面頸部に8本単位の波状文様が施されている。内面は頸部から口縁部に横ナデが見られる。色調は3点共暗茶灰色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。

第1表 第1号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	高台付杯	4-1			床面	12.7cm		7 cm	3.1cm	0.8cm	口ロ口	回転ヘラ	ミガキ	内黒
●	杯	-2			覆土	11.4cm						手持ヘラミガキ	●	内外黒
●	高台付杯	-3	10-1	ピット				9.5cm		1.2cm	口ロ口		●	内黒
●	杯	-4			覆土	12.8cm		6.7cm	3.8cm			回転ヘラ	●	●
●	杯	-5		ピット		12.5cm		5.8cm	4.1cm			●	●	●
●	高台付杯	-6			覆土			8.6cm					●	内黒ヘラ書き
●	杯	-7	10-2		●	13 cm		6.3cm	4.4cm		口ロ口	回転ヘラ手持ヘラ	●	内黒
●	●	-8	-3		●	13.5cm		7.5cm	4.2cm		●	●	●	●
●	●	-9			●	14 cm		7.3cm	3.6cm			回転ヘラ	●	●
●	●	-10			●	15.6cm		7.3cm	5.2cm		●	●	●	●
●	●	-11	10-4		●	13.7cm		6.8cm	4.5cm		●	●	●	●
●	●	-12	-5		●	15.5cm		7.3cm	5.5cm		●	回転ヘラ手持ヘラ ヨコナデヘラナデ	●	●
●	壺	-13			●	19.2cm							●	●
須恵器	壺	5-17	10-6		●			8.1cm		1 cm	口ロ口	回転ヘラ		自然釉
●	●	-18	11-1		●									●
●	杯	-19	-2		床面	12.6cm		7 cm	3.6cm			回転ヘラ		自然釉
●	壺	-20			覆土									●
●	●	-21	11-4		●			7 cm		0.7cm				●
●	壺	-23	-5		●							タタキ手持ヘラ		自然釉
●	●	-24	-6		●							タタキ		●
●	●	-25			●			15.5cm				タタキヘラナデ	ヘラナデ	●



第4図 第1号住居跡出土遺物実測図



第5圖 第1号住居跡出土遺物実測圖

## 第2号住居跡（第6・7・8図、第4図版）

〔検出状況〕C-D-4グリッドより検出された竪穴住居跡で1号住居の北側に位置する本遺跡の住居跡としては最も大規模を呈するものである。暗黒褐色土砂粒質土層に掘り込まれている。又保存状態は良好である。

〔プラン、規模、方向〕東西、南北長のほぼ同じ隅丸方形を呈し、カマドは2基検出された。検出地点は北壁中央部面と東壁中央面の2地点である。プランの北辺は8m、東辺は7m35、南辺は7.60m、西辺は7.55mを測る大規模な住居跡である。本住居の中軸線はN-7°-Wである。

〔覆土〕大きく6層に分かれる。第1層は黒褐色を呈する層で砂質が含まれ、比較的やわらかい。第2層は暗黄褐色土、第3層は明黄褐色土で砂の量が少なく硬い。第4層は暗黄褐色土で焼土粒が多量に含まれている。第5層、第6層は壁の崩壊が堆積したものと考えられる。

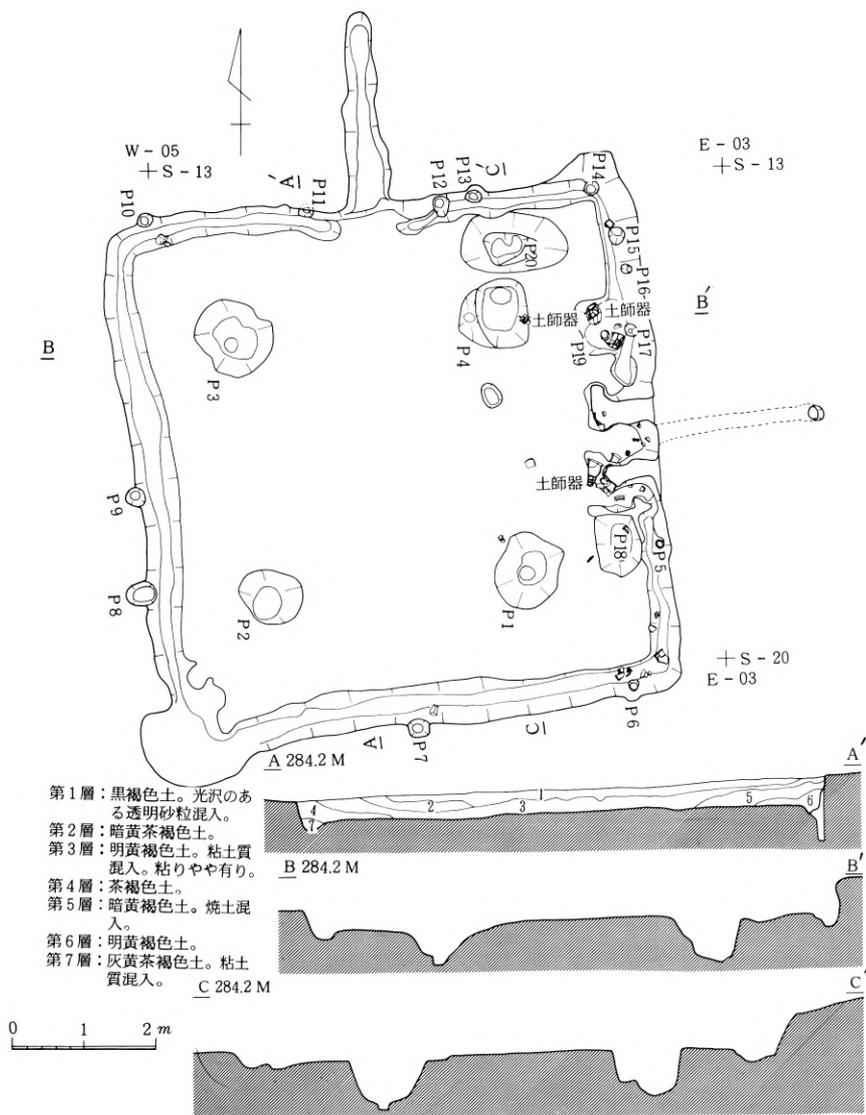
〔壁、床面〕壁高は25cm～50cmを測る。北壁、東壁、南壁は床面よりほぼ垂直に立ち上り保存状態も良い。西壁は第1号住居跡と同様傾斜地のため自然崩壊によると推定される。床面は黄褐色土を掘り込み構築され、また西北コーナー付近床面全体に焼土が検出され、北部のカマドを破壊し、床面に焼土を埋める状態で貼られ、つくり換えられたと推察される。

〔ピット〕柱穴ピットは全体で17個検出された。主柱穴は4本(P1～P4)で掘り方をもつ不整形で、いずれも保存状態が良く、明瞭な柱痕が見られ、間隔は3.8mとほぼ等間隔を呈している。その他貯蔵ピットが3個検出され、P18、P19から多数の土器片が出土した。

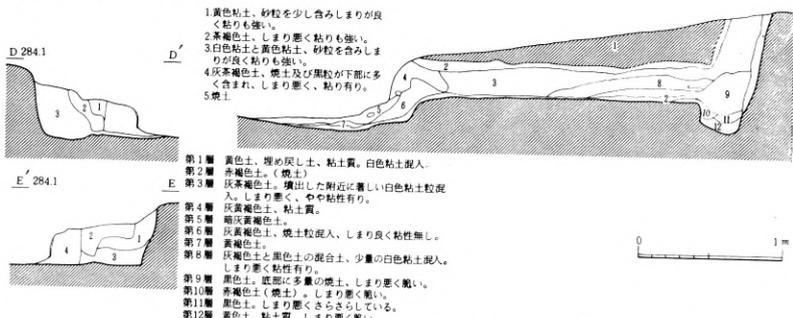
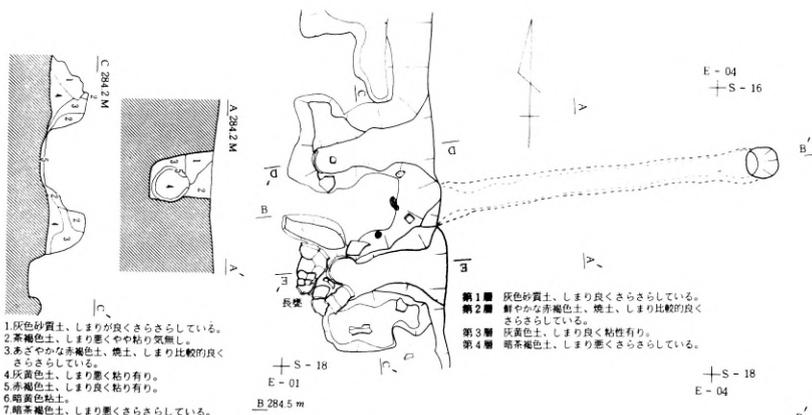
〔周溝〕周溝は幅15～60cm、深さ20cm程の規模をもって、住居跡の壁に沿う形で検出された。周溝の堆積は自然堆積によるものと思われ、灰黄茶褐色土1層よりなる。北西のコーナー角に、雨落溝の溜池とも考えられる土壌が検出された。今回の調査では深さ等は未調査に終わった。

〔カマド〕カマドは2基検出された。検出地点は北壁中央と東壁中央面の2ヶ所であるが北壁カマドは煙道のみで住居使用半ばで廃絶されたと思われる。東壁カマドは地下式の長い煙道を持ち、両袖端部に壺がおかれその上に粘土でしっかり構築されている。カマドの周囲から集中的に遺物が検出された。

〔遺物〕遺物検出状況は、カマド周辺に集中して出土した。カマド北側貯蔵穴(P19)に壺が倒れた状態で検出された。又長甕、ロクロ成形杯、須恵器、砥石等が床面より出土している。



第6図 第2号住居跡実測図



内第2層より出土したものである。いずれも外面はロクロ目が明瞭である。回転ヘフ切りで切り離し、のち底部から体部下端に回転ヘラ調整が施されている。4は手持ヘラ調整に

第7図 第2号住居跡カマド実測図(東)

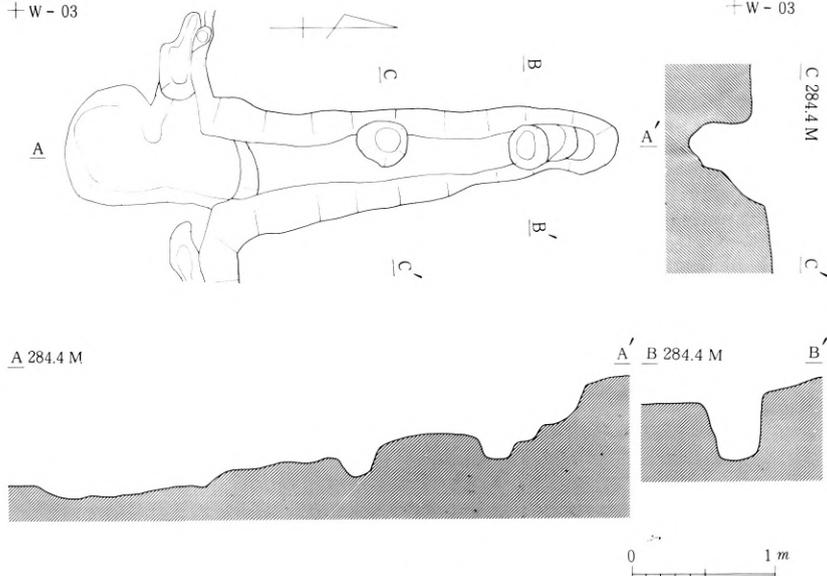
土師器(第9図)

高台付杯(1)覆土内第2層より出土した。底部と体部約 $\frac{1}{4}$ が残存する。杯部はロクロ成形されており、切り離しは回転糸切りによる。高台貼付後、外面底部と体部をロクロナデしている。内面は黒色処理され、中央に細かいヘラミガキが施されている。

杯(2~7)2は(柱穴)P4内より出土した。底部から口縁部にかけて約 $\frac{1}{3}$ が残存する。底部より体部へ丸みを持って内湾する。底部切り離しは手持ヘラケズリで外面ヘラケズリ調整が施されている。内面は黒色処理され磨減が激しいがミガキがわずかに見られる。3~6はすべてロクロが使用されている。5は床面カマド付近より出土したが、その他は覆土内第2層より出土したものである。いずれも外面はロクロ目が明瞭である。回転ヘラ切りで切り離し、のち底部から体部下端に回転ヘラ調整が施されている。4は手持ヘラ調整に

S - 15  
+ W - 03

S - 10  
+ W - 03



第8図 第2号住居跡カマド実測図(北)

よる。内面は黒色処理され、丁寧なミガキが施されている。7は覆土内第3層床直上より出土した口縁部の破片である。口縁部が強く外反する杯である。内外共黒色処理され、のち横方向のヘラケズリが施されている。

須恵器(第9図 第13図版)

高台付杯(8)覆土内より出土した底部から口縁部にかけて約 $\frac{1}{3}$ が残存する。高台の開きが急で裾先端部がわずかに屈曲し、口縁部で外反する。ロクロ成形で焼成は良く胎土は緻密で色調は灰色を呈している。

杯(9)は遺構確認面第一層より出土した底部欠損の杯である。ロクロの成形で焼成が良く、色調は灰色を呈している。

高台付壺(10)覆土内第2層より出土した底部と体部下半約 $\frac{1}{5}$ が残存する破片である。高台は付高台で外面はロクロによって仕上げられている。高台は低く直線的に開く中型の壺である。境界はきれいな一線を呈している。外面は灰色を呈し、良く焼成されている。

蓋(11)覆土内第2層より出土。蓋の鈕部片で中心部に約5mmの突起が見られる。全体に黄緑の釉がかかけられている。胎土は陶質で緻密である。遺構との関連は不明である。

鉄製品(12・13)覆土内第1層より出土したもので12は用途不明の鉄製品で茎状を呈し

長さ13.7cmを測る。13は断面から刀子と考えられる。長さ6.3cm、巾1.1cmを測る。

把手? (14) 床面上より出土した土師質の甌の把手と思われる。中央に径4mmの一孔を穿つ。長さ2cm、巾2.1cm、厚さ0.7cmを測り、色調は明黄褐色を呈している。

#### 土師器 (第10図 第12図版)

甕(15~19) 15はピット内(P19)よりはぼ完型で出土している。平底で体部はやや丸みを持って立ちあがり、口縁はほぼ直立する小型の鉢型の甕である。外面体部は磨滅が激しい。内面は横方向のヘラナデが施され、底部に木葉痕が見られる。内面は体部、底部共ヘラナデ、口縁部は内外面共横ナデが施されている。16・17・18・19は長胴型の体部を有し、口縁が強く外反する。17は底部が欠損する。4点共ほぼ完型で出土している。胴部は縦方向のヘラナデと判断される。16・18・19は底部に木葉痕が見られ、内面体部に粘土紐痕が残る。4点共東かまど付近で、16・18はカマド左側ピット(P19)内、17は東カマド右袖部、19は東カマド右袖付近より出土している。

#### 須恵器 (第11図 第13図版)

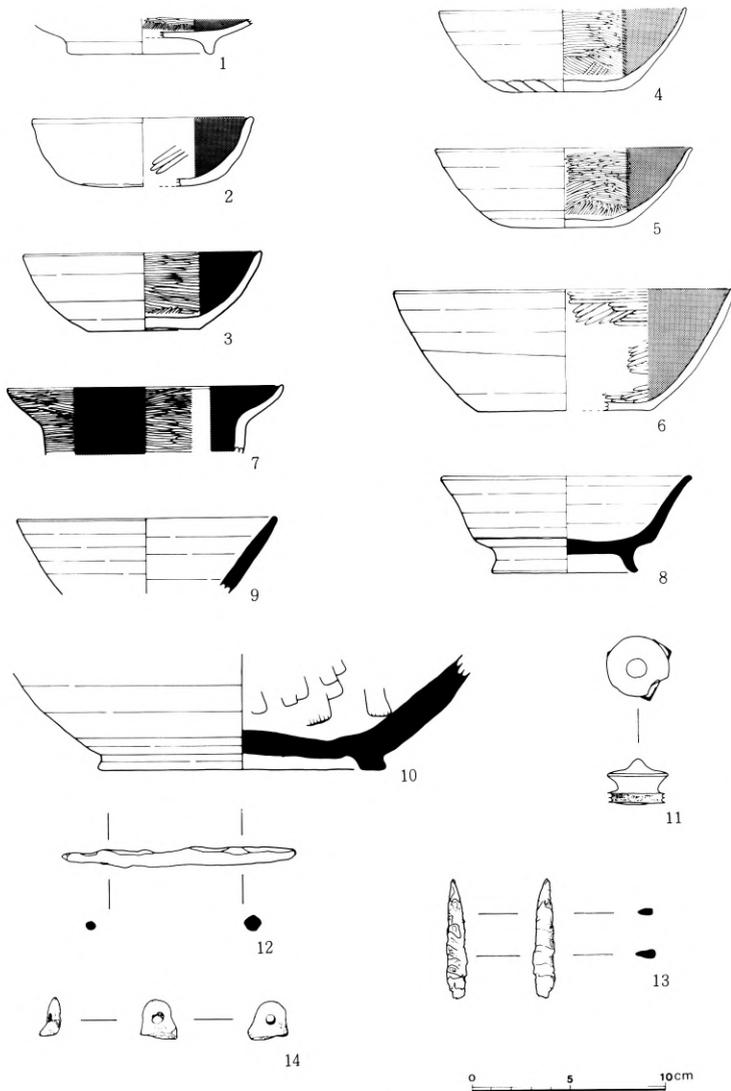
甕(20・21) 2点共覆土内第2層より出土した破片である。20は頸部から口縁部にかけて波状文様が施され、21は外面体部平行叩き目、頸部に横ナデが施されている。成形はロクロ成形で、内面粘土紐痕はヘラによって調整されている。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈している。

#### 石製品 (第11図 第13図版)

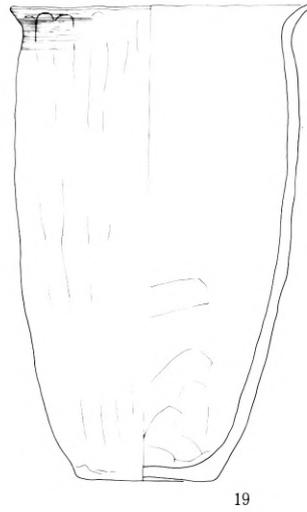
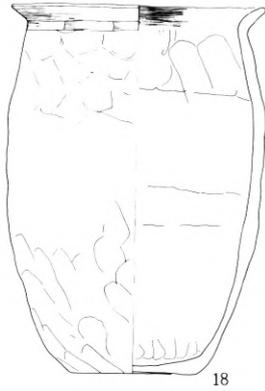
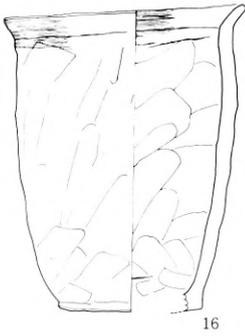
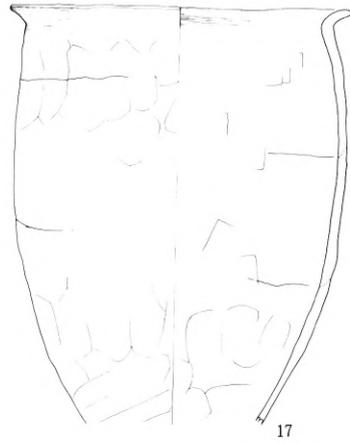
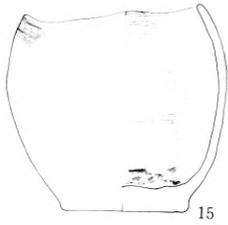
砥石(22・23) 22はピット(P19)内より出土したもので全面良く研磨されており、側面に鋭利な擦痕が数本みられる。長さ23.6cmを測る。23は覆土内第2層より出土したもので、全体に丸みをおびているが2面がV字形に研磨されている。長さ14.5cmを測る。

第2表 第2号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	底径	高さ	細高	成形	外面調整	内面調整	その他	
土師器	高台付杯	9-1		柱 穴	覆土L-2		7.7cm		0.7cm	ロクロ	回転糸切り	ミガキ	内 黒	
●	杯	-2			覆土L-2	11.5cm		3.6cm		非ロクロ	手持ヘラ	ミガキ	●	
●	●	-3			覆土L-2	12.4cm		5.9cm	4.1cm	ロクロ	回転ヘラ	ミガキ	●	
●	●	-4			●	12.9cm		6.2cm	4.3cm	●	回転ヘラ手持ヘラ	●	●	
●	●	-5			床 面	●	13.4cm		5.5cm	4.2cm	ロクロ	回転ヘラ	●	●
●	●	-6			●	17.8cm		9 cm	6.4cm	●	●	ミガキ	●	
●	●	-7			床直上	14.4cm				非ロクロ	ミガキ	ミガキ	内 外 黒	
須恵器	高台付杯	-8	13-1		覆土内	13.1cm		7.6cm	5.1cm	1.0cm	ロクロ	回転ヘラ	●	●
●	杯	-9		●	13.5cm				●	●	●	●		
●	壺	-10		●	●		15 cm		6.0cm	●	手持ヘラナデ	●	●	
土師器	甕	10-15	12-1	ピット	12.6cm	15.5cm	8.4cm	14.6cm		粘土紐	ヘラナデ	ヘラナデ	木 葉 痕	
●	●	-16	-2	●	16.4cm	15.6cm	10 cm	21.8cm		●	●	●	●	
●	●	-17	-3	カマド	23.6cm	23 cm		29.5cm		●	●	●	●	
●	●	-18	-4	ピット	17.8cm	18 cm	8.5cm	26 cm		●	ヘラナデ	●	●	
●	●	-19	-5	カマド	20.7cm	19.4cm	9.6cm	33.5cm		●	ヘラナデ	●	●	
須恵器	甕	11-20	13-3	●	覆土L-2	38.3cm				粘土紐	波状文様	ヘラナデ	●	
●	●	-21	-5		●					●	タタキ	●	●	



第9图 第2号住居跡出土遺物実測図



第10图 第2号住居跡出土遺物実測図



第 11 图 第 2 号住居跡出土遺物実測図

### 第3号住居跡-1(第12・13図 第5図版)

G-6グリットの位置に検出され、12号住居跡を3号住居跡が切っている。標高は287.3 mである。

〔検出状況〕3号住居跡は昭和40年の開畑によって上層の土は削り取られ、遺構上の包含層はほとんど少なく、畑の耕作等によって、遺物包含層が耕作されていた。この為遺物が早くから表採されていたため、天開遺跡の所在が明らかになっていた区域である。

〔プラン・規模、方向〕東西5.5 mの竪穴住居跡である。南に3号住居跡によって切られた12号住居跡がある。遺構の残存状態は良好で竪穴の掘り方は30 cmと平均的である。

方位は南北軸が西に14°振れている。竪穴の壁は地山に掘り込んでいる。

〔覆土〕5層に大別され、層序は自然堆積を呈している。床面直上層には本炭、焼土等が含まれ、特にカマドの周辺からは焼土、木炭が大量に検出され、土師器、須恵器の破片が出土している。

竪穴住居跡内の南北ベルトの層序によると、①褐色土層(砂質包含) ②褐色土層(木炭包含) ③褐色土層 ④暗褐色土層(木炭、土器片、砂質包含層) ⑤褐色土黄色土混合層から成っている。

〔壁・床面〕壁は各壁ともに検出された。この壁は床面から65°~80°で立ち上がり、高さは北壁で50 cm、西壁で45 cm、南で25 cm、東で20 cmを測る。床面は平坦で固くしまっている。北壁沿いの床面からは焼土が多量に出土した。また東壁中央部1.5 mの床面と南壁中央部の1.5 mの床面が径50 cmの広さに焼け固まって検出された。

柱は四本(P-1、P-2、P-3、P-4)が検出され、掘方は45 cm、柱の径は20 cmを測る。側柱は四方の立上り壁に掘り込まれ17本が検出された。

〔ピット〕P5 北壁に設けられたカマドの右側に検出された。長径1.2 m、短径80 cmの楕円形で、最も深いところで46 cmを測る。底面はナベ状に凹み、壁はゆるやかに立上っている。

P6 P1の南30 cmの東南コーナーの角にはほぼ方形に検出されたピットである。東西80 cm、南北60 cm、最も深いところで30 cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立上りはやや急である。このピットは住居使用時は開口していたものと考えられる。

P7は西南コーナーに接して検出され、長径1.5 m、短径1 m、深さ43 cmを測る。このピットは西壁と南壁に接して検出された周溝に接続し、最も底位置にある。

〔周溝〕周溝-1は東、南、西壁に接して検出された外側周溝はコ字型に設置され、東周溝の巾約30 cm、長さ4 mでP-6に接続し、南は1 m~30 cmと不整形の周溝が3 mに及び、P-6、P-7に接続している。西周溝は巾約40 cm、長さ4.5 mでP-7に接続している。

周溝-2は住居跡中央に検出された4本の柱のうち、P-2、P-3、P-4の中間に設

置された。西内部周溝はP-4、P-3中間に検巾25cm、長さ2.5m、深さ20cmで南内部周溝はP-3、P-2間のP-3寄りに検出され、巾35cm、長さ1.8m、深さ20cmを測る。

〔カマド〕北壁の中央部に位置している。ほぼ完全な形でカマド、煙道、煙出し部が検出された。袖部は粘土により継足しているのが、その芯材には長甕の内部に砂を入れ、口縁部を下に伏せられ、粘土により構築している。残存長右袖で1.5m、左袖で1.4mで袖幅はほぼ同一である。袖部の構築は床面調整後、7cm前後の厚さの暗褐色土を敷きつめた上に、粘土質の袖材によって築き上げている。燃焼部奥壁は住居蹟壁面がそのまま奥壁となっているが煙道は奥壁の14cm、上部から北方に内径30cm、外径50cm、長さ2.7mの長さで作られている。両側壁の立ち上がりかたから半地下式煙道と考えられる。煙出し部は直径65cmで、底面より8cm深いピットを掘り込んでいる。ピット内部から底部の欠損した甕が底部を下にして斜めになって出土しており、煙出しの煙突として用いられたものであろう。煙道は約8°先端に高い傾斜をしている。

### 第3号住居跡-2（第12・13図 第5図版）

G-6グリット内の標高285.3m付近で発見された。3号住居跡に切られている。

本遺跡は3号住居に接しており、先の開畑工事により上層部の表土は削平されているため、遺物包含層が露出しており、不明である。

〔プラン・規模・方向〕現存する遺構は住居跡の西部1.5mのみで、東部は3号住居によって切られている。現存する住居跡の規模は、西壁4m、北壁に8m、南壁1.3mを測る。南北軸は真北より22°西に振れている。

〔覆土〕4層に大別され、層序は自然堆積を呈している。3層は10cm程度の、ロームと黒色土を混ぜ合わせた黒褐色砂粒を含み固まって残存している貼床である。床面から杯、甕の破片が出土している。

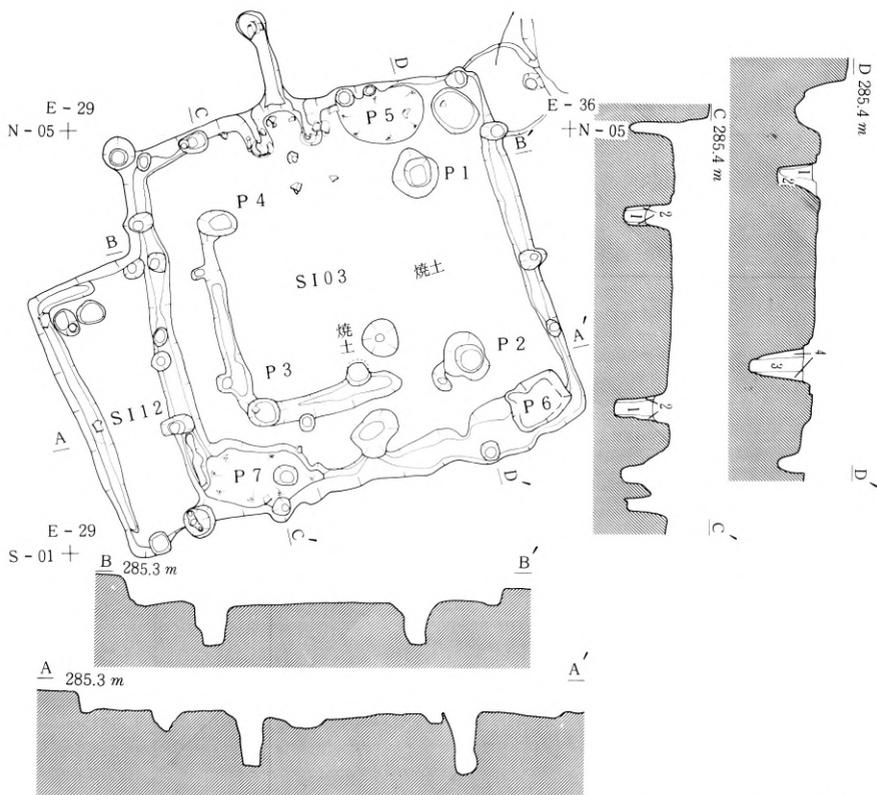
〔壁・床面〕住居跡の大部分は3号住居跡に切られて破壊されているが、西辺側で1.5m遺存している。西壁の高さは30cm。床面から75°の角度で立上がり、北壁40cm、南壁は15cmを測る。床面は固くしまった貼床である。

〔ピット〕南西隅に検出されたコーナー部のP-1は径30cm、深さ25cm、これに接して径45cm、深さ15cmの皿状の浅いピットである。北西隅に検出されたピットいずれも浅い。P-2は北壁コーナー1m東寄りにあり、径32cm、深さ30cmを測る。

〔周溝〕西壁添いから北西コーナーをまわり北壁添いに周溝が検出された。西壁で1.5m巾30cm、深さ5cmを測る。北壁は長さ1m、巾20cm、深さ3cmを測る。

〔カマド〕検出されなかった。

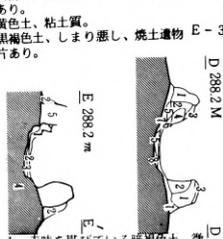
〔遺物〕第3号住居跡-1・2は2つの住居が切り合っている為、両遺構から出土した遺物



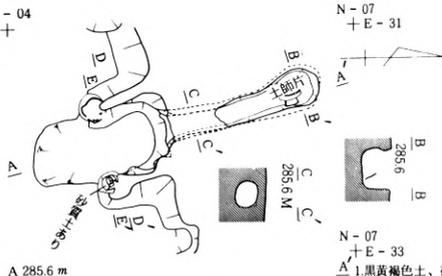
- 1—黒色土。砂粒混入。しまり悪く、粘り有。
- 2—黄褐色土。粘土質。
- 3—暗灰褐色土。砂粒混入。しまり悪く、粘り有。
- 4—暗灰褐色土。粘土の固まり混入。

第12図 第3号住居跡12号住居跡実測図

- 1.黒赤褐色土、炭化物混入、焼土含む。
- 2.黒黄褐色土、焼土混入、しまり悪い。
- 3.黄褐色、粘土質、ロームブロックあり。
- 4.黄色土、粘土質。
- 5.黒褐色土、しまり悪い、焼土遺物片あり。



- 1-赤味を帯びている暗褐色土。微量の土器片混入。
- 2-黒褐色土。焼土少量含む。しまり良い。
- 3-赤味を帯びた暗褐色土。
- 4-黄褐色土。焼土少量含む。粘土質。
- 5-黒色土。炭化多量含む。焼土粒状少量混入。
- 6-粘土質。



N-07  
+E-31

- 1.黒黄褐色土、微粒焼土多数混入。
- 2.茶褐色土、焼土粒及び炭粒微量混入。しまり悪い。
- 3.暗褐色土、しまり悪い。
- 4.赤褐色土、焼土多量混入、しまり悪い。
- 5.黄茶褐色土、しまり悪い。
- 6.灰褐色土。しまり悪い。
- 7.暗灰褐色土、石灰粒左そこに混入。しまり悪い。
- 8.黄褐色土。粘土質。

第13図 第3号住居跡カマド実測図

は、第3号住居出土遺物として処理した。遺物はほとんど床面から出土している。主にロクロ成形の土師器、長甕等が出土している。土師器の中に墨書土器が3点、カマドの袖の芯材に使用したと思われる長甕が2点、内黒の土師器鉢が2点、その他実測可能な土器が数点出土している。

土師器（第14・15図 第14図版）

杯（1～9）1～7・9はいずれも床面より出土した。8はカマド東隣ピット内より出土した。1～9まですべてロクロ成形である。1は底部約 $\frac{1}{2}$ ・2は底部約 $\frac{1}{5}$ ・4は体部の一部が残存する。3点共、墨書土器片である。いずれも外面体部は回転ヘラケズリされ、底部は、回転ヘラ調整が施されている。内面は黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。3はほぼ完形で、5は口縁部からは体部にかけて約 $\frac{1}{3}$ ・7は約 $\frac{2}{3}$ ・8は $\frac{3}{4}$ ・9は約 $\frac{1}{2}$ が残存する。いずれも外面体部は回転ヘラケズリされ、底部は回転ヘラ調整が施されている。内面は黒色処理の後、体部の上部は横方向、下部は縦方向のヘラミガキが施されている。5の底部は欠損しているが、7・8・9は底部より体部にかけて、ゆるく立ち上り、口縁部にかけて外傾する。8の底部内面中央は若干隆起している。6は体部から底部へかけて約 $\frac{1}{3}$ 残存の、底径約4.2cmを測る小型の杯である。内外面共黒色処理が施されている。外面体

部は回転ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ痕がわずかに見られる。体部は丸みを帯びて立ち上がり、体部は内湾状を呈している。小型にしては約5mm程の器厚がある。

甕(12・13・16～19)12は煙道部先端より出土した口縁部約 $\frac{1}{4}$ が残存する破片である。胴のはらんだ甕で口縁部は強く外反する。内外面共ロクロ目が残る。13は床面より出土した底部と体部下半約 $\frac{1}{5}$ が残存する破片である。底部より体部へ直立して立ち上る長胴形の甕で、外面はハケ目調整で、内面はヘラナデ調整が施されている。底部に木葉痕が見られる。胎土は粗である。16は床面より出土した。口縁部、胴部が約 $\frac{1}{3}$ が残存する。胴部に張りをもち、口縁部にかけて内湾し、口縁部で「く」の字に外反する。外面調整は胴部にヘラナデ、口縁部は横ナデが施されている。胴部全体にハケ目と見られる線が数本見られる。内面調整は、胴部にヘラナデ、口縁部に横ナデが施され、胴部に粘土紐の引き伸ばし痕が見られる。17は覆土内より出土した口縁部約 $\frac{1}{5}$ の破片である。体部はほぼ直立しており、口縁部で急に短かく外反する。外面体部上半にロクロ成形の跡と、ヘラナデが施されている。内面は黒色処理の後、一部に横方向のミガキが施されている。18はカマド右袖から出土した長甕で、ほぼ完成品である。19はカマド左袖から出土した底部欠損の長甕である。両甕ともカマド袖の芯材に使用したと思われる。2点共、体部は内湾して立ち上る長胴形の甕で、口縁部は強く外反する。最大径は体部中位に位置する。外面調整は、口縁部に横ナデの後、その上にヘラナデ調整が施されている。体部には縦方向のヘラケズリが見られる。内面調整はヘラナデで、口縁部は横ナデが施されている。粘土紐による成形である。18は底部に木葉痕を残す。

鉢(14・15)2点共、床面より出土した。14は体部下半から底部にかけて約 $\frac{1}{5}$ 残存の破片である。ロクロ成形で、口縁部は内外面共横ナデが施されている。内黒処理が施され、ミガキは見られない。15は口縁部と体部の一部約 $\frac{1}{5}$ 残存の破片である。外面体部下半に手持ヘラ調整が施されている。内面底部はナデ調整がわずかに見られる。内黒処理が施されている。

#### 須恵器(第14図)

甕(10・11)10は覆土内第1層・11は床面より出土している。10は体部の破片で、外面は平行叩目が施されている。11は底部と体部下半約 $\frac{1}{6}$ が残存する。外面底部は手持ヘラ調整が施され、体部は縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデが施されている。2点共胎土は粗で、色調は外面明灰褐色を呈している。

#### 第4号住居跡(第16図)

〔検出状況〕耕作により削平がはげしく、破壊を大きく受けているため、用途については判断がむずかしいが、墨書土器片等が出土しており、一応住居跡と推定した。本住居跡は遺跡の東側F-6グリットに位置し、南西に炭ガマ跡が隣接している。炭ガマ跡は炭化物の状

態からみて、中世以降のものと考えられ、その為南側が大きく破壊されている。

〔プラン・規模・方向〕本住居跡は東西 2.0 m、南北は東壁、西壁部で 1.5 m、中央で 2.1 m のやや南壁につき出した方形を呈する小規模の住居跡と推定した。中心線は南北軸方向 N-20°-W を示す。

〔覆土〕2つの層に大別され、自然堆積と思われる。床面までの深さは浅く 5 cm 程度で黄褐色土層で、2層はビット内堆積で黄褐色土層を呈する。

〔壁、床面〕北壁は 3 cm、北東コーナーで 9 cm を測る。南壁は破壊されており、壁と断定できない。床面はほぼ平坦であり、細かい土師片が多く含まれた黄褐色土でしまりは粗雑。

〔ビット〕長さ東西 50 cm、南北 40 cm、深さ 18 cm の用途不明のビットが検出されたのみで柱穴らしきものは検出されなかった。

〔周溝〕検出されなかった。

〔カマド〕カマドと断定できるものは発見されなかったが、南側くぼみの土層中に焼土粒が混入されており、カマドとの関連が考えられるが、炭焼ガマが隣接しており断定することはむずかしい。煙道と思われるものは検出されなかった。

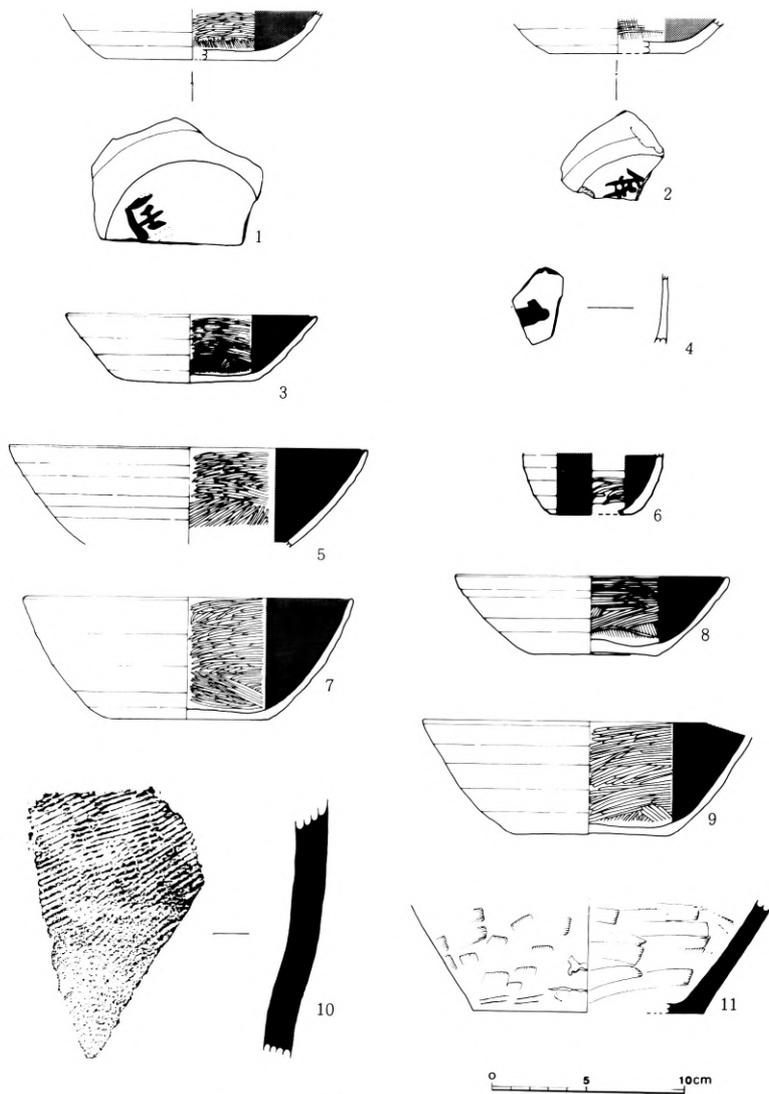
〔遺物〕検出作業で露出したものが多く、ロクロ成形土器杯、甕、墨書土器片等が出土した。墨書片の中に「聡」の字を判読出来るものも含まれている。

#### 土師器(第17図 第15図版)

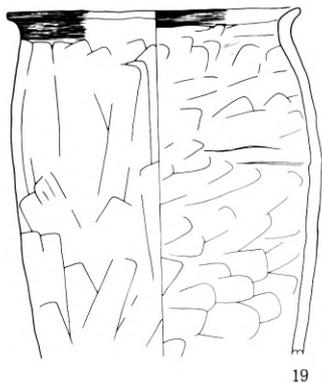
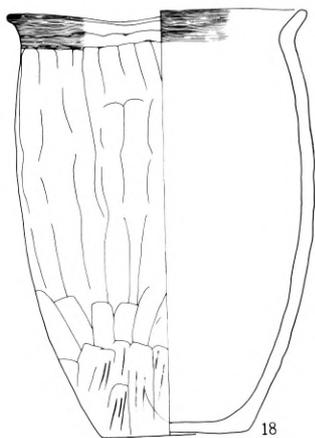
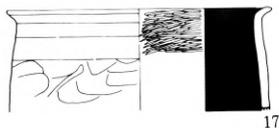
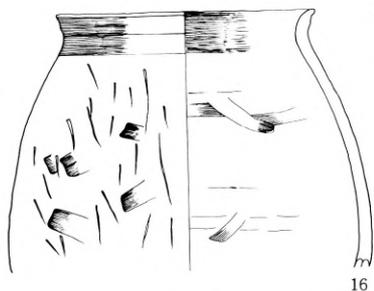
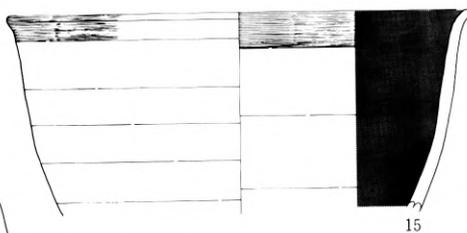
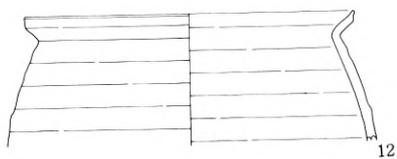
杯(1~3)3点共、床面上層部確認面より出土したロクロ成形の杯である。1は、高台付杯で、底部のみ出土した。高台部の径 6.9 cm、高台部の高さ 1.1 cm であり、内黒である。内面は摩滅が激しいが、一部に横方向のへら磨き痕が見られる。底部は回転へら切り後、高台を張り付け、ナデによる調整を加えている。外面底部に「本」と判読できる墨書銘がある。2は、底部のみ約  $\frac{1}{3}$  残存の墨書土師器破片である。内面は黒色処理が施され「×」印

第3表 第3号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	14-1	14-1	床面				8.9 cm			ロクロ	回転へら	ミガキ	内黒・墨書
*	*	-2	*	*				6.9 cm			*	*	*	*
*	*	-3	14-2	*		13.2 cm		7 cm	3.7 cm		*	*	*	内黒
*	*	-4	-3	*							*	*	*	内黒・墨書
*	*	-5	*	*		18.5 cm					*	回転へら	*	内黒
*	*	-6	*	*				4.2 cm			*	*	*	*
*	*	-7	14-5	*		17 cm		8.5 cm	6.5 cm		*	*	*	*
*	*	-8	-6	ビット		14.2 cm		6.4 cm	4.2 cm		*	*	*	*
*	*	-9	-4	床面		17.3 cm		8 cm	6 cm		*	*	*	*
須恵器	甕	-10	*		覆土内1層							平行叩目		
土師器	*	-11	*	床面				11.9 cm				手持へら	へらナデ	
*	*	-12	*	煙道		23.2 cm	25.8 cm				ロクロ			
*	*	-13	*	床面			18.2 cm	11.6 cm			粘土紐	ハケ目	へらナデ	木炭痕
*	鉢	-14	*	*			23.8 cm	12 cm			手持へら	ヨコナデ	ヨコナデ	内黒
*	*	-15	*	*		32.2 cm	31.3 cm				ロクロ	ヨコナデ	*	*
*	甕	-16	*	*		17.9 cm	25.3 cm				粘土紐	ヨコナデ	へらナデ	ヨコナデ
*	*	-17	*		覆土内	18.4 cm	18.1 cm				ロクロ	*	ミガキ	内黒 炭痕
*	*	-18	14-7	カマド		20.8 cm	19.7 cm	9.7 cm			粘土紐	へらクスリ	ヨコナデ	木炭痕
*	*	-19	*	*		20.5 cm		21.4 cm			*	*	へらクスリ	ヨコナデ



第14图 第3号住居跡出土遺物実測図

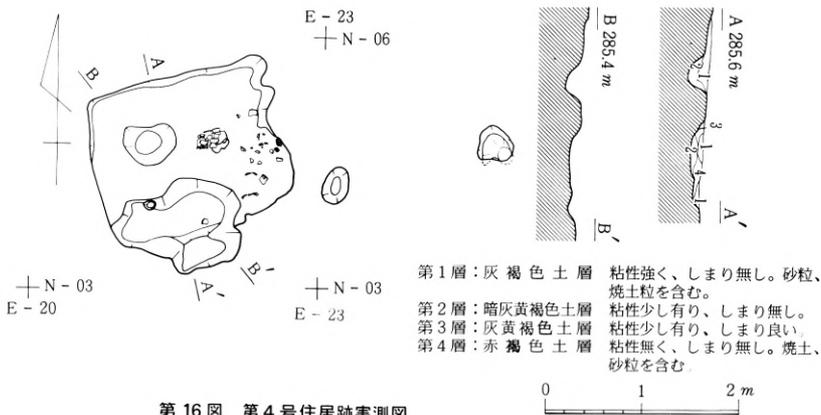


0 10cm

第15図 第3号住居跡出土遺物実測図

が刻字されている。一部欠損しているが、「聡」とも判読できる銘がある。3は、底部のみ約 $\frac{1}{3}$ 残存の墨書土師器片である。底部は平底で、回転ヘラ調整が施され、内面は黒色処理され、ヘラ磨き痕が見られる。

甕(4~5)2点共、覆土内より出土している。4は口縁部のみ約 $\frac{1}{3}$ 、5は全体の約 $\frac{1}{3}$ 残存している。4と5共に、口縁部が強く外傾し、「く」の字を呈し、ロクロ成形の甕である。5は、内外面の体部下半に、縦方向の軽いヘラケズリが施されている。



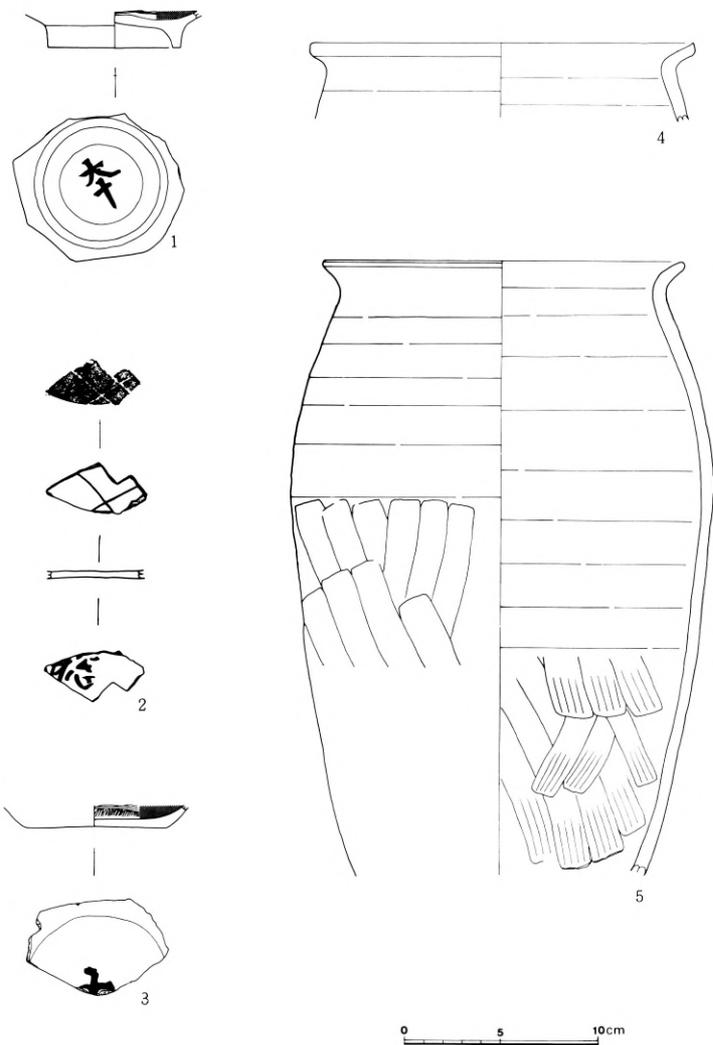
第16図 第4号住居跡実測図

第4表 第4号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	高台付杯	17-1	15-1		覆土			6.9cm		1.1cm	ロクロ	回転ヘラ	ミガキ	内果・墨書
*	杯	-2	15-2		*						*	*	*	静止系切り
*	*	-3	15-3		*						*	*	*	内果・墨書
*	甕	-4			*	20cm					*			
*	*	-5			*	18.8cm	22cm				*	ヘラケズリ	ヘラケズリ	

第5号住居跡(第18・19図 第6図版)

〔検出状況〕C-9グリットにおいて堆積の黒色土面より検出された住居跡である。今回調査での最北端に位置し、西側には9号住居跡が方向を同じくして確認された。遺構は黄褐色土のクローム層を掘り込んで構築されており、かなり良好な状態で残存を呈している。〔プラン・規模・方向〕東西約5.4m、南北約6.0mを測る長方形のプランで中軸方向はほぼ真北を示す。カマドは北壁の中央から東寄り構築されており、北東壁コーナーには貯蔵穴



第 17 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図

と考えられる深さ約 60 cm のビットがある。またカマド西側の北西コーナーには、長さ 90 cm、短軸 20 cm を測る棚状の部分が確認された。

〔覆土〕黒色土を含む暗黄褐色と、一部に菓状の残痕を含む黄茶褐色の 2 層より構成され、北側が 20 cm 南側が 5 cm 程度である。又住居跡の南の隅にしまりの悪い明褐色土が堆積している。

〔壁、床面〕壁は各壁共しっかりした状態で検出された。西壁は 30 cm、東壁、北壁はわずかに 18 cm を残すにすぎない。また床面はローム層を掘り込んで構築され、かなり硬くしまっており、敷きつめられたと考えられる菓状の植物痕も確認された。

〔ビット〕P1～P27 及び貯蔵穴ビットの計 28 個のビットが検出された。本住居跡の主柱穴と考えられるビットは P1～P4 の 4 本と考えられ、しっかりとローム層を掘り込まれている。柱間は P1～P2 が 2.2 m、P3～P4 が 2.5 m、P2～P3 が 2.5 m、P1～P4 が 2.5 m と等間隔である。また P7～P20 は支柱穴と考えられ、特に P12、P13 は入口施設に伴うものと思われる。貯蔵ビットは北東コーナーにおいて検出され、長径約 1.4 m、短径 1.3 m を測る隋円形を呈する。P21～P23 は支柱穴とも考えられるが性格は不明である。又壁面に掘り込まれた支柱穴と思われるビットは深さ 40 cm～50 cm としっかりしたものである。

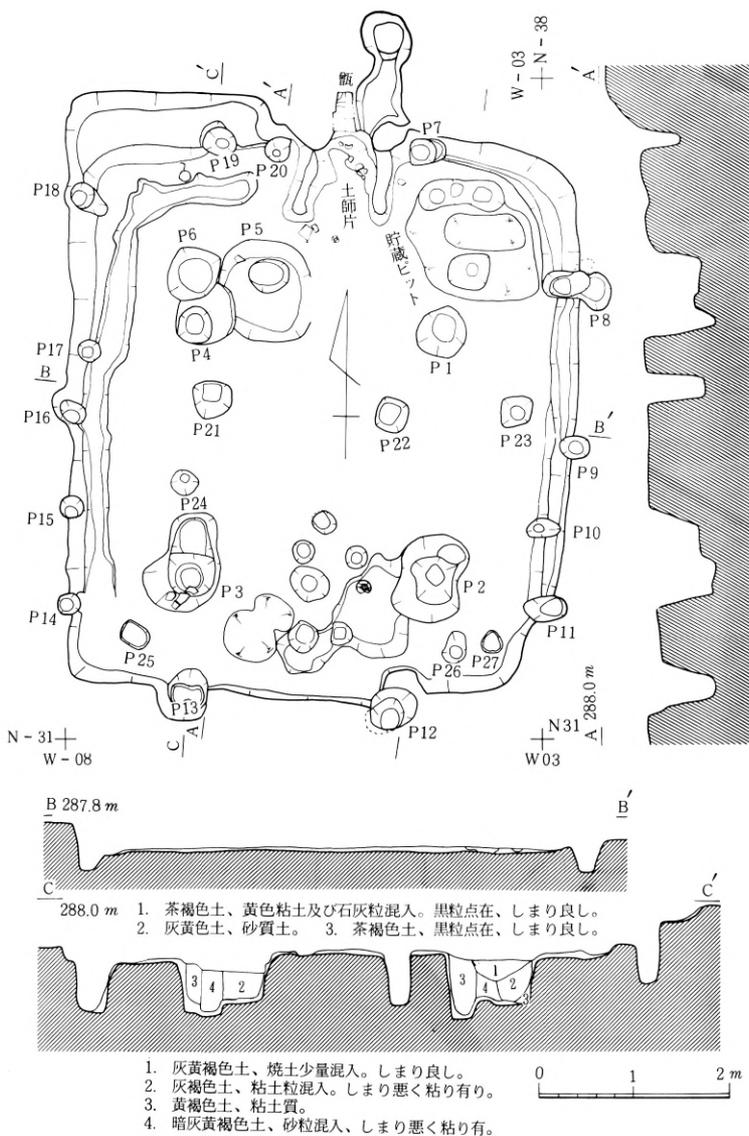
〔周溝〕カマドを中心として、東壁と西壁に周溝と考えられる溝状遺構が確認された。西壁のものは、幅約 10 cm、深さ約 10 cm を測る。東壁のものは幅約 15 cm、深さ約 5 cm を測る。断面は「U」字状を呈する。

〔カマド〕北壁中央に構築されている。燃烧部は上面で幅 73 cm、奥行約 90 cm を測り、袖は黄色粘土をかためて構築されており、左袖長さ 78 cm、基座部幅 35 cm、右袖長さ 80 cm、基底部幅 25 cm をそれぞれ測る。煙道は、上面で最大幅 50 cm、長さ 1 m 30 cm、底面最大幅 30 cm、長さ 1 m 15 cm、深さ 10 cm を測る。また、煙道部の西隣りには円筒土器の半欠がみつれた状態で検出された。これは煙道に付属するものと思われる。焚口付近に土師片が多く出土した。

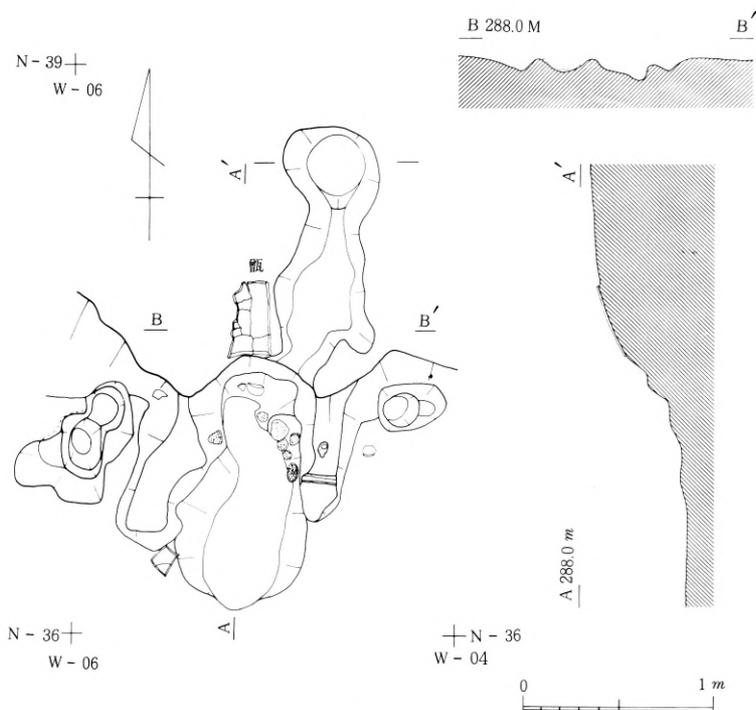
〔遺物〕覆土内及び床面より、土師器杯、円筒土器、甕、壺、鉄製品が出土している。杯には「+」字のヘラ記号が刻されている。また、カマドの前面からは吹子破片が出土している。

土師器(第 20・21 図 第 15 図版)

杯(1～8) 1～3・8 は覆土内より出土した。1 は底部約  $\frac{1}{4}$  残存の破片である。外面底部に木の葉痕を呈する。体部は手持ちヘラケズリで、内面は黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。2～8 はロクロ成形で、内黒処理が施されている。2・3・5 は底部と体部の境が明瞭で、直線的に立ち上がり、口縁部に向けて外傾する。外面は回転ヘラケズリによる調整がなされ、内面は黒色処理の後、上端部は横方向、下端部は縦方向のヘラミガキ調整が施されている。いずれも覆土内第 1 層より出土したものである。4 は柱穴より出土し



第 18 図 第 5 号住居跡実測図



第19図 第5号住居跡カマド実測図

た約 $\frac{3}{4}$ 残存の杯で、6と7は、カマドの東ピット内より出土した。3点共底部より体部へかけて丸みをおびており、境目が不明瞭である。4と7は体部が丸みをおびながら、口縁部へ外傾しているが、6はほぼ直線的に外傾している。いずれもロクロ成形で、黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。7は底部外面に「+」印の線刻がある。8は口縁部から体部へかけて約 $\frac{1}{7}$ 残存の破片である。体部より口縁部へ広く外傾する。内面は黒色処理の後、横一方にヘラミガキが施されている。

円筒土器(18)カマド煙道部の西側より出土した。口縁部から底穴まで約 $\frac{1}{2}$ 残存する無底式の円筒土器である。外面調整は手持ちヘラケズリの後、口縁部に横ナデが施されている。体部下半に粘土の引き伸ばし痕が見られる。内面調整はヘラケズリ、口縁部に横ナデが施されている。体部の所々に粘土の引き伸ばし痕が見られる。口径が底径より若干長い円筒

形を呈する。

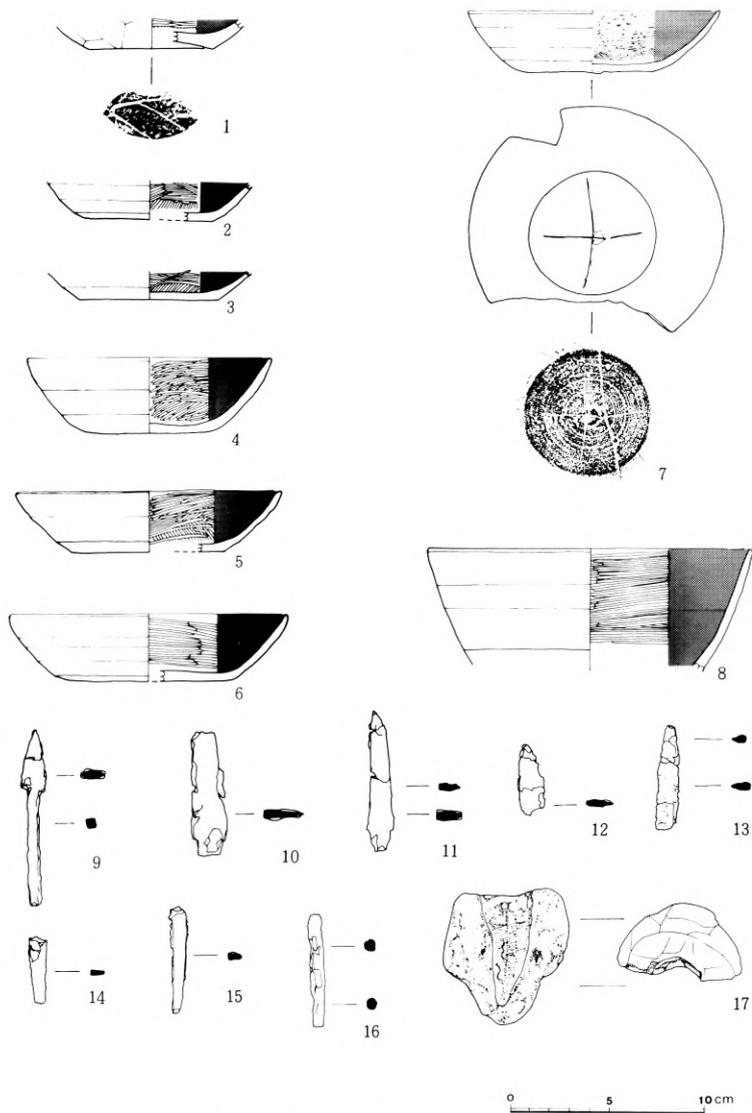
甕(19・21・22) 3点共覆土内より出土した。19は口縁部のみ約 $\frac{1}{5}$ 残存する。「く」の字を呈する。内外面共摩滅が激しいが、口縁部は横ナデがわずかに見られる。21は底部と体部下半約 $\frac{1}{3}$ 残存する。22は口縁部と体部上半約 $\frac{1}{5}$ 残存する。21は平底を呈し、ゆるやかに外湾する体部をもつ。外面調整は体部にヘラナデ、底部は手持ちヘラ調整が施されている。内面調整は、黒色処理の後、不定方向のヘラミガキが施されている。22はロクロ成形による。口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{5}$ の破片である。長胴形で、内外面ともロクロ痕が見られる。体部から直線的に、口縁部まで若干内傾し、口縁部で急に1cm程外反する。

鉢(20) 覆土内より出土した。口縁部から体部約 $\frac{1}{9}$ の破片である。ロクロ成形による。外面調整は口縁部に横ナデが施されている。内面調整は、黒色処理の後、口縁部に横方向のヘラミガキと、体部の一部に不定方向のヘラミガキが施されている。体部はゆるやかな丸みをおびて外傾し、口縁部で急に1cm程外反する。

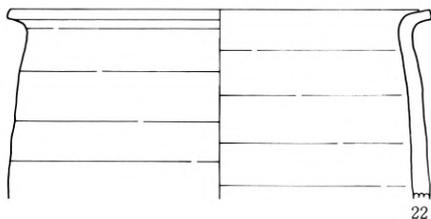
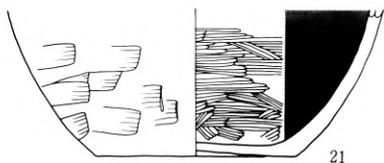
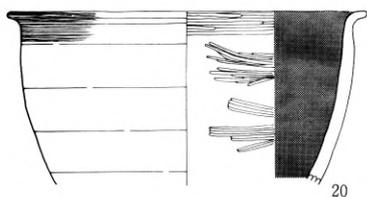
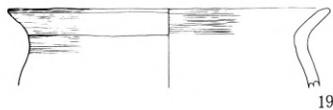
鉄製品(第20図 第15図版) 9は覆土内より出土した。全長9.3cm、先端最大巾1.3cm、基部の長さ約6.2cm、巾5mmを測る鉄鎌である。10は床面より出土した。長さ6.6cm、身幅1.9cm、峯幅4mmを測る。関部が上下端とも段を有する刀子の破片である。11は柱穴より出土した。長さ7.4cm、身幅1.3cm、峯幅4mmを測る刀子の先端の破片である。12は床面より出土した。長さ3.8cm、身幅1.5cm、峯幅3mmを測る、先端がわずかに残る刀子の破片である。13は床面より出土した。長さ6.6cm、身幅1cm、峯幅4mmを測る刀子の先端の破片である。14～16は覆土内より出土している。14は長さ3.6cm、巾8mm、厚さ3mmを測り、断面は細い長方形を呈す。15は長さ5.7cm、巾8mm、厚さ4mmを測り、断面は長方形を呈す。16は長さ6cm、巾6mm、厚さ6mmを測り、断面は四角形を呈する。いずれも錆の付着が激しく、原形を復元できない。用途不明の鉄製品である。

第5表 第5号住居出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土器	杯	20-1			覆土			6.7cm			非ロクロ	手持ヘラ	ミガキ	内黒・木炭痕
●	●	-2			覆土1層			16.3cm			ロクロ	●	●	内黒
●	●	-3			覆土1層			7.7cm			●	回転ヘラ	●	●
●	●	-4		柱穴		13cm		7cm	4cm		●	●	●	●
●	●	-5	15-4		覆土内1層	14cm		8cm	3.4cm		●	●	●	●
●	●	-6		ピット		14.2cm		8.5cm	3.5cm		●	●	●	●
●	●	-7	15-5			13cm		6.5cm	3.2cm		●	●	●	内黒・編刺
●	●	-8			覆土	16.9cm					●	●	●	内黒
●	円筒土器	21-18	15-8	煙道		20cm	19.9cm	17cm	38cm		粘土紐	手持ヘラヨコナデ	手持ヘラヨコナデ	無底式
●	●	-19			覆土	17cm					非ロクロ	●	ヨコナデ	●
●	●	-20				18.7cm					ロクロ	●	ヨコナデミガキ	内黒
●	●	-21						10.5cm			非ロクロ	手持ヘラ	ミガキ	●
●	●	-22				22cm	22cm				ロクロ			



第20图 第5号住居跡出土遺物実測図



第21図 第5号住居跡出土遺物実測図

羽口(第20図17 第15図版7)カマド前の床面より出土した。吹口部分が約 $\frac{1}{2}$ 残存する。外径約5.5cm、内径約2.5cm、長さ約6.5cmを測る。胎土は明褐色を呈し、外面にヘラケズリが施されている。

第6号住居跡(第22図)

(検出状況)A-8グリッドに検出された住居跡である。本遺跡の北北西のはずれに位置する。耕作による攪乱が遺構にまで及び、各所に原形を失っている部分が見られる。遺構の約半分が削平された状態で、保存状態はあまり良いとは言い難い残存を呈している。

(プラン・規模・方向)東側、南側の遺構は削平により確認できなかったが、削平を免れた

北側、西側から推定して、東側約3.5m、西側約3m、南側約2.5m、北側約3mを測る、隅丸方形(台形)の住居跡である。南北軸はN-20°-Eを示している。カマドは攪乱により確認されなかったが、北側床面にははっきりとした焼土が残っていた為、北側中央に位置していたものと見られた。

〔覆土〕4層に大別され、層序は自然堆積を呈している。3層には木炭、焼土等が含まれる。

〔壁・床面〕壁は北壁、西壁共、約10cmを測る。ゆるやかに立ち上がり、はっきりした壁とは言い難い。南壁、東壁は確認できない。床面はほぼ平坦ではあるが、南東に下り傾斜している。床面北側には焼土が広がって分布している。

〔ピット〕本住居室内にピット3個を検出した。P1は東側面北より、直径約70cm、深さ約20cmを測る不整形円形を呈している。P2は最長径約1m、最短径80cm、深さ約20cmを測る不整形円形を呈している。P3は3つの内で最大規模であり、最大径約1m20cm、最短径約1m、深さ15cmの楕円形を呈している。P1内からは、復元可能な内黒土師器片が出土した。用途は貯蔵ピットとも考えられる。

〔周溝〕確認できなかった。

〔カマド〕耕作の攪乱により削平され煙道が確認されなかったが、住居北側ほぼ中央寄り床面に、はっきりとした焼土が残存した為、カマドと認めた。北側面より南南西方向へ約1m10cm、深さ約7cm、幅約1mを測る。残存焼土内より、復元可能な内黒土師器片が出土した。

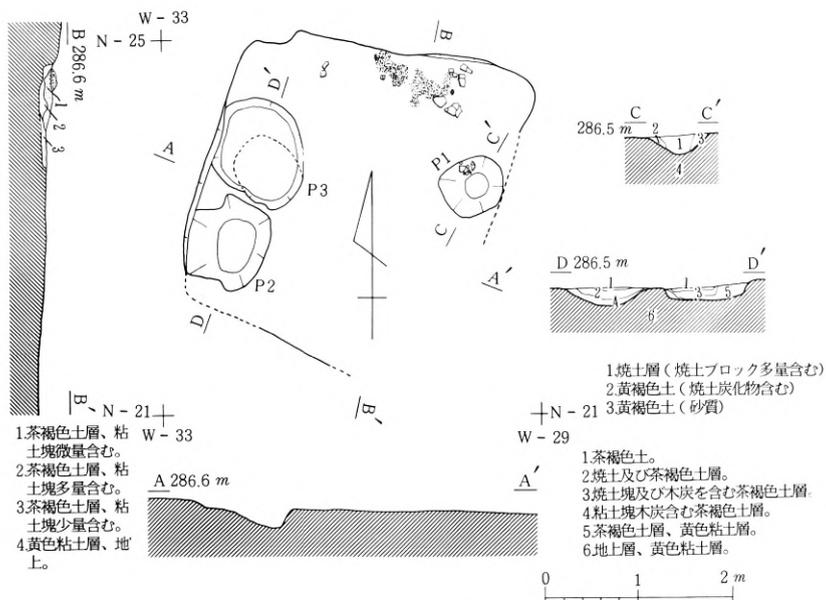
〔遺構〕土師器甕約 $\frac{1}{2}$ 残存のものと約 $\frac{1}{10}$ 片、土師器鉢約 $\frac{3}{4}$ 残存、鉄製品の4点出土した。  
土師器(第23図 第16図版)

杯(2)床面直上層出土で、全体の約 $\frac{3}{4}$ が残存する。底部は平底で、体部から口縁部まで丸味を持って外傾する。外面調整は底部、体部共回転ヘラケズリされ、内面調整は横方向のミガキが見られ、黒色処理されている。

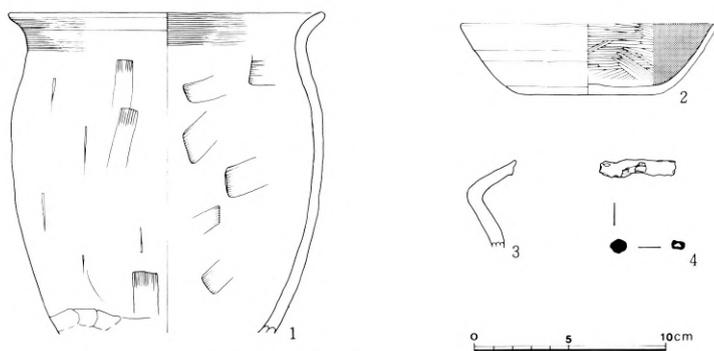
甕(1・3)2点共覆土層より出土した。1は体部から口縁部にかけて約 $\frac{1}{2}$ 残存する。内外共明黄褐色を呈し、胎土はやや粗雑である。調整は内外面共口縁部で横ナデを施し 体部外面はハケメで下半に横方向のヘラ調整が加えられ、体部内面はヘラナデが施されている。体部の線は頸部から肩部で張ることなく長胴形を呈する。2は甕の口縁部の小破片である。頸部より口縁部へ「く」の字へ外傾する。

鉄製品(第23図4)

角釘(4)住居跡ピット内より出土している。断面形は長方形で、先端部では円形を呈すると思われる。



第22図 第6号住居跡実測図



第23図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6表 第6号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	壺	23-1	16-1		覆土	16.5cm	16.2cm							
*	杯	-2	-2		*	13.5cm		6.7cm	3.8cm		ロクロ	ハケ目 回転ヘラ	ナデ ミガキ	内黒
*	壺	-3			*									

第7号住居跡(第24・25図 第7図版)

〔検出状況〕C-7グリッドより検出された。今回調査で検出された8号住居を北側に、2号土坑を西側に位置した中間に、本住居を構築している。保存状態は良くなく、遺構もかろうじて確認された状態で残存している。

〔プラン・規模・方向〕東西約3.9m、南北約4.25mを測り、北東コーナーは隅丸を呈し、プラン自体は隅丸方形であると考えられる。カマドは東壁の北東に、燃焼部と左右袖のみを残す形で確認された。攪乱等により削平され、煙道は確認されなかった。

〔覆土〕褐色土と一部に黄色土塊を含む粘土層との2層から成る。しまりの悪い、自然堆積を呈している。

〔壁・床面〕床面より約30°でゆるやかに立ち上がり、壁高は、東壁で約10cmを測る。床面は硬くなく、しまりが悪いが、ほぼ平坦を呈している。

〔ピット〕本住居内に18個のピットが確認された。本住居の支柱穴と考えられるピットはP1・P2の2個を確認したが、それに相対する柱穴と見られるものは確認されなかった。P6～P16においては、壁直下より検出され、その位置、規模、プランが類似していることから支柱穴と考えられる。P4は長径約55cm、深さ約8cmを深る方形に近い丸形を呈し、土師器が数片出土しているが性格等は不明である。P3からは、はっきりした焼土が検出された。P5、P17、P18について、その性格等は不明である。

〔周溝〕確認されなかった。

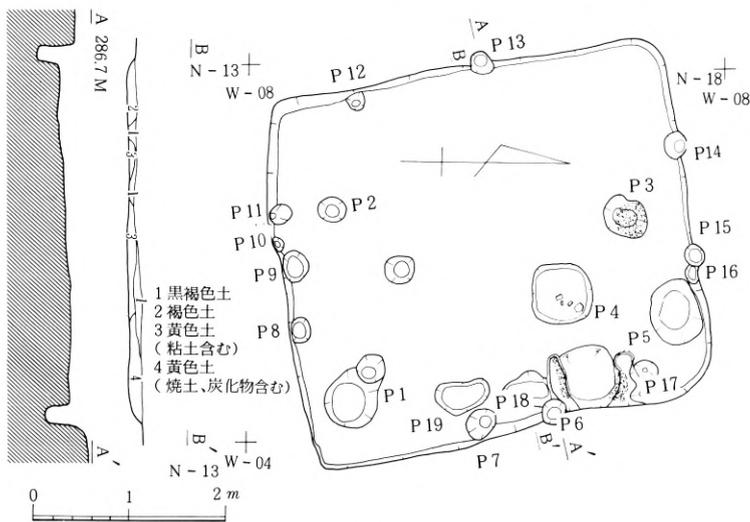
〔カマド〕東壁中央より北側に構築されている。本住居跡内に袖部と燃焼部を残存するのみで、煙道部は攪乱により削平され検出されなかった。袖部は黄色粘土を堅めて構築されており、左袖の長さ約57cm、基底部最大幅約22cmを測る。燃焼部は上面で、最大幅約50cm、奥行き約65cmを測る。

〔遺物〕内黒土師器約 $\frac{1}{6}$ 残存の回転ヘラ調整を呈する杯片、内黒土師器約 $\frac{1}{7}$ 残存の杯片、土師器約 $\frac{1}{4}$ 残存の杯片、土師器で約 $\frac{1}{2}$ 残存と約 $\frac{1}{4}$ 残存の甕2点、合計5点の遺物が出土した。

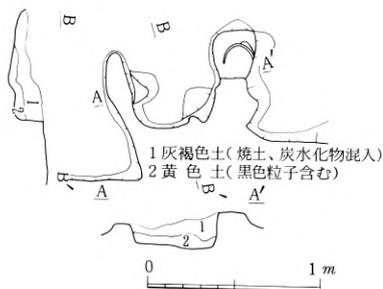
土師器(第26図 第16図版)

杯(1～3)1・2は床面土層確認面より出した約 $\frac{1}{3}$ の残存の破片である。1は口縁部が僅かに内湾する。調整は内外面共緻密なミガキで、内外面共黒色処理が施されている。2

はロクロ成形により、切り離し後底部から体部下端に再調整が施され、内面ヘラミガキ、黒色処理したものである。3はカマド焼土内より出土した約 $\frac{1}{4}$ の破片である。体部はロクロによるヘラ調整が加えられている。内外面共、淡赤黄褐色を呈し又磨滅が著しい。



第24図 第7号住居跡実測図

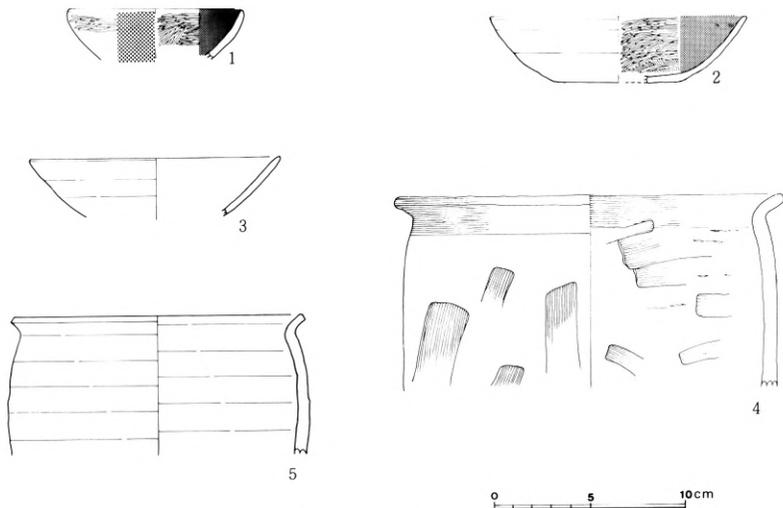


第25図 第7号住居跡カマド実測図

甕(4~5) 4・5 共床面上層覆土内より出土した。口縁部は強く外傾し「く」の字形を呈する。4は粘土紐成形と思われる。口縁は横ナデ、外面は全面にわたって縦方向のヘラケズリが施されている。5はロクロが使用され、体部やや丸味を持つ、色調は茶褐色を呈する。

第7表 第7号住居跡出土土器一覽表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	26-1				9.5cm					粘土紐	ミガキ	ミガキ	内外黒
●	●	-2	16-3			13.5cm		7.2cm	3.5cm		ロクロ		ミガキ	内
●	●	-3		カマド		13.2cm					ロクロ			黒
●	●	-4	16-4		覆土	20.4cm		19.7cm			粘土紐	ヘラケズリ	ヘラナデ	
●	●	-5				15.4cm		15.8cm			ロクロ			



第26図 第7号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡（第27・28図 第8図版）

〔検出状況〕本遺跡の北北西に位置し、B～C、7～8グリッドにかかり、7号住居の約3m北に隣接して検出された。検出面は茶褐色土層で確認された。遺構はかなり良好な状態を呈して、粘土層を掘り込んで構築されている。

〔プラン・規模・方向〕東壁約4m、西壁約4.2m、南壁約4.2m、北壁約4mを測る。ほぼ方形を呈する平面プランである。南北軸方向はN-10°-Wを示している。カマドは北壁中央の東よりに位置している。住居内に周溝をめぐらしている。

〔覆土〕自然堆積で5層に分かれる。全体的に黄黒褐色土を呈しているが、床面直上は黄色土から成る。

〔壁・床面〕各壁とも確認された。壁高は、東壁約20cm、西壁約18cm、南壁約18cm、北壁

約28cmを測る。東、西壁は床面より垂直に立ち上がる形を呈しているが、南壁は約70°、北壁は約65°の角度で、床面より立ち上がっている。床面は平坦で、住居内覆土に比べて固く、粘性のある黄褐色土を叩きしめている。床面の施設には、ピット、周溝、カマドが検出された。焚口部付近床面から土師器長甕が4点セットで重なった状態で出土した。

〔ピット〕本住居内に11個のピットが検出された。P1～P4は、その位置、規模、プランから主柱穴と考えられる。P5～P9においては、各壁直下より検出され、位置、規模、プランが類似している為、支柱穴と考えられる。P10は、カマド焚口の西側に位置し、上面長径約45cm、下面直径約16cmを測り、不整形円形を呈している。P11は、カマド焚口の東側に位置し、下面長径約1.9m、短径約60cmを測り、ピットの東隅に遺物が数点出土している為、貯蔵ピットとも考えられる。

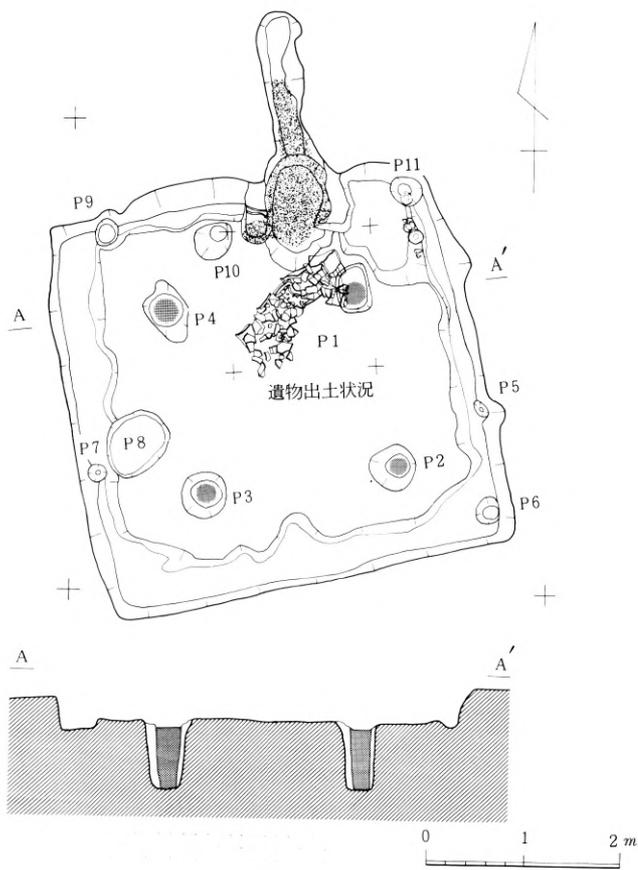
〔周溝〕本住居内の四方に検出された。東側と北側は比較的深く、南側と西側は浅くて巾広を呈している。東側は長さ約3.8m、最大巾約35cm、南側は長さ約3.9m、最大巾約60cm、西側は長さ約3.9m、最大巾約55cm、北側は長さ約2m、最大巾約20cmを測り、各コーナー部分は巾広く丸みを呈する周溝である。

〔カマド〕北壁中央の東よりに構築されており、両袖共長さ約65cm、巾約35cmで、高さ約45cmを測る。燃焼部巾は、入口で約45cm、中央で約50cm、奥行で約30cmであり、燃焼部壁面は赤く焼けてガリガリしている。焼道は北壁に直行し、長さ約1.5m、巾約42cm、深さ約40cmを測り、底面はほぼ水平のまま煙出部に至る。左袖中央部に巾約5cm、深さ約3cmを測る溝状を有している。性格等は不明であるので、今後の調査を期待したい。

〔遺物〕ピット(P11)からは、内黒土師器の杯3点が出土し、焚口付近の床面より、土師器長甕4点出土。床面より判読不明の墨書土師器片が一点出土。又、床面検出中に、覆土中より刀子、砥石、土鈴等が出土された。

土師器(第29・30図 第17図版)

甕(1～8)1は床面から出土し、2・3・5は覆土内第2層より出土した。いずれも底部から体部下半にかけての残存であり、平底を有し、底部に木葉痕を残す。1は底部から体部に直立して立ち上がりを見せるが、2・3・5は丸みをもって内湾して立ち上がる。1の外面部はハケ目より調整され、内面部はヘラナデが施されている。2は摩滅が激しく調整は不明であるが、粘土紐痕が見られる。3は外面調整が不明であり、内面調整はヘラナデを施す。5は内外面共、横方向のヘラナデ調整が施されている。6は床面から出土した完形品である。底部は平底で、底部に木葉痕を残す。外面面部はヘラナデ調整され、口縁部は横ナデ調整が施されている。内面は摩滅が激しく不明であるが、体部に粘土紐痕が見られる。4・5・7・8は4点セットでカマド付近床面より出土しており、いずれも長胴

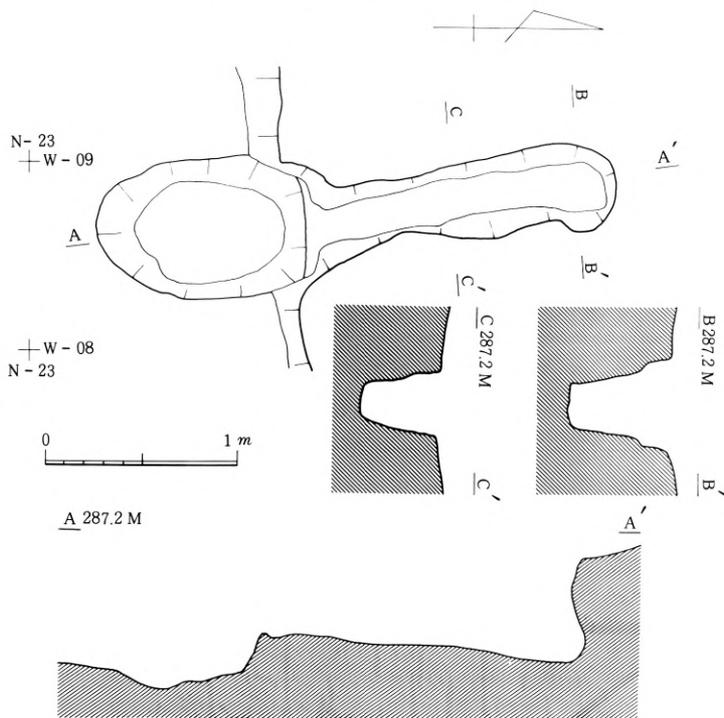


第27図 第8号住居跡実測図

形で、底部に木葉痕があり、口縁部は外反するタイプである。4の底部は欠損され不明であるが、外面体部はハケ目による調整が施され、内面は横方向のヘラナデが見られる。

杯(10~13) 10は床面より出土した。底部の小片である。底部は回転ヘラ調整され、墨書が見られる。内黒処理されている。11は覆土内2層より出土され、底部から体部の約 $\frac{2}{3}$

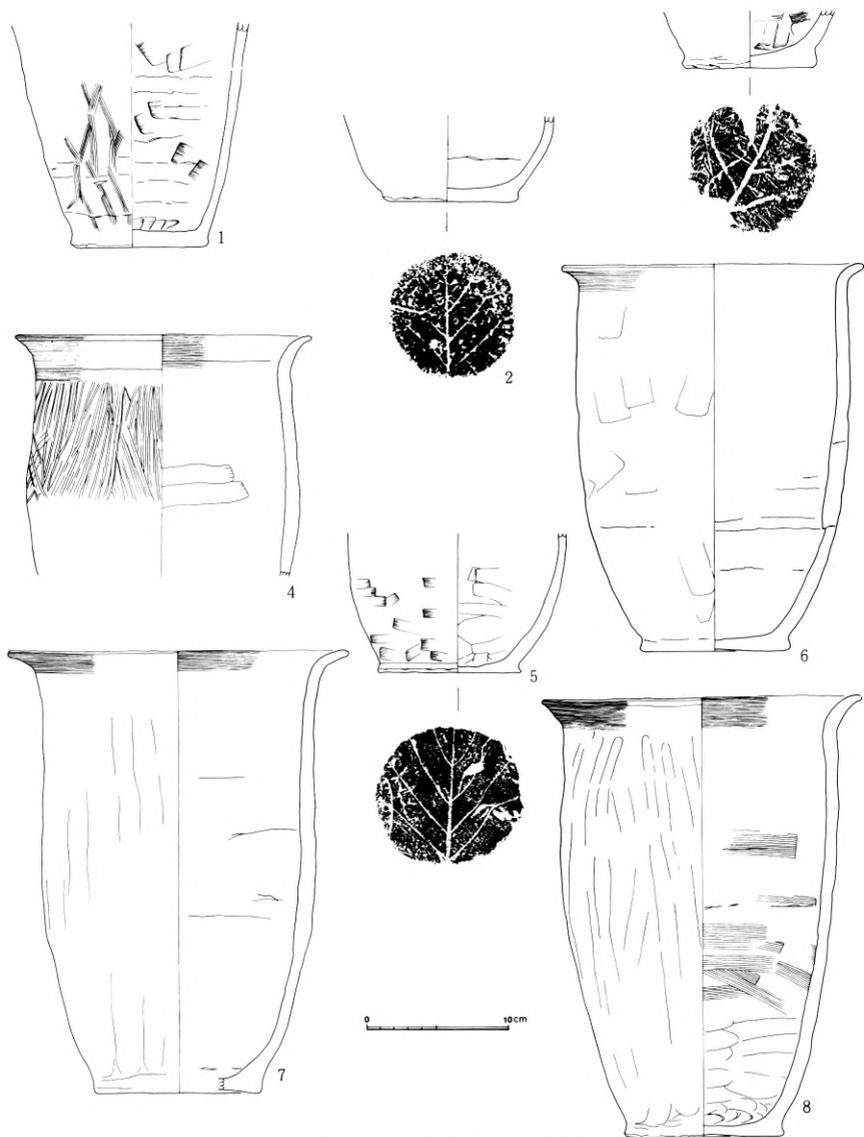
残存する。底部は平底で、底部から体部に内湾する。調整は内外面共、緻密なヘラミガキで単位は1～2mm、長さ3～4cmである。内外面共黒色処理され、器厚がわずかに厚い。12・13は覆土内第2層より出土で、12は全体の約 $\frac{1}{5}$ 、13は約 $\frac{1}{2}$ 残存する。いずれもロクロ成形で、平底を有し、底部より丸みをもって外傾し、口縁部はわずかに外反して端部に至る。13は12より若干直線的である。外面は底部と体部下半に回転ヘラ調整が施され、内面は斜め方向のヘラミガキが施され、黒色処理されている。



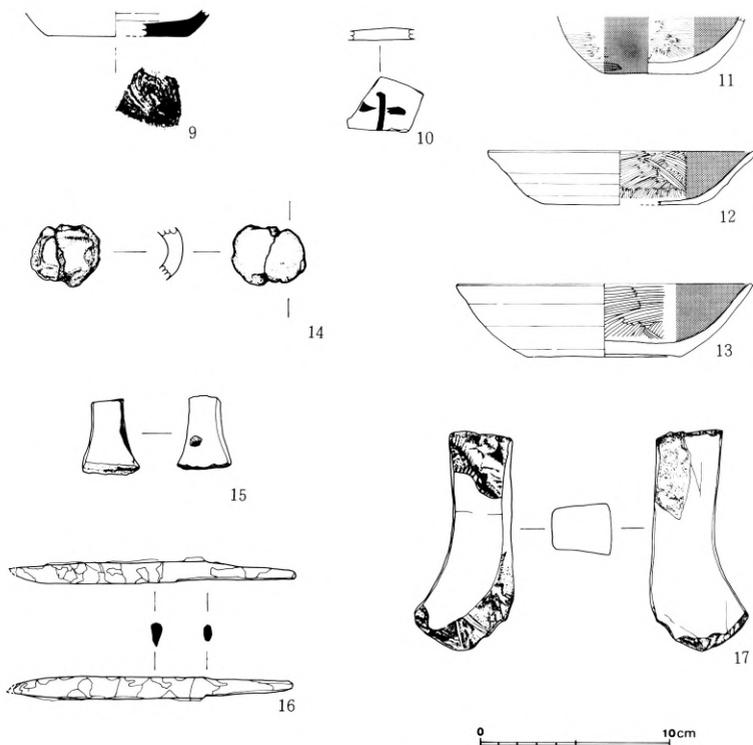
第28図 第8号住居跡カマド実測図

須恵器（第30図）

杯(9)覆土内より出土している。底部のみの小片である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りで切り離されている。胎土は密で、外面が灰茶褐色で、内面は灰色を呈し、焼成はき



第29图 第8号住居跡出土遺物実測図



第30図 第8号住居跡出土遺物実測図

めて良好である。

土製品(第30図14 第16図版5)

土鈴(14) 床面より出土している。全体の約 $\frac{1}{2}$ が残存する。厚み約8mm、径推定3.5cmを測る。全面灰茶褐色を呈している。

石製器(第30図 第16図版)

砥石(15・17) 15は覆土内、17は床面より出土している。15は長さ3.6cm、厚さ最大2.3cm、最小1.2cmを測る。かなり使用し、摩滅されている。17は長さ11.5cm、巾2.9cm、厚さ2.7cmを測り色調は黄白色を呈している。

鉄製品(第30図 第16図版)

刀子(16) 覆土内より出土した刀子である。刀長15cm、巾1.1cmで、先端を欠いている。刀身の断面は三角形の平造りである。

第8表 第8号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他	
土師器	埴	29-1	17-2		床			9.7cm			粘土組	ハケ目	ヘラナデ	木炭痕	
	＊	＊	-2		覆土			9 cm			＊	＊	＊	＊	
	＊	＊	-3	17-3	＊			9.4cm					ヘラナデ	＊	
	＊	＊	-4	-4	床	20.7cm	19.1cm					ヨコナデ	＊	＊	
	＊	＊	-5		覆土			10 cm				＊	＊	木炭痕	
	＊	＊	-6	17-5	床	20.9cm	19.1cm	10.6cm	27.3cm			粘土組	ヨコナデヘラナデ	＊	＊
	＊	＊	-7	-6	＊	23.7cm	19 cm	11.7cm	31 cm			＊	＊	＊	
	＊	＊	-8	-7	＊	22 cm	19.3cm	11.2cm	31 cm			＊	＊	＊	
	須虫器	杯	30-9			覆土			7.2cm			ロクロ	＊	＊	回転系切り
		土師器	＊	17-1		床			5 cm			＊	＊	＊	内黒・墨書
	＊	＊	＊	-11		覆土			8 cm	2.8cm		＊	＊	＊	内黒
	＊	＊	＊	-12		＊	14 cm		8 cm	2.8cm		ロクロ	回転ヘラ	＊	＊
	＊	＊	＊	-13		＊	15.5cm		8 cm	3.9cm		＊	＊	＊	＊

第9号住居跡(第31・32図 第9図版)

〔検出状況〕遺跡の北側、B-9グリッドより検出された。今回の調査区の中では、北端に位置する。耕作による攪乱は見られず、保存状態はわりあい良好であった。

〔プラン・規模・方向〕東西3.4m、南北3.5mを測る隅丸方形の住居跡である。各壁共ふくらみを持たないで構築されている。中心線は南北軸とほぼ平行を示している。

〔覆土〕覆土はほぼ2層から成る。自然な堆積と思われる。

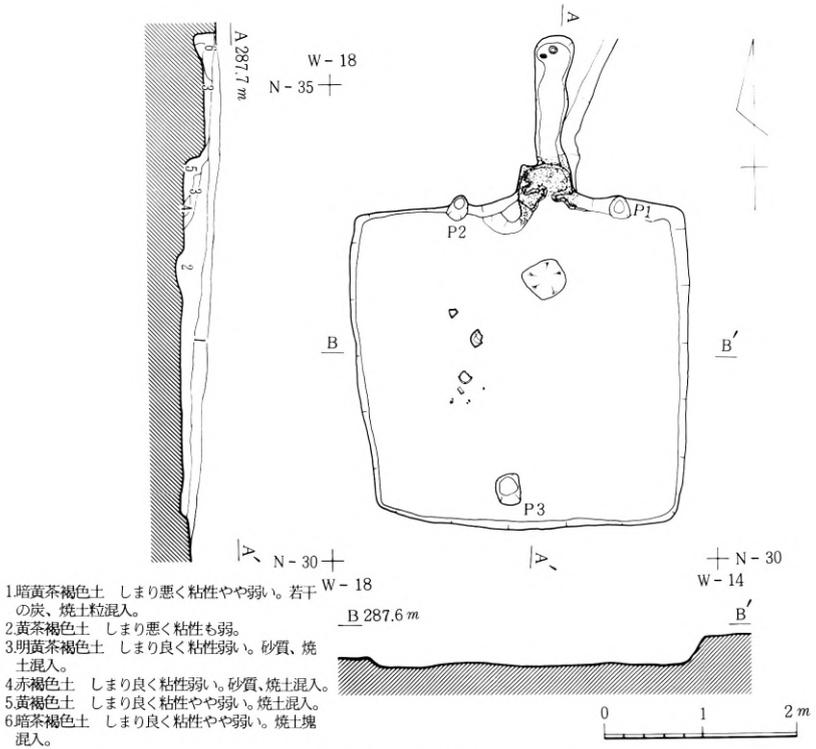
〔壁・床面〕壁は各壁ともに確認された。床面から約50°で立ち上がり、高さは東壁で30cm、西壁10cm、南壁7cm、北壁で20cmを測る。床面はほぼ平坦ではあるが、残存部は柔軟な状態であった。

〔ピット〕ピットは屋内に3個(P1・P2・P3)が検出された。P1・P2は住居北側、北壁内より検出された。深さは20cmを測り、住居跡との位置、規模、プランが類似しているため柱穴と考えられるが組み合う他のピットは発見されなかった。P3は南壁の中央、住居内側に位置している。出土遺物はなく、性格等は不明である。

〔周溝〕確認できなかった。

〔カマド〕北壁、やや東よりに構築されている。カマド内堆積土は6層に分けられる。2層を除く、全層に焼土を含み、焚口付近では砂質を含んでいる。袖部は焚口をせぼめる形で広がっている。煙道は北に延びており、煙道中央部に広がりをもつ。煙出し部に2個の小穴を有する。カマドの長さは約3.5m、燃焼部の最長袖幅は1.2m、煙道部の幅約60cm、深さ約50cm、煙出し部の幅約80cm、深さ約40cmを測る。煙道は焚口から煙出しへ向けて5°以下のゆるい上り傾斜を呈してのびている。煙道の東側に、今回の試掘調査のトレンチ

と思われる跡が検出された。



- 1 暗黄茶褐色土 しまり悪く粘性やや弱い。若干の炭、焼土粒混入。
- 2 黄茶褐色土 しまり悪く粘性も弱。
- 3 明黄茶褐色土 しまり良く粘性弱い。砂質、焼土混入。
- 4 赤褐色土 しまり良く粘性弱い。砂質、焼土混入。
- 5 黄褐色土 しまり良く粘性やや弱い。焼土混入。
- 6 暗茶褐色土 しまり良く粘性やや弱い。焼土塊混入。

第31図 第9号住居跡実測図

〔出土遺物〕内黒土師の鉢、底部に回転糸切り跡痕を有する須恵器の杯、底部に、手持ヘラ調整を施した内黒土師器杯、土師器甕等が出土した。

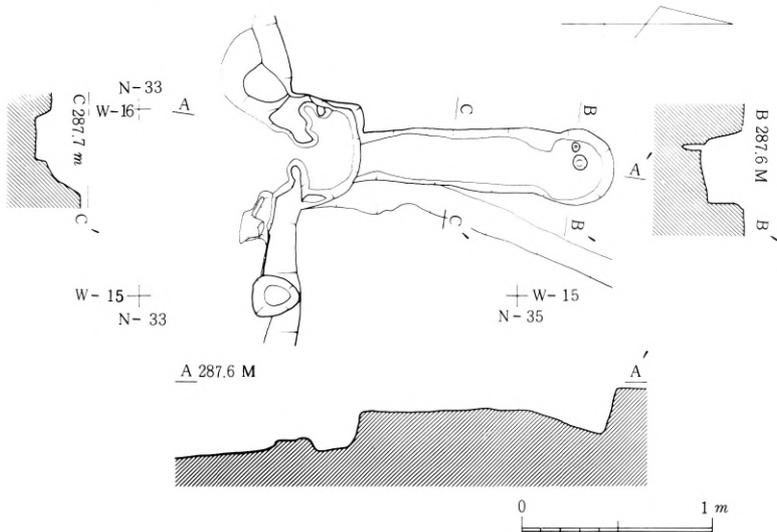
土師器（第33図 第18図版）

杯（1～4）1・2はロクロが使用され、1は覆土内、2は床面より出土している。外面はロクロ目が明瞭である。3・4は住居内床直上より出土した。底部は平底で丸味を持って外傾し、口縁部で内湾する。外面調整は手持ヘラ調整が施され、内面横方向のミガキが加えられている。1・2・3・4共、内面黒色処理が施されている。

甕(5~7)5は覆土内より出土した約 $\frac{1}{4}$ 残存の破片である。口縁部は強く外反し「く」の字を呈する。6は小型の甕で約 $\frac{3}{4}$ 残存の破片である。器厚があり口縁部は外反する。5、6共口縁部横ナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている。7は床面より出土したロクロ使用の大型の土師甕である。底部は欠損しているが、その他はほぼ完形で出土している。口縁部は短く外反する。内面は緻密なミガキで黒色処理が施されている。

須恵器(第33図 第18図版)

杯(8)覆土内第2層より出土した一部欠損ではあるがほぼ完形である。底部は平底で体部下半は丸味をもって立ち上り、わずかに外傾する。回転糸切りで切り離し、下半に回転ヘラ調整が施されている。



第32図 第9号住居跡カマド実測図

第9表 第9号住居跡出土土器一覽表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	33-1		覆土	12.1cm		6.4cm	4.4cm			ロクロ			内黒
"	"	-2	18-1	床面	11 cm		6.4cm	4.8cm			ロクロ	回転ヘラ	ミガキ	"
"	"	-3		"	12.9cm		7.2cm	4.6cm			手持ヘラケズリ		ミガキ	"
"	"	-4	18-2	"	16 cm		7.3cm	6.9cm			ヘラナデ		ミガキ	"
"	壺	-5		覆土	20.4cm	18.6cm					粘土組	ハケ目	ナデ	
"	"	-6		"	10.3cm	9.3cm								
"	"	-7	18-3	床面	23.5cm	21.5cm					ロクロ			内黒
須恵器	杯	-8	-4	覆土	13.6cm		8 cm	4.2cm			ロクロ	回転ヘラ		回転糸切り



第33图 第9号住居跡出土遺物実測図

#### 第 10 号住居跡（第 34 図）

10 号住居は 11 号住居に当り、11 号住居を切っている。

10 号住居跡も昭和 50 年の開畑によって、発見された遺跡であり、遺構の上層には、その際はこぼれた作土がある。今回調査によって 11 号住居跡と切合い関係にあることが明らかになり、なお東側が敷地となっているため、全面調査が出来なかった。

〔プラン・規模・方向〕11 号住居跡を切っており、西壁、北壁、南壁が検出されたが、全面に検出されたのは、西壁 3.7 m のみで、北壁は 2.3 m、南壁は 2 m と途中で中止した。東壁は調査できなかった。方位の南北軸は西に 25° 振れている。

西壁下に周溝が認められ、この周溝を切って、方形ピットが検出された。

柱穴は南西部 1 基のみ検出され他は敷地外に当たるため不明である。

〔覆土〕10 号住居に伴う覆土は 9 層に大別され、層序はほぼ自然堆積を呈しているが、11 号とを切った西壁に接する層序は巾 20 cm にわたって、四層の乱れが認められる。

〔壁・床面〕10 号住居跡の壁は三方に検出されたが、全面に検出されたのは西壁のみで長さ 3.7 m あり、11 号住居を完全に切っている。北壁 2.3 m、南壁 1.2 m と敷地外に当たる北壁と南壁は調査を行なわなかった。各壁の立上りは、西壁 75°、北・南壁もほぼ同じである。東壁は不明である。壁の高さは各壁とも 50 cm を測る。

床面は西壁で 3.5 m を測り、北・南壁は全面調査を行なわなかったため、不明であるがほぼ西壁と同じ 3.5 m 前後と推定される。床面は固くしまっており、土師器の破片が検出された。柱は西壁寄りに柱の掘方 1 辺 50 cm、深さ 30 cm、柱の当り 20 cm の柱穴が検出された。西壁守りに径 20 cm、深さ 20 cm の側柱が 2 m 間隔に 2 本と、南側柱に接して 1 本が検出された。

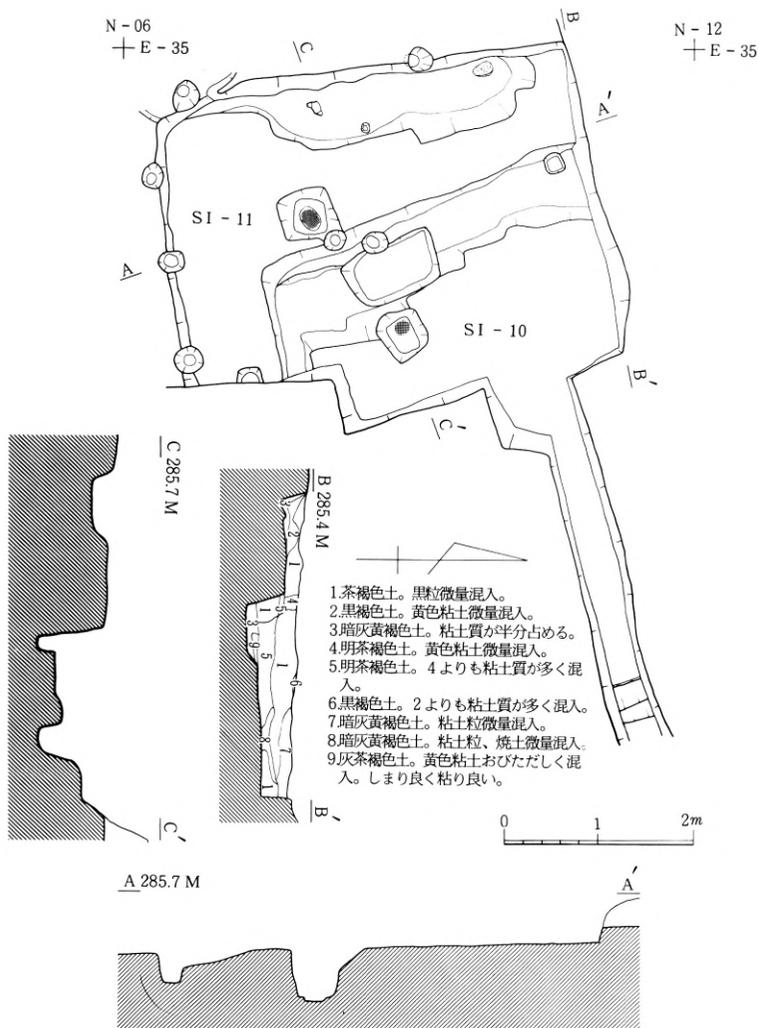
〔周溝〕周溝は西壁と南壁に添って検出され、ほぼ L 字型を呈していたと考えられる。西壁に伴う周溝は、北部で 80 cm、南部で 1.1 m、長さ 3.5 m、深さ 10 cm を測る。この周溝の中央部南寄りに南北 1 m、東西 50 cm の方形ピットがあり、深さ 10 cm である。

〔カマド〕確認出来なかった。

#### 第 11 号住居跡（第 34 図）

遺跡の東部に位置し住居の約  $\frac{1}{2}$  は敷地外にある。調査は敷地内のみを実施した。方位は N - 06、E 35 に当り、標高 285.4 m 付近で発見された。この地点は昭和 40 年頃山林だった現在地を開畑したため、遺構の上層部は盛土があり、自然堆積は認められない。

遺構は 10 号住居跡と 11 号住居跡が重複している。重複関係は、11 号住居跡が 10 号住居跡に切られていることが判明している。



第34図 第10号住居跡、第11号住居跡実測図

〔プラン・規模・方向〕11号住居跡は10号住居跡に切られているため、西部と南部のみが残存している。現存する遺構は南北4.5m、東西3mで西壁、南壁に面したL字型の遺構である。中央を結ぶ軸線は南北軸が西に6.5°振れている。壁は地山を掘り込んだもので、南・西壁とも約20cmを測る。北・南・東壁は完全に切られて残っていない。壁面下の周溝は西壁に添って検出された。柱穴は南西隅に位置するものが検出されたのみで、他の柱穴は、10号住居跡によって切られている。

この柱穴は50cm×60cmの掘方を持ち、中心部に約30cmの柱の当りが認められる。南には壁を切った壁面に、約1m間隔に径25cmの側柱が4個検出されている。

〔覆土〕11号住居跡に伴う覆土は3層に大別され、層序はほぼ自然堆積を呈している。

〔壁・床面〕11号住居跡の壁は三方が検出されたが、全面に確認されたものは、西壁のみで、南壁は約3m、北壁も同じく3mである。南と北壁は敷地外に当たるため、調査を中断した。

各壁の立ち上りは3面とも床面から70°～75°の角度で立ち上がり、高さは西壁で25cm、北壁は低く約15cm、南壁は約20cmを測る。

床面は固くしまっており、壁沿いに土師器破片と焼石が検出された。

〔周溝〕周溝は西壁に添って検出され固い床面に巾70cm、長さ3m、深さ10cmを測る。

〔カマド〕確認できなかった。

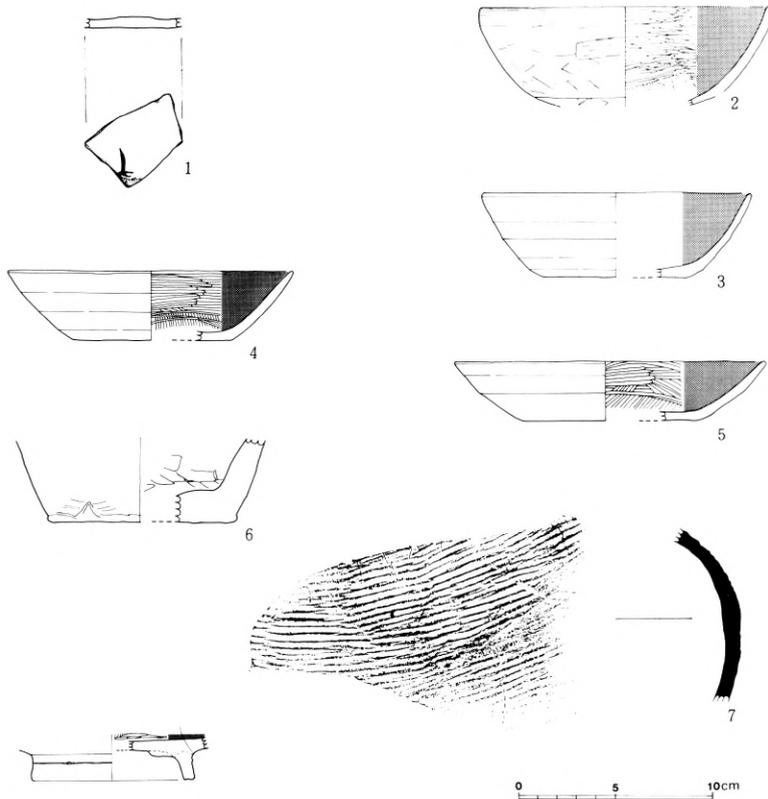
〔遺物〕第10号住居跡と第11号住居跡は切り合っているため、両遺構より出土した遺物は一括して掲載した。ロクロ成形の杯が3点、高台付杯が1点、墨書片が1点出土し、非ロクロの杯が1点、土師器甕、須恵器甕各1点出土した。各遺物は、全て覆土内より出土した。

土師器（第35図 第18図版）

杯（1～5・8）1～3と8については覆土内2層、4・5は覆土内1層より出土した。1・3～5・8はロクロが使用され、2はロクロ未使用と考えられる。1は底部のみの墨書土器片である。底部は平底で、回転ヘラ調整され、内面は黒色処理がされている。墨書は判読できない。2は底部から外傾気味に立ち上がる体部を有し、口縁部は内湾して伸びる。外面調整は口縁部横ナデ、体部は手持ヘラケズリである。内面調整は、全面に横方向のミガキ、下半に縦方向のミガキが施され、内黒処理されている。3・4・5はいずれも平底で、体部はわずかな丸みを持って立ち上がる。外面にはロクロ目が観察され、体部下端から底部にかけて、回転ヘラケズリが加えられ、底部は回転ヘラ調整が施されている。内面は黒色処理され、体部に横方向の丁寧な細かいミガキが施されている。3は内面が摩滅されている。8は高台付杯で、底部のみ約 $\frac{1}{4}$ 残存する。高台部8.4cm、高台部高さ1.5cmであり、

内面は内黒処理されミガキ痕が見られる。底部は回転ヘラ切り後、高台を張り付け、ナデが雑である為、張り付け痕の一部を残す。11号住居から出土したものである。

甕(6)覆土内1層より出土で、底部と体部下半約 $\frac{1}{4}$ が残存する。底部は平底で、体部へ直立する。底部に木葉痕が見られ、体部外面調整はヘラナデが施され、一部に粘土紐跡が見られる。内部は底面にヘラナデがある。



第35図 第10号・11号住居跡出土遺物実測図

須恵器(第35図 第18図版)

甕(7)覆土内2層より出土した。体部のみを残す破片である。粘土組成形の後ロクロ調整されている。外面はタタキ目が施されている。

第10表 第10・11号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	35-1	18-5		覆土	15.2cm						手持ヘラ	ミガキ	内黒
"	"	-2			"	14 cm		7.4cm	4.4cm		ロクロ	回転ヘラ	"	"
"	"	-3			"	14.8cm		8.2cm	3.7cm		"	"	"	"
"	"	-4			"	16.6cm		9 cm	3.1cm		"	"	"	"
"	"	-5			"			9.8cm			粘土紐			
須恵器	壺	-6			"							タタキ	ヘラナデ	
須恵器	"	-7	18-6		"							タタキ	ヘラナデ	
土師器	杯	-8			"					1.5cm	ロクロ	回転ヘラ	ミガキ	内黒

## 第2節 掘立柱建物跡(第36図)

調査区内に2棟の掘立柱建物跡が検出された。天開遺跡の古代集落の、中心的な役割をもった遺跡と考えられる。

### 第1号建物跡(第36図・第2図版)

遺跡の南斜面のほぼ中心部に当り、地上ローム面で掘り方を確認した。精査の結果、東西2間、南北3間の掘立柱建物跡であることが判明した。検出された10ヶ所の掘り方は、東側4ヶ所は1辺80cm~1mを、他の6ヶ所は1辺50cm~60cmを測る。

10ヶ所の柱穴のうち6ヶ所の掘り方は重複しており、建物自体に建て換えがあった可能性がある。各掘り方は垂直に近く掘り込まれ、掘り方の底面レベルは、ほぼ水平に近い。

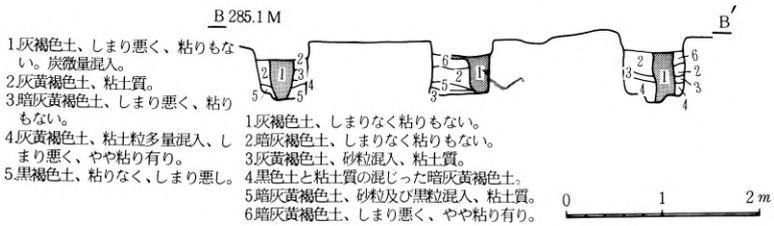
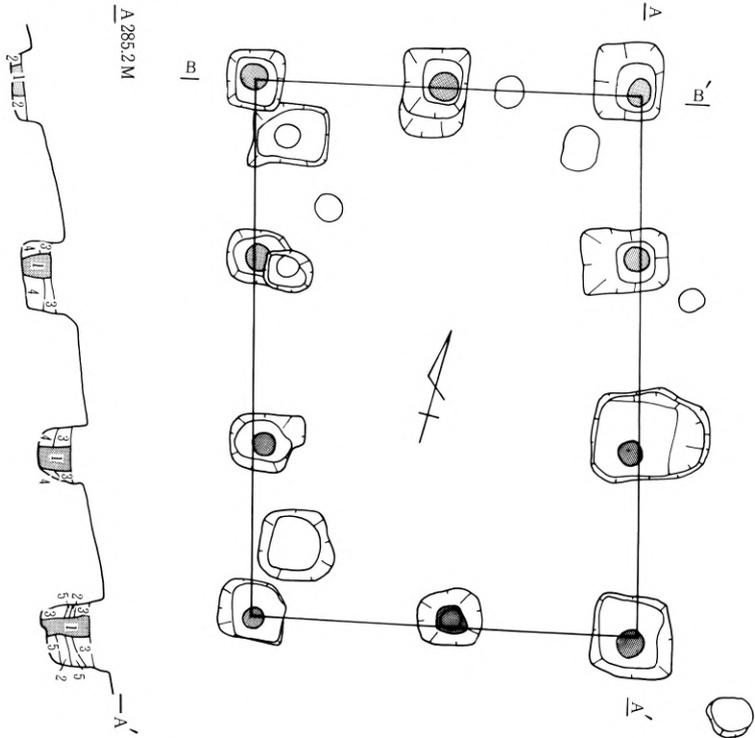
全ての掘り方には20~25cmの柱痕を検査することが出来た。柱痕はほとんどが掘り方底面に直接掘えられている。

柱痕の中心をとった各柱列の全体の長さは、東側柱列で5.8m、南側柱列で4m、西側柱列で5.7m、北側柱列で4mを測る。全体では方形プランを呈する。

各柱間寸法は東側柱列で北から1.75m+2m+2m、南側柱東から、2m+2m、西側柱、南から1.8m+1.95m+1.9m、北側柱列は西から2m+2mを測る。7尺等間に設計されたものと思われる。柱痕は柱列で一線にのっている。東側柱列を通る南北軸線は真北より13°西に振れている。

以上1号建物跡は2間×3間の側柱建物跡である。7尺等間と考えられる柱間を有している。本遺構掘り方埋土中から土師器の小破片が出土している。これらの中にロクロ成形による土師器杯の小破片が含まれており、建物跡の年代も9世紀以降に比定されることは明らかであるが、下限については限定できない。他遺跡の例から考えて、一応平安時代の

建物跡と考えられよう。



第 36 図 第 1 号建物跡実測図

(出土遺物)小破片が数点出土しているが、いずれも実測不可能で、唯一点のみ、堀方埋土中。

土師器(第37図)

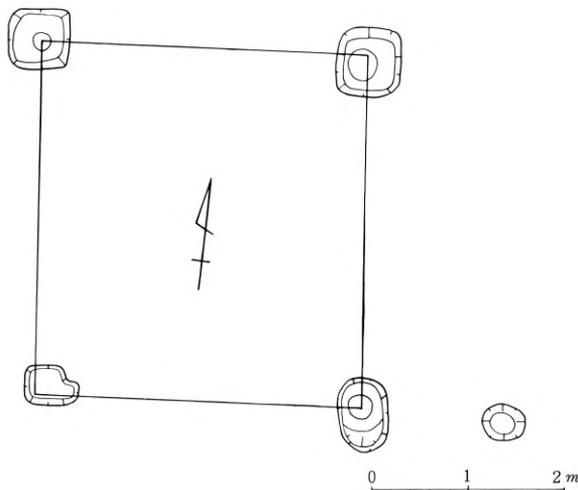
高台付杯(1)1は堀方埋土中より出土した。高台部のみが残存である。高台は低く、外に開く。高台は張り付けによるが、底部切り離しは不明である。内外面共黒色処理が施され、ミガキによる調整が見られる。底径は7cm、脚高は5mmを測る。ロクロ成形による。



第37図 第1号建物跡実測図  
土師器高台付杯

第2号建物跡(第38図)

A-8~A-9グリットにかかる掘立柱建物跡と考えられる遺構である。この遺構にとりまわらう掘方は、4個検出された。各掘方には、直径約15cm、深さ約23cmと直径約30cm、深さ約24cmを測る柱痕と思われる遺構が検出された。柱列は、東西2列、南北2列が確認されたが、中柱は確認されなかった。したがって、検出された柱穴からは、東西約2間、南北約2.5間の長方形を呈する建物になる可能性も考えられる。遺構の中軸線はN-5°-Wを示している。尚、遺構検出面及び、柱穴面から、遺物は検出されなかった。



第38図 第2号建物跡実測図

### 第3節 その他の遺構

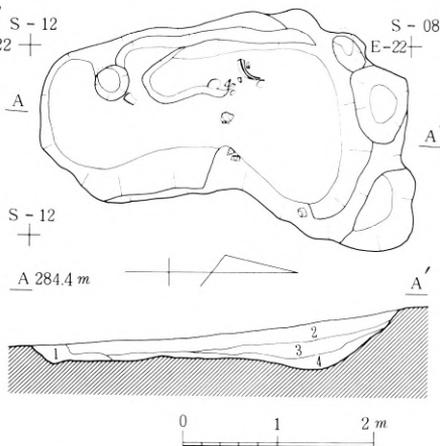
第2節において、竪穴柱居・掘立柱建物跡について記してきたが、これに関連する土壌や遺跡の遺構と関係の深い遺物包含層についてふれることとする。

#### 第1号土坑(第39図)

1号掘立柱建物の南西部に接して検出された土壌である。不整形の長方形を呈し北側で2m、南側で1.5m、長さ(南北)4m、深さ0.5mを測る。土壌内の堆積は4層に大別され、自然堆積であるが、南部は耕作により削平されている。第4層から、遺構の時期、決定の資料となりえる遺物が数点検出された。

#### 土師器(第40図 第19図版)

杯(1~4)1は土坑覆土内第2層より出土した。口縁部にわずかな欠損を見る完形品である。丸底の底部から口縁部に内湾気味に外傾して立ち上がるもので、外面体部中央の位置に段、屈曲を持つ。体部、底部とも手持ちヘラケズリが施され、内面はミガキ、黒色処理が施されている。2は土坑覆土内より出土した約 $\frac{1}{2}$ 残存である。平底風丸底の底部から、口縁部に丸みをおび外傾して立ち上がる。外面体部、底部とも手持ちヘラケズリ調整され、口縁部に横ナデが施されている。内面はミガキ、黒色処理が施されている。1・2、と



- 第1層：明灰黄褐色土層 粘土質。砂粒を含む。
- 第2層：黒褐色土層 しまり悪く、粘性少し有り。褐色土の固まりが多数点在。砂粒を含む。
- 第3層：黒褐色土層 しまり悪く、粘性少し有り、褐色土の固まりが点在。第2層よりは少ない。砂粒を含む。
- 第4層：暗灰黄褐色土層 しまり良く粘性ほとんどない。砂粒、

第39図 第1号土坑実測図 焼土、炭を含む。

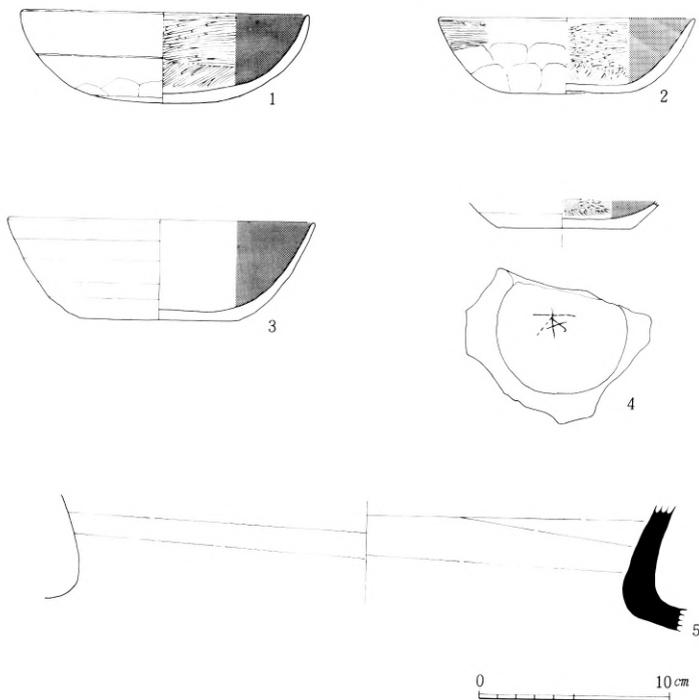
ともにロクロは未使用である。3は土坑覆土内より出土した約 $\frac{1}{3}$ 残存である。成形はロクロによる。外面体部に回転ヘラケズリが施されている。内面は黒色処理が施されているが、磨滅により調整は不明である。4は土坑内より出土した底部約 $\frac{1}{5}$ 残存である。成形はロクロによる。外面底部と体部の境が明瞭である。底部に「本」印のヘラ書きが見られるが、あまり明瞭ではない。内面はミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器(第40図 第19図版)

甕(5)5は土坑覆土内より出土、頸部約 $\frac{1}{3}$ 残存である。成形はロクロによる。外面頸部は横ナデが施された後、平行叩目で調整されている。口縁部で外反する形を有している。頸径は約26.8cmを測る大甕である。

第11表 第1号土坑(SK01)出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	40-1	19-1		覆土内	15 cm		7.3 cm	4.8 cm			手持ヘラ	ミガキ	内黒・有段
"	"	2	2		覆土内	13.4 cm		7. cm	3.9 cm			手持ヘラヨコナデ	"	内黒
"	"	3	3		"	15.9 cm		8.3 cm	5.3 cm		ロクロ	ヘラケズリ	"	"
"	"	4			"			6.8 cm			"		ミガキ	内黒・ヘラガキ
須恵器	甕	5	4		"						"	平行叩目		



第40図 第1号土坑出土遺物実測図

## 第2号土坑

7号竪穴住居跡、西部5mに検出された土坑である。不整形など円形で、東西2m、南2m、深さ25cmを測る。特に実測可能な遺物は検出されなかった。

### 第1号 遺物包含層(SXO1)

遺跡の北西部に当り、遺跡の西部底地を北部高地から、南部底地に、自然に出来た掘坑の黒褐色土の遺物包含層である。堆積土中から瓦片、土師器、須恵器等が出土した。

土師器(第41・42・43・44図 第20・21図版)

杯(1・2)1・2共C-3グリッドより出土している。1は底部のみ約 $\frac{1}{3}$ 、2は底部から口縁部にかけての $\frac{1}{2}$ の残存である。1・2共ロクロ成形で内黒処理されている。1は底部は平底で、回転ヘラ調整が施されている。2は平底で底部より直線的に外反し、端部に至っている。外面調整は回転ヘラケズリと思われる。内面は他方向のヘラミガキが施されている。1・2共外面底部に「本」の墨書が書かれている。

杯(3)C-2グリッドより出土した。底部から体部約 $\frac{1}{3}$ の残存である。底部は平底で、体部は丸みを帯びて外傾している。口縁部は欠損されている。成形はロクロによらない。外面は底部、体部共ヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキが加えられ、黒色処理が施されている。

高台付杯(4)C-2グリッド第2層より出土している。底部のみ約 $\frac{3}{4}$ の残存である。高台は低く、ロクロ回転により仕上げナデが加えられ、杯部の切り離しは観察できない。内面は黒色処理が施されている。

杯(5~9)5・8・9・10はC-2グリッド第2層より出土、6・7はC-3グリッド第2層より出土している。5・6・7・10は約 $\frac{1}{5}$ 、8、9は約 $\frac{1}{8}$ の残存である。いずれも底部は一部を残して欠損している。6は口縁部が欠損している。5は平底で底部より体部へ丸みを持って外反しながら立ち上がり、口縁部でわずかに内湾する。外面は磨滅が激しいが、ロクロは使用されず、手持ヘラケズリが施されている。内面は黒色処理されているが、ミガキは観察できない。6はロクロ成形である。底部は回転ヘラ調整が施されている。内面は黒色処理され、ミガキが加えられている。器厚が比較的薄い。7は底部が欠けて平底かは不明である。外面体部は手持ヘラケズリが施され、内面は横方向のヘラミガキが加えられ、後黒色処理が施されている。8・10は2点共ロクロ成形である。底部は平底で口縁部で外反する。内面は黒色処理されているが、ミガキは磨滅が激しく観察できない。9は肩部が強く張り出す杯で、口縁部で短く内湾する。外面体部はヘラナデ後、ヘラミガキが施され、口縁部は横ナデ、のちミガキが加えられている。内面は黒色処理され、ミガキ痕がわずかにみられる。

甕(11~15) 11はC-2グリッド、14はC-1グリッドより出土している。11は底部のみ約 $\frac{3}{4}$ の残存。14は底部約 $\frac{1}{4}$ の残存である。2点共粘土紐痕が見られ、外面底部に木葉痕を残す。11は体部下端にヘラケズリされている。12・13・15は甕の口縁部で $\frac{1}{6}$ ~ $\frac{1}{9}$ 残存の小破片を復元実測した。12はC-3グリッド、13・15はC-2グリッド第1層より出土している。12・13・15は口縁部で強く「く」の字に外傾する。13はロクロ目が明瞭である。12は外面口縁部横ナデ、内面は黒色処理後、横方向のミガキが施されている。15は内外面共体部はヘラナデ調整が施されている。口縁部は外面に横ナデが施されている。

須恵器(第43図 第20・21図版)

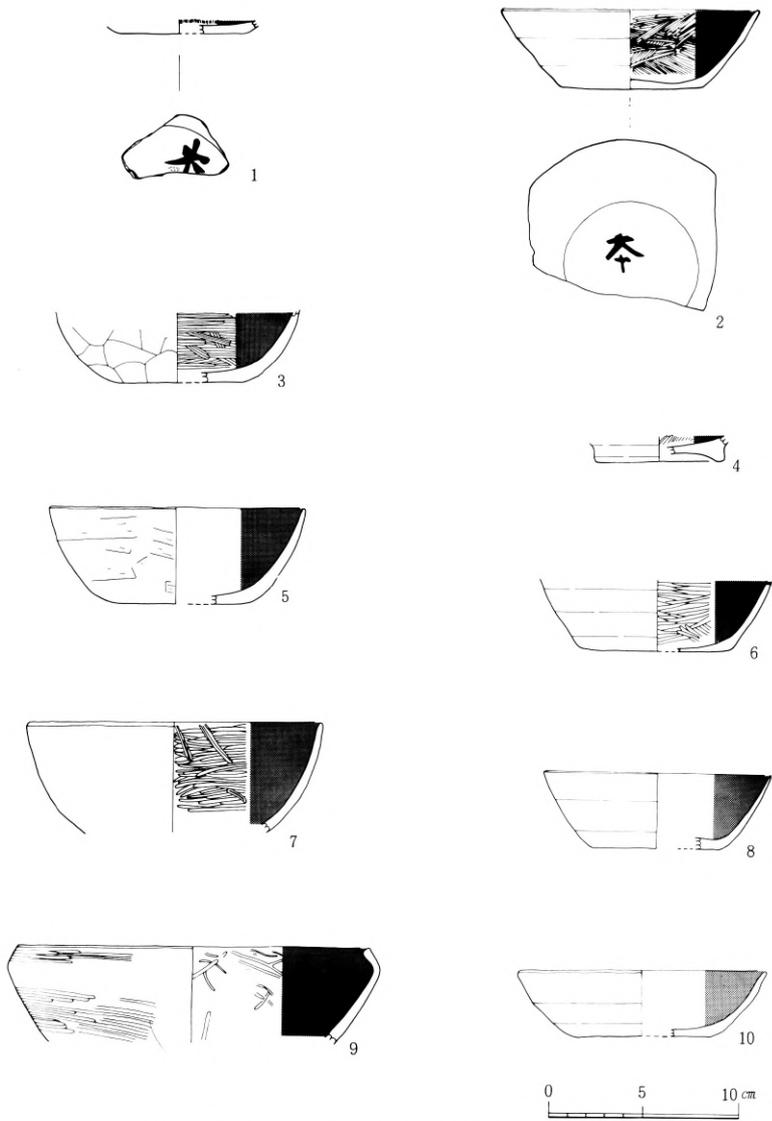
杯(17・19) 17はB-3グリッドより出土、底部と体部下半約 $\frac{1}{2}$ の残存、19はC-1グリッド第2層より出土した底部と体部下半約 $\frac{1}{5}$ 残存の破片である。底部は平底で、外面底部は回転系切りで、体部下半は回転ヘラケズリが施されている。色調は17は黄灰色、19は灰色を呈している。焼成は良く、胎土は緻密である。

高台付杯(18) B-5グリッドより出土した高台部約 $\frac{1}{5}$ の残存である。高台部は1.5cmと高く、直線的に外に開く。底部切り離しは小片により不明である。色調は灰色を呈している。

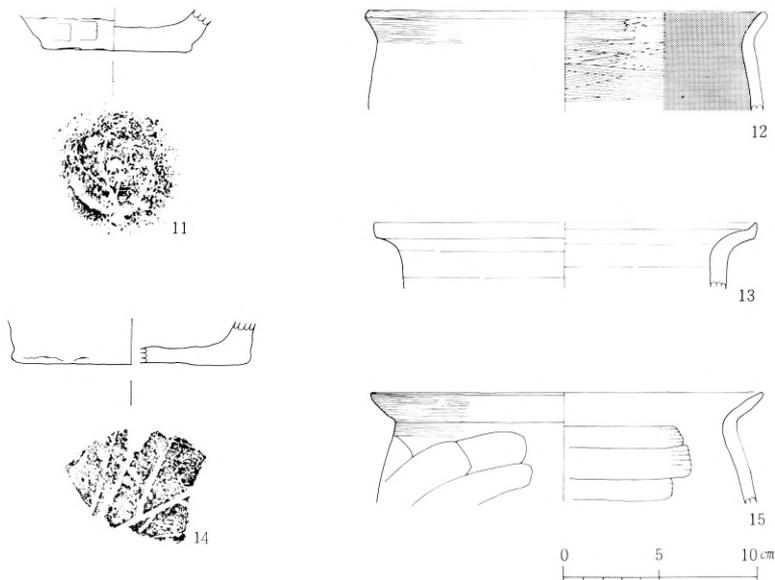
甕(16・20・22) 16はC-3グリッド第1層より出土した頸部約 $\frac{1}{8}$ の残存である。肩部が張ると思われる。頸部内外面共ロクロによるナデが施されている。頸径は18.3cmを測る。20はC-2グリッド第2層より出土、22はB-3グリッド第1層覆土内より出土している。頸部から口縁部にかけての破片である。外面は20は6本、22は7本の波状文が施されている。いずれも焼成は良く堅緻で、色調は16は青灰色、20は灰色、22は暗灰色を呈し、自然釉がある。

壺(21・23) 21はB-3グリッド覆土内より出土した。肩部から口縁部にかけて約 $\frac{1}{5}$ が残存する小形の短頸壺である。肩部から急に頸部へ内湾し、口縁部に至る。体部内外面共ロクロ目が明瞭である。肩部最大径は9.8cmを測る。焼成は良く、色調は暗灰色を呈している。23はB-3グリッド覆土内第3層より出土している。肩部から胴部上半で脹らみ、下半は丸味をもちながら絞まる。内外面共ロクロ成形によるナデが施されている。頸部はハリツケによる接合が見られる。肩部と口頸部の境目に一条の稜線を有する。焼成は良好で堅緻である。色調は灰色を呈し、外面に釉がかっている。

円面硯(24~26) 24は西南端、第2層より出土している。硯面の約 $\frac{1}{4}$ と圈台の一部が残存する。平坦な陸部と据広がりの圈台と海部に1.4cmの溝がある。25・26はC-2グリッド内第2層より出土した体部と脚部約 $\frac{1}{9}$ の残存である。脚部は据広がりをもつ。3点共圈台には縦線の平行文様の沈線が巡られ、25・26に透し窓(2.9cm)が一部に観察される。



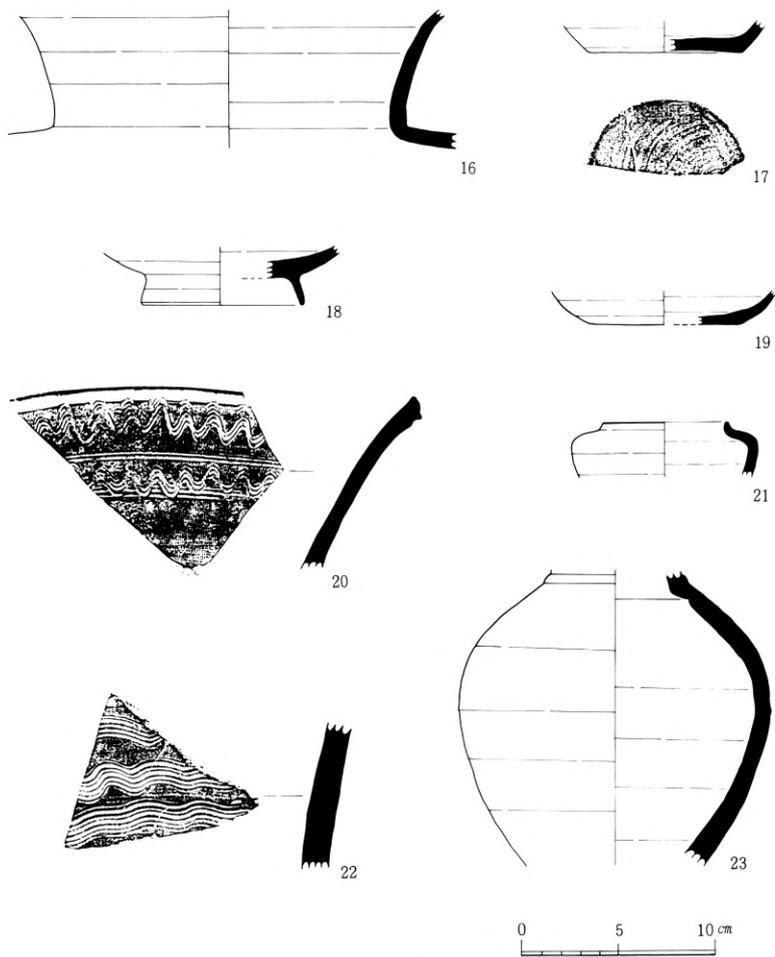
第41图 第1号遗物包含層(SX01)出土遺物実測図



第42図 第1号遺物包含層(SXO1)出土遺物実測図

第12表 第1号遺物包含層(SXO1)出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	部位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	41-1		C-3G	*			6.5cm			ロクロ	回転ヘラ	ミガキ	内黒墨書
*	*	-2	20-1	C-2G	*	13.7cm		7.4cm	4.2cm		*	*	*	内黒墨書
*	*	-3		C-2G	*			6.4cm			非ロクロ	手持ヘラ	*	内黒
*	高台付杯	-4		C-2G	L-2			6.8cm		0.6cm	ロクロ		*	*
*	杯	-5	20-2	C-2G	*	13.2cm		6.6cm	5.1cm		非ロクロ	手持ヘラ	*	*
*	*	-6		C-3G	*			7.8cm			ロクロ	回転ヘラ	*	*
*	*	-7		*	*			15.4cm					*	*
*	*	-8		C-2G	*	12cm		6.6cm	4cm		ロクロ		*	*
*	*	-9	20-3	*	*	18.2cm	19.3cm				非ロクロ	ミガキ	ミガキ	*
*	*	-10		*	*	13cm		7cm	3.5cm		ロクロ	回転ヘラ	*	*
*	壺	42-11		*	*			7.6cm			ロクロ	ヘラケズリ	*	木葉痕
*	*	-12		*	*	20.8cm	20.4cm					横ナデ	ミガキ	内黒
*	*	-13		*	L-2	19.8cm					ロクロ		*	*
*	*	-14		C-1G	L-1			12.4cm					*	木葉痕
*	*	-15		C-2G	*	20.3cm	19.6cm					ヘラナデ	ヘラナデ	*
須恵器	杯	43-16	20-4	C-3G	*						ロクロ	横ナデ		
*	杯	-17	-5	B-3G	*			8cm			*			
*	高台付杯	-18	-6	C-3G	L-2			8.5cm		1.5cm	ロクロ			
*	杯	-19		C-1G	L-1			7.6cm			*			
*	壺	-20	20-7	C-2G	L-2						波状文	ロクロ		自然釉
*	壺	-21	21-1	B-3G	覆土内	6.5cm	9.8cm					*		*
*	壺	-22		*	L-1						波状文			自然釉
*	壺	-23	21-2	C-3G	L-3		16.3cm					*		*



第43図 第1号遺物包含層(SXO1)出土遺物実測図

鉄製品(第44図 第21図版)

刀子(27・28) 27はC-2グリッド第2層より出土した。刀長、17.2cm、巾1.7cmで先

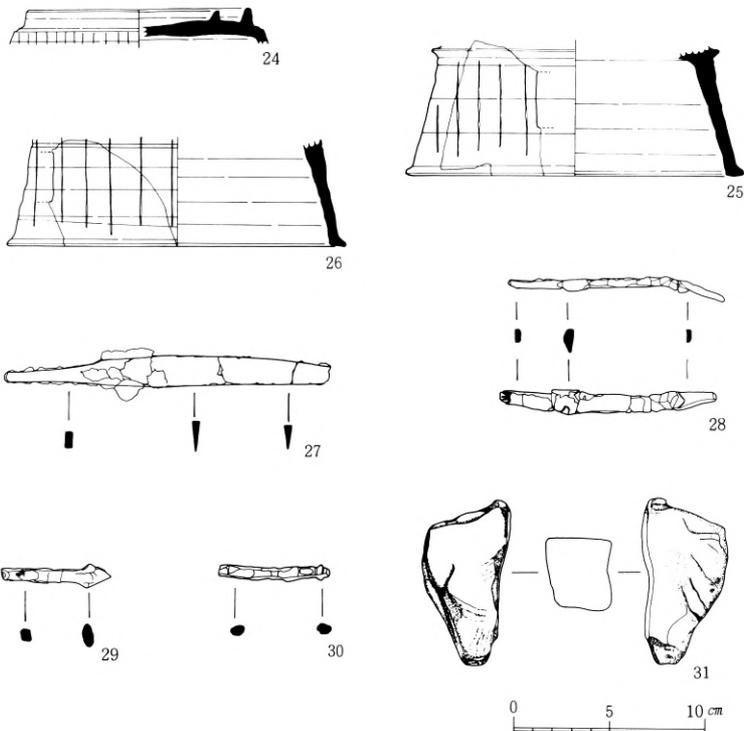
端は欠損している。刀身の断面は三角形を呈し平造りである。28はC-2グリッド覆土内より出土した。刀長11.5cm、巾1.3cmを測る。腐蝕が著しいが刀子と思われる。

鉄鏃(29) C-3グリッドより出土している。矢の根部は三角形を呈している。茎部は断面方形の棒状体がついている。現存する大きさは、矢の根部1.6cm、巾1.2cmを測る。茎部は元の部分が欠している。

釘(30) C-2グリッドより出土している。折釘で断面形は方形である。

石製品(第44図31 第21図版7)

砥石(31) C-3グリッド覆土内より出土している。両面共良く使用されており、平滑である。巾4.2cm、長さ8.8cmを測る。色調は緑茶灰色を呈している。



第44図 第1号遺物包含層(SXO1)出土遺物実測図

## 第2号 遺物包含層(SXO2)

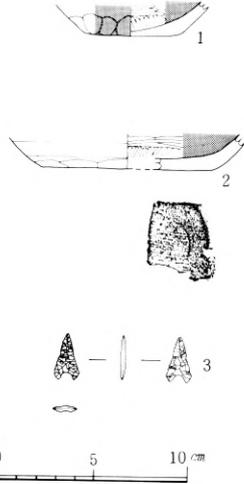
1号堀立柱建物の南西部7mにあり、南東斜面に巾7m、長さ15mに黒色土の堆積土層があり、このなかに、土器等の遺物が検出された。遺物包含層の層序は10層に大別される。東部壁ぎわ15mと西壁ぎわ17mには自然堆積が認められるが、中央部には攪乱によると考えられるピットが2ヶ所確認された。

### 土師器(第45図 第21図版)

杯(1・2)1はL-4グリッド覆土内より出土し、底部と体部下端約 $\frac{1}{3}$ の残存である。平底で平径が5cmを測る小型の杯と考えられる。ロクロは使用されず、外面体部下端にヘラケズリ、底部に手持ヘラ調整が施されている。内外面共黒色処理で、内面はミガキが施されている。2はL-2グリッド覆土内より出土した底部と体部下端約 $\frac{1}{4}$ の残存である。成形はロクロにより、底部は平底を呈す。底部は静止糸切りで切り離した後、外面体部下端に手持ヘラ調整が加えられている。内面は黒色処理の後ミガキが施されている。

### 石器(第45図3)

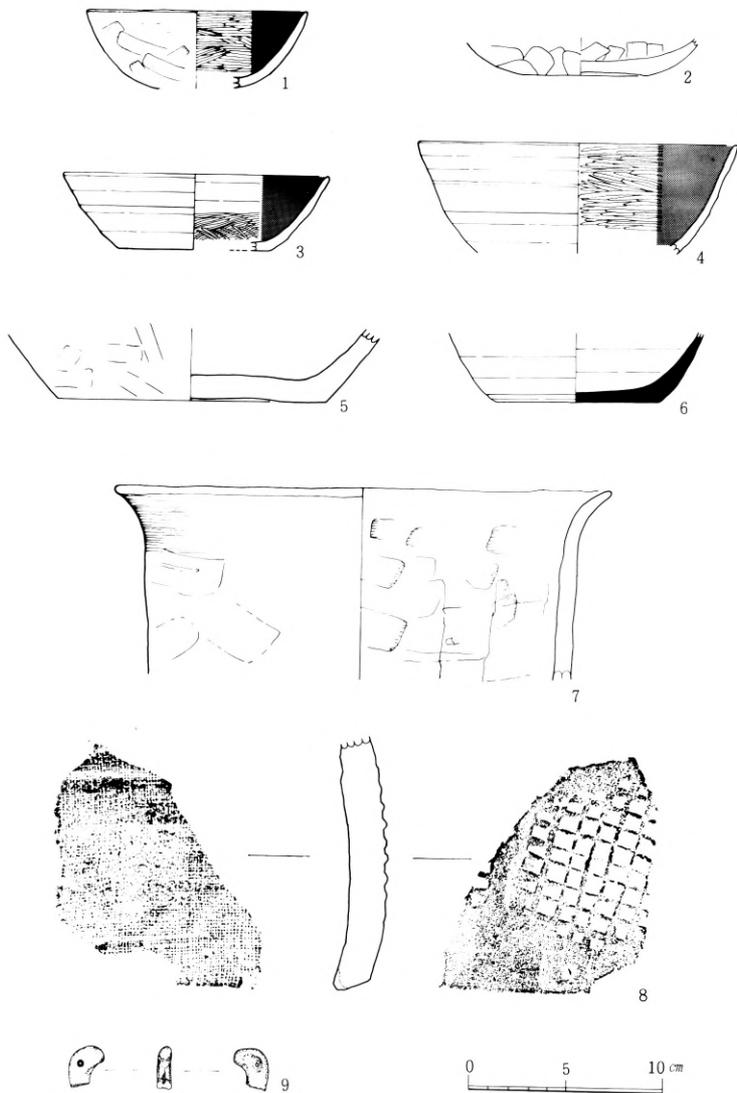
石鎌(3)L-2の遺構検出面より出土した石鎌である。石質は石英で、色調は赤色を呈し、形態は基部の凹部の挟りが大きく、先端部は鋭角な尖りを呈する。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ2.5mmを測る。



第45図 第2号遺物包含層(SXO2)出土遺物実測図

第13表 第2号遺物包含層(SXO2)出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	45-1	21-1	L-4G	覆土内			5 cm			ロクロ	手持ヘラケズリ 手持ヘラ	ミガキ	内外黒 内面静止糸切り



第46図 遺構に伴わない出土遺物実測図

#### 第4節 遺構に伴わない出土遺物

出土遺物で実測できた物は少ない。遺物最南端から瓦片が1点、平底で手持ヘラ調整の杯が1点、遺跡中央西側より勾玉1点、丸底のロクロ未使用の杯が1点出土している。これらは住居跡との関連は不明である。F-5グリッド、1号建物跡西側からロクロ成形の杯が2点、長甕の口縁部が1点出土している。D-2グリッドより甕の底部破片が1点、又、須恵器の杯の底部破片が1点出土している。

##### 土師器（第46図 第22図版）

杯（1～4）1はC-6グリッド第2層より出土した約 $\frac{1}{5}$ の残存である。底部は欠損しているが丸底と思われる。底部は体部へ丸みをもちながら口縁部で外傾する。ロクロは使用されず。外面体部は手持ヘラ調整され、内面は黒色処理が施され、横方向のヘラミガキが施されている。2はD-2グリッド第1層より出土した底部のみ約 $\frac{3}{4}$ の残存である。平底でロクロは使用せず。外面は体部下半に手持ヘラケズリが見られ、内面はヘラナデ調整が施されている。器厚は若干厚味をおびている。3はF-5グリッド第2層より出土し約 $\frac{1}{4}$ の残存である。成形はロクロによる。底部は平底であり、体部へ若干の丸みをもって外傾する。外面体部は回転ヘラケズリでヘラ調整が見られ、口縁部には横ナデが施されている。内面は黒色処理された後、ヘラミガキが施されている。4はF-5グリッド第2層より出土した口縁部約 $\frac{1}{7}$ 残存の破片である。体部よりやや直線的に口縁部へ外傾する。成形はロクロによる。外面は回転ヘラケズリ調整である。内面は黒色処理の後、横方向のミガキが施されている。

甕（5・7）5はD-2グリッド覆土内より出土した底部と体部下端約 $\frac{1}{3}$ 残存である。ロクロは使用せず、平底である。底部より体部へ直線的に外傾する。外面調整は底部、体部共、手持ヘラ調整が施されている。内外面共摩滅が激しい。7はF-5グリッド第2層より出土した。口縁部と胴部上半約 $\frac{1}{5}$ 残存の甕である。胴部は直線的に口縁部まで続く胴長形を呈し、口縁部でゆるやかに外反する。外面は胴部にヘラナデが見られ、口縁部に横ナデが施されている。内面に粘土紐の引き伸ばし痕が若干見られ、ヘラナデ調整も施されている。

##### 須恵器（第46図 第22図版）

杯(6)6はD-2グリッド第2層より出土した底部の破片である。ロクロ成形によるロクロ目が内外面共明瞭である。底部から若干丸みをおびて立ち上がり、体部は内湾気味に外傾している。外面体部下端に回転ヘラ調整が施されている。

##### その他の遺物（第46図 第22図版5）

瓦(8)8はC-1グリッド第1層より出土した瓦片である。凸面に正格子の深い叩目をも

ち、叩き合わせが行なわれている。凹面に布目が見られ、外線はヘラケズリである。厚み1.8cmを測る平瓦である。

勾玉(9)9はC-6グリッドの表採による。灰色がかった白地に、黒、灰、茶の筋模様が見られる。厚みは8mm弱、縦約2cm、横、最大巾約1.7cm、最小巾約1.1cmを測る。中心に小孔を有し、直径2mmを測る。

第14表 遺構に伴わない出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	遺構	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	46-1		C-6G	覆土層-2	11.6cm						手持ヘラ	ミガキ	内黒
"	"	-2	22-1	D-2G	覆土層-1			6.5cm				輪紐の手持ヘラ	ヘラナデ	
"	"	-3	-2	F-5G	覆土層-2	13.9cm		7.8cm	4cm		ロクロ	回転ヘラ	ミガキ	内黒
"	"	-4		"	"	16.7cm					"	"	"	"
"	壺	-5	22-3	D-2G	覆土内			14cm			粘土紐	手持ヘラ	"	
須恵器	杯	-6	-4	"	"			8.3cm			ロクロ	回転ヘラ	"	
土師器	壺	-7		F-5G	覆土層-2	26cm	22cm				粘土紐	手持ヘラヘラナデ	ヘラナデ	

## ま と め

天開遺跡は阿武隈川の西岸にあり、工場用地として造成の予定である。

基盤をなす地層は粘土層が覆っている。現在の遺跡の立地状態は、東に三城目の集落を望み、北は鏡石町に接し、西部は山林及び水田である。

### 周辺の遺跡との関連

三城目は古墳時代以来の遺跡が多く特に久当山横穴群、弘法山古墳群などが知られている。吉作遺跡、後原遺跡、谷中遺跡など古代の集落跡が多い。

三城目の地名は律令時代の条里制の名残とも、村内に3つの城があったためとも伝えられている。

今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡12軒、掘立柱建物2軒、土坑2基、遺物包含層(SX01)、(SX02)などで、土師器、須恵器、瓦(1点)等が住居跡に伴って大量に出土した。これらの土師器は杯の調整技法の特徴から、国分寺下層から表杉ノ入式にわたる時期のもので、8世紀中葉から9世紀に及ぶ時期のものと考えられる。

以上のことから各遺構の時期については2期に分けることが出来る。

第1期はS107、S108、S111、S112、SB01の5棟で竪穴住居等の床面出土の土師器よりその創建期は、国分寺下層期であるが、奈良～平安時代にかけて継続的に変遷したことが考えられる。

第2期は、S101、S102、S103、S104、S105、S106、S109、S110、SB02は表杉の入の古い時期から各期にわたっているところから、平安時代の時期から継続的な時期の変遷がたどれる。

最後に、今回の調査にご協力下さいました関係各機関ならびに地元三城目の皆様に深く感謝申し上げます。

# 圖 版





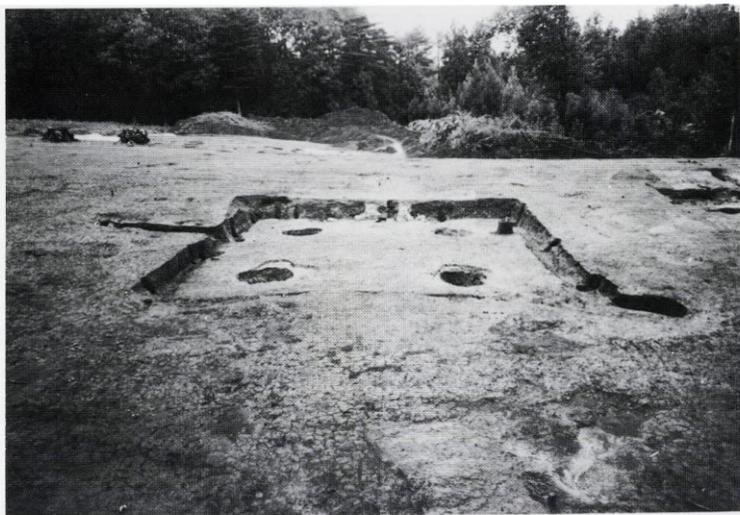
第1図版 遺跡全影(南より)



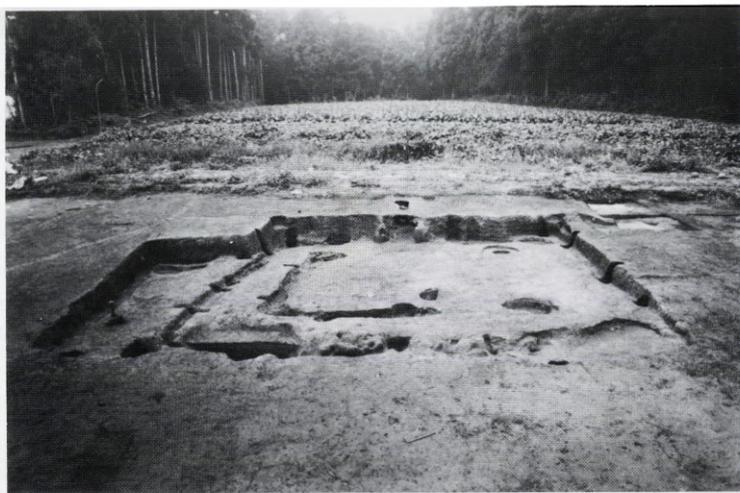
第2図版 第1号建物跡(南より)



第3図版 第1号住居跡(西より)



第4図版 第2号住居跡(西より)



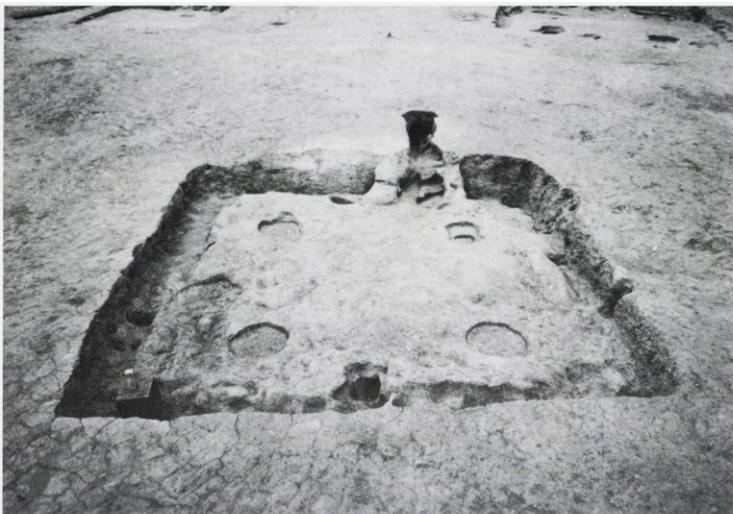
第5図版 第3号住居跡(南より)



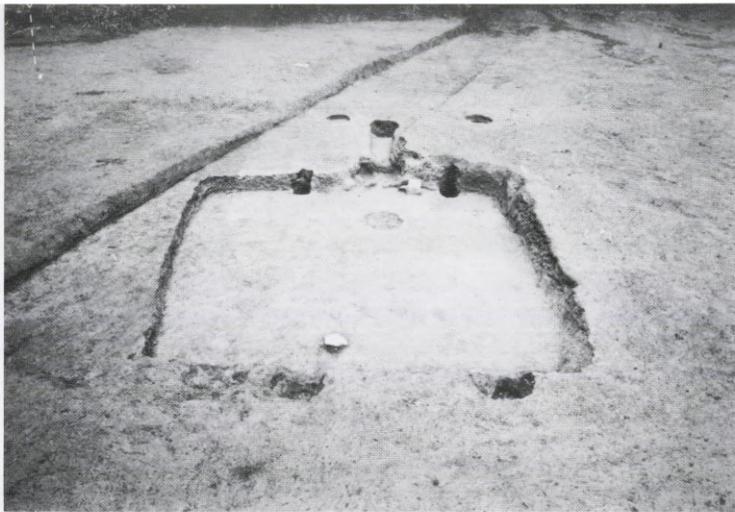
第6図版 第5号住居跡(南より)



第7図版 第7号住居跡(西より)



第8図版 第8号住居跡(南より)



第9図版 第9号住居跡(南より)



1



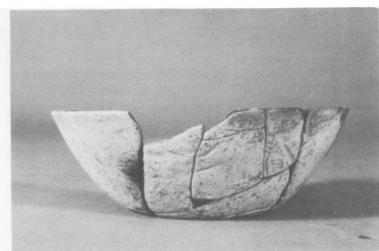
2



3



4



5



6

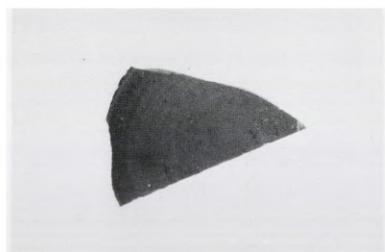
第10図版 第1号住居跡出土遺物(1~6)



1



2



3



4

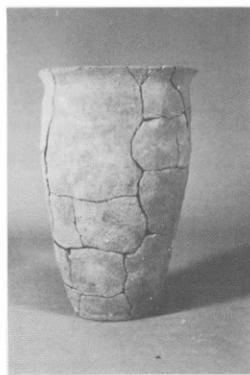


5



6

第11 図版 第1号住居跡(1~6)



第12図版 第2号住居跡出土遺物(1~5)



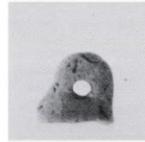
1



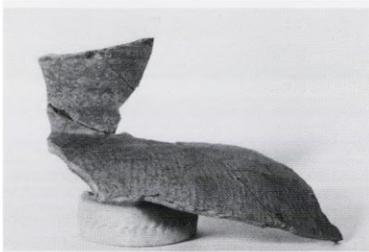
2



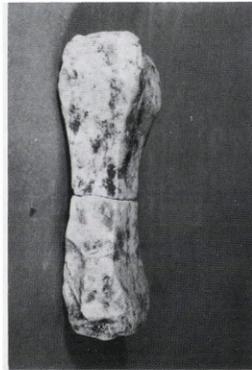
3



4



5



6

第13図版 第2号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5

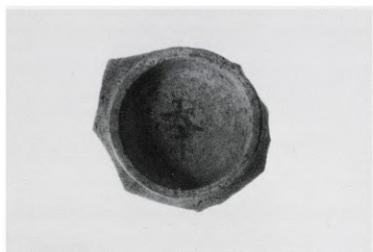


6

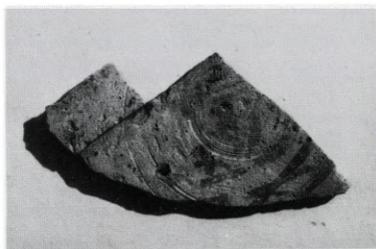


7

第14図版 第3号住居跡出土遺物(1~7)



1



2



3



4



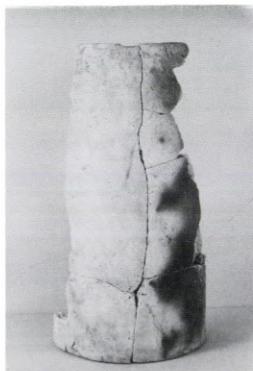
5



6

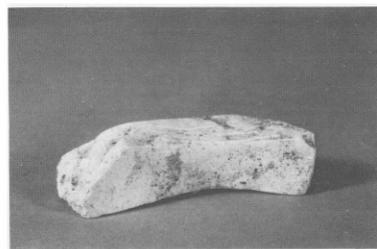
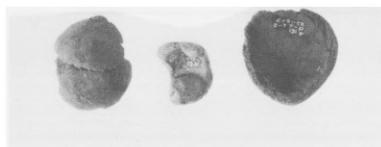
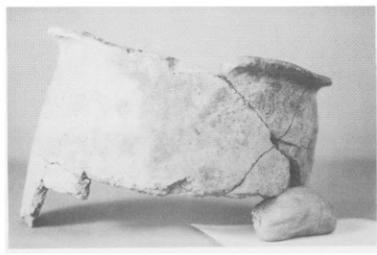
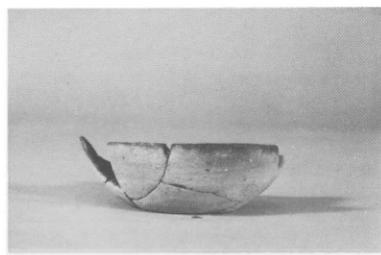
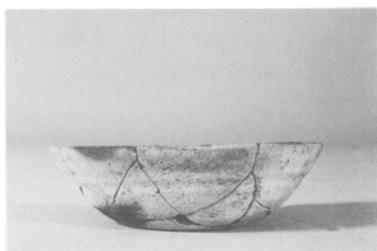


7

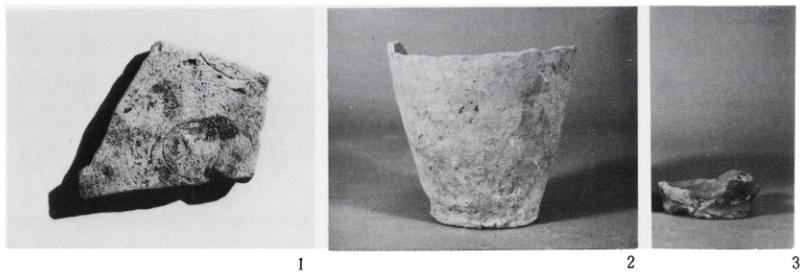


8

第15図版 第4号住居跡出土遺物(1~3)  
第5号住居跡出土遺物(4~8)



第16図版 第6号住居跡出土遺物(1~2)  
第7号住居跡出土遺物(3~4)  
第8号住居跡出土遺物(5~8)



1

2

3



4



5



6



7

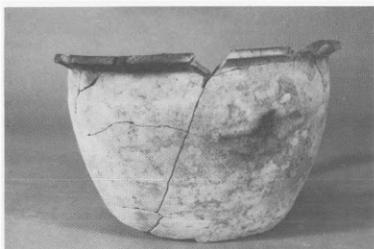
第17図版 第8号住居跡出土遺物(1~7)



1



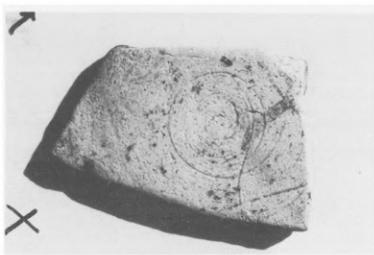
2



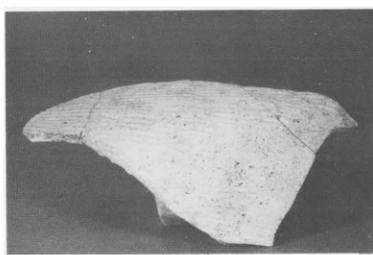
3



4

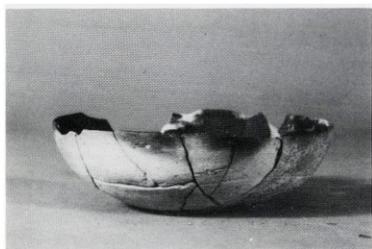


5

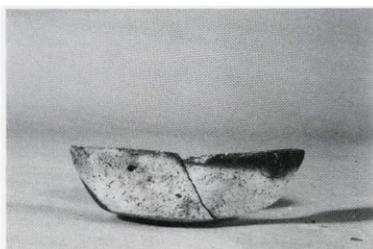


6

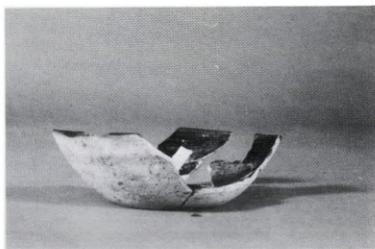
第18図版 第9号住居跡出土遺物(1~4)  
第10・11号住居跡出土遺物(5~6)



1



2

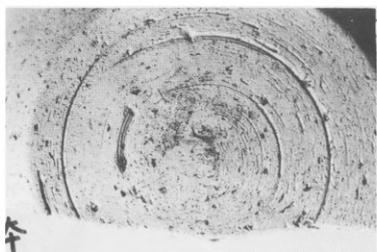


3



4

第19図版 第1号土坑出土遺物(1~4)



1



2



3



4



5



6



7

第20図版 第1号遺物包含層(SX01)出土遺物(1~7)



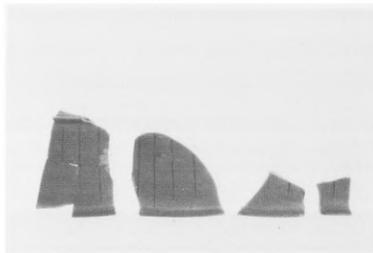
1



2



3



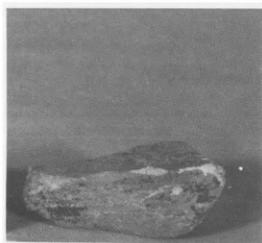
4



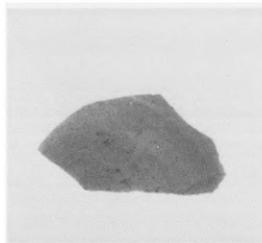
5



6

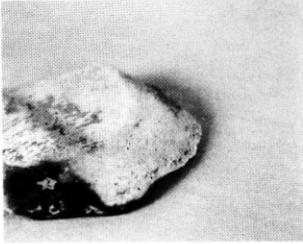


7



8

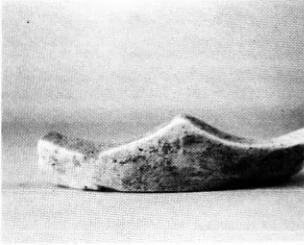
第21 図版 第1号遺物包含層(SX01)出土遺物(1~7)  
(円面硯—3,4)  
第2号遺物包含層(SX02)出土遺物(8)



1



2



3



4



5



6

第22図版 遺構に伴わない出土遺物(1~6)

# 天開遺跡発掘調査報告書

昭和61年10月25日印刷

昭和61年10月31日発行

編集・発行 福島県矢吹町一本木101番地  
矢吹町教育委員会

印刷 福島県須賀川市北町86番地  
せきね印刷所